

入資 料V

明治 九（一八七六）年
十（一八七七）年 分

山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

——山口地方裁判所所蔵裁判史料より——

広島修道大学「明治期の法と裁判」研究会

代表 矢野達雄

加藤 高

紺谷 浩司

上川内 宏

目次

一 解題

二 目次表（二）

三 本文読下し（二）【一】～【五二】

四 注の部（二）

五 写真（三葉）

六 本文読下し（二）【五三】～【九〇】

七 目次表（二）

八 注の部（二）

（以上『修道法学』第四一卷第一号）

（以上 本号）

六五二（三五〇）

六 本文読下し(二)

〔一〇四A〕【五三】【目次五一】【定約金違約之訴】^(注76)
明治十年第九号*

申渡

山口縣第七大區四小區下松村

□□□□番屋敷 商 庄藏妻

原告 A U キヌ

山口縣第十大區十小區中市町

□□□□番屋敷寄留 士族

右代人 U Z 惟章

定約金違約之訴

山口縣第五大區九小區麻郷奥村

□□番屋敷 士族

被告 M T 国一郎

山口縣第二十大區十一小區萩□□

〔一〇四B〕

□□□番屋敷 士族

右代人 S D 忠之亮

其方共一件遂審理処

原告ハ被告M T 国一郎ヨリ給禄米ノ内年々

四俵宛分ヲ受来リタル処国一郎ヨリ給禄奉還

ノ儀ヲ出願シ許可相成リタルニ付此先キ毎年
分与スヘキ四俵ヘ対シ一時ニ金九拾円ヲ渡シ之レニテ
前約ヲ果サント示談スルニ依リ其分ヲ許諾シ
九拾円ノ内拾貳円ハ明治九年一月廿三日領受シ
残り七拾八円ハ明治九年九月十七日ニ證書引換
ニシテ相渡スヘク段国一郎ヨリ定約書差出シ其節ニ
引換フル證書ハ如此相調フヘシトテ相渡シタル案文
ノ大綱ハ九拾円ノ金ヲ受納セシ上ハ如何ナル事出来
〔一〇五A〕

スルトモM T 家ノ厄介ニハ相成間敷トノヲ記載
シ親戚間之レニ奥書シテ保証ヲナスノ旨趣ナリ
依テ案文ノ如ク證書相調持參セシニE D 基介*

*「輔」と朱書き。以下同じ

云者ヲ受人ニ相立テスシテハ需ニ応シ難キ旨申スユヘ
案文ニ其氏名ノ記載モナク將タ受人ハE D 基介ニ
限ルトノ契約ヲナシタルヲモ無之ニ付不條理ノ段
糾問ニ及フ処明治九年十月五日内金三拾円ヲ相渡
セシユヘ成ルヘクハ被告ノ乞ニ任セントE D 基介ヘモ
受人ニ相立呉ル、様依頼シタレトモ基介(輔)肯セサルヲ以テ
夫A U 庄藏竹内俊平等ヲ受人ニ相立テタレトモ
兎角故障申立殘金不相渡ニ付全額九拾円ノ内
兩度ニ受納セシ四拾貳円ヲ引去殘金四拾八円速ニ相

渡サンヲ請求セリ

〔一〇五B〕

被告ハ安政三年*十月MT信平ノ養子ト為リ文久

* 西曆一八五六年
* 西曆一八六二年

二年*正月家督セシ処AU庄藏妻キヌハ養家

ノ姉ニテ養父存生中ヨリ給禄米ノ内半々四俵宛

分与致シ来リシユヘ自分家督ノ後モ相替ラス給与

セシ処明治七年九月給禄奉還ノ儀出願シ明治

八年五月許可相成タルユヘ此先毎年分与スヘキ

四俵ヘ対シ一時ニ金九拾円ヲ渡シ之レニテ前約ヲ果サン

ト示談セシニキヌ承諾シタルニ付九拾円ノ内拾貳円

明治九年一月廿三日相渡シ残り七拾八円ハ明治九年

九月十七日ニ證書引換ニシテ相渡スヘクト定約書差出

右期限ニ引換ユヘキ證書案文ヲモ相渡シタリ其案文ノ旨趣ハ

原告申立ノ通相違無之尤之レニ奥書スル保証人ハED基介ト申

者ヲ相立ツヘキ旨口演ナシ置タルニ右期日ニ証書持参セス明治九

年十月キヌ来リ

〔一〇六A〕

勢ヒ強ク相迫リ三拾円ヲ取歸リ其後明治九年

十一月十六日証書持参セシユヘ一見スルニ最前

申置タルED基介ノ保証ニ非ルユヘ金子ト引換

ノハ許諾セサリシナリ必竟明治九年九月十七日

ノ期限ニ証書持参セス彼ヨリ破約ニ及シヲ以テ
此金ヲ渡スヘキ義務ヲ免レ還^{マツ}テ是迄渡シタル
四拾貳円ノ全額ハ原告ヨリ差返スヘキ筋ニ可
有之旨答弁セリ

依テ判決スル左ノ如シ

被告ニ於テ原告最初ノ契約ニ違ヒED基介〔輔〕

ヲ受人ニ相立サルノミナラス定約ノ期日ニ証書

持参セサルハ彼レヨリ破約ナセシモノニ付金円

引渡ノ義務ハ免レタル段申立ルト雖モ受人ハ

〔一〇六B〕

ED基介ニ限ルノ憑証ナク且約定書中

定期ヲ經過スル時ハ契約消滅スルノ明文モ

無之ユヘ破約トノ申分難相立依テ金高

九拾円ノ内既ニ相渡セシ四拾貳円ヲ引去残額

四拾八円ハ速ニ被告人ヨリ原告人ヘ引渡スヘシ

明治十年三月三十一日

主 七等判事 寛 元忠 印
主 十六等出仕 鈴木 円平 印
副 一級判事補 進 十六 印

ハ資料V

修道法学 四一卷 二号

六四九 (三四七)

〔一〇七A〕【五四】【目次五二】預金催促之訴^{〔法7〕}

明治十年第百六拾七号*

* 本行朱書き

申渡

山口縣第二拾大區拾小區菰

□□□□番屋敷 士族

原告

N T 喜一

預金催促之訴

山口縣第九大區八小區西佐波令

□□□□番屋敷 士族

被告

K R 耕三

其方共一件遂審理処

原告ハ文政八年酉ノ四月**先々代意伯江戸へ西暦一八二五年

登ル節旧山口藩札六貫目ヲ身元ノ父兄K R

仙藏同萬太郎へ預ケ置タル処意伯ハ文政拾年

〔一〇七B〕

三月年齡貳拾貳歳ニシテ江戸ニ於テ病死シタル

ノ後右預金差返シ呉ル、様自分父ノ代ヨリ引続

追々催促スレトモ兎ヤ角申立不差返ニ付速ニ返弁

センヲ請求セリ

被告ハ四世ノ祖K R仙藏父子ノ者文政八年酉ノ

四月N T意伯ヨリ旧山口藩札六貫目ノ預り金

アリトハ父祖ノ申伝ヘモ無之既ニ五拾有余年ノ

星霜ヲ経タレハ手形ニ比照スヘキ印類^{*}印影モ存在

* はんこ、印形(いんぎょう)のこと

セス且N T、K Rノ両家ハ三拾年前ヨリ音信不通

ニテ催促ヲ受ケタルヲモ無之ニ付右預り金有之トハ

萬々信用シ難キ旨答弁セリ

依テ判決スルヲ左ノ如シ

該訴ノ証書タルヤ幾多ノ年月ヲ經過セシ

〔一〇八A〕

モノニシテ其證印ニ比照スヘキ印影モ存在セス

且其明文ニ意伯幼少中預リ置クトアリテ

原告人ノ陳述ニヨレハ該証書ノ成立シタル文政八年

ハ意伯年齡貳拾歳ナリ之レヲ旧山口藩制ニ

照スモ拾九歳ハ既ニ丁年ナルニ貳拾歳ニシテ

幼年ト記スルノ謂レナク其陳述証書明文ニ反シ

共ニ徴スヘキ憑拠ナキモノニ付原告人ニ於テ

該証書ヲ以テ被告人ニ対シ預金返済ヲ請求

スル因由之レ無キモノトス

明治十年四月十四日 掛 七等判事 山本 昌行 印

主 十六等出仕 鈴木 円平 印

副 一級判事補 進 十六印

〔一〇八B〕

(記述なし)

右詞訟審理スル処

原告ハ被告ST傳之助ニ貸金アルヲ返済期

限ニ至リ催促セシニIT吉太郎ヨリ傳之助返

金調達成リ難ク就テハ明治八年*旧曆八月迄

* 西曆一八七五年

猶予スレハ吉太郎返償スヘキ趣ノ示談ヲ諾^{うなづ}ヒ明治

八年旧曆四月二日証書面元利金百三円貳拾錢

現金受取預リ米証書一同引渡シノ書面ヲ渡シ置

ケトモ右現金ハ實際受取ラス吉太郎ニ催促中最

前引渡シタル証書ヲ以テ吉太郎ヨリ傳之助ニ催

促スレトモ故障申張ルニ依リ再ヒ譲返シ度トノ示

談ヲ承諾シ明治十年三月一日**右証書并關係書類

〔一〇A〕

** 西曆一八七七年

悉皆引受ルニ付元利合金百三拾四円八拾八錢償却ヲ

受度旨請求セリ

被告ハ原告本人SY源右衛門ヨリ最前米入質

借金セシハ相違ナシト雖モ期限ニ至リ返済金持參

質米証書共受返シ度申入レシニ右事件ハIT吉太郎

ヨリノ示談ニ任セシユヘ關係ナキ旨答ラレ吉太郎ニ

詰問シ借米相違ナキノ答ヘヲ聞キ現米受返度申

聞スレトモ調達成難キ由ユヘ^{よんじやう}抛^なナク猶予シ期限後

米価日々下落ニ差向キシニ其相場ヲ以テ計算スヘ

クト不当ノ申掛ニテ迷惑容易ナラサルユヘ承諾セサ

〔一〇九A〕【五五】【目次五三】【貸金催促訴^(注78)】
明治十年第百六拾号 印* * 本行朱書き、「山本」の丸朱印

申 渡

山口縣第拾三大區九小區郡村

□□番地居住 農 SY源右衛門 代人

山口縣第拾三大區七小區山川村

□□番地居住 農

原告人 NM 卯之助

貸金催促訴

山口縣第拾三大區九小區廣瀬村

□□番地居住 士族

被告人 ST 傳之助

山口縣第拾三大區九小區郡村

□□番地居住 商

〔一〇九B〕

引合人 IT 吉太郎

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完) 六四八(三四六)

ハ資料

リシヲ終ニ右証書吉太郎ヨリ源右衛門ニ譲リ返セシ歟自分ニ於テハ一切知ラサル旨答弁セリ

引合人ハ原告人SY源右衛門ヨリ借金返済期限ニ

(一一〇B)

至レトモ調金成リ難キユヘ一時立替呉ルヘクト被告人

ST傳之助ヨリ依頼ヲ受ケ源右衛門ニ示談ノ上

返〔納〕済ノ都合ニテ返金受取并証文引渡ノ証書受取

シ後傳之助ニ対シ立替金返済ヲ促セトモ証書面ノ

入質米過当ノ代積リヲ以テ計算スヘクト不条理申

張ルユヘ源右衛門ニ示談シ明治十年三月一日最前

譲受ノ証書并関係ノ書類譲リ返セシ旨陳述セリ

依テ判決スルヲ左ノ如シ

該訴ノ証書タルヤ借金返済済ヲ催促スルノ権利ハ明

治八年五月七日*即チ旧曆四月二日付証書ニ拠リ引

*西曆一八七五年

合人IT吉太郎ニ譲与セシモノニシテST傳之助ヨリ

尽スヘキ義務ハ更改セリ而テ明治九年太政官第九

拾九号布告アルノ後明治十年三月一日**再ヒ此譲リ

(一一一A)

返シヲ受タルモ被告人ノ改証セシモノニ非ス右布告ニ因

リ無効ノ証書タルヲ以テ原告人ニ於テハ貸金ノ償還ヲ

求ムルノ權利ヲ有セサルモノトス

修道法学 四一卷 二号

六四七 (三四五)

明治十年五月四日

掛 七等判事 山本 昌行

主 一級判事補進 十六印

副 四級判事補 高野 薫印

(一一一B)

(記述なし)

(一二一A) 【五六】 【目次五四】 【証書取戻之訴】^(注80)

明治十年第五拾壹号*

所長印**

申 渡

山口縣第拾貳大區七小區

奥萬倉村□□□屋敷 士族

原告 T T 瀧二郎

証書取戻之訴

山口縣第拾貳大區四小區

榎原村□□□□番屋敷 士族

被告 MU 新太郎

山口縣第拾大區拾壹小區

大市町□□□□番屋敷 平民

引合人 KB 源右工門

其方共一件遂審理処

(一一二B)

原告ハ実父TT武知金円借出シノ世話ヲ被告

MU新太郎ヘ依頼セシニ山口町KB源右工門ナル者

ヨリ借受ル筈ニ付源右工門名宛ノ証書差出スヘシト

新太郎申スニ依リ明治八年五月*所有ノ耕地三反

* 西曆一八七五年

三畝貳拾壹歩書入金百貳拾七円明治八年十二月

返済期限ノ借用證書ヘ地券証相添渡方致シ

現金受取ルノ際ニハ必ス通知致シ呉ル、様其節ハ

受取人ヲモ可差越ト申合セ置シニ其後日数相立テ

トモ何タル事モ不申越ニ付證書地券証トモ差返ス様

催促セシニKB源右工門養子源兵衛ト申ス者新太郎

ヨリ受取ルヘキ飲食料有之ニ対シ右證書ヲ押ヘ取り

居ルニ付彼者ヨリ取還シ明治八年十月十九日迄ニハ

相違ナク差返スヘクトノ一札父武知ヘ宛テ新太郎ヨリ

(一一二A)

差出シタレトモ兎角遷延ノ内明治八年十二月父武知

病死シ須臾^{すなはち}催促ニ怠リタル処明治九年二月*ニ至リ

* 西曆一八七六年

父武知ヘ貸金有之段KB源右工門ヨリ承リ新太郎ノ

所置不審ニ付詰問ニ及シニ格別ノ申訳モナク明治

九年三月十五日迄ニハ證書差返スヘクトノ一札更ニ差出

セシユヘ其分ニ勘弁致セシニ期限等閑ニ打過ルノミ

ナラス還テ證書金額ノ内貳拾円借受タルヲ自分

俱々費用シタリト申セトモ其儀一切無之ニ付速ニ

證書地券証トモ返却セシヲ請求セリ

被告ハ原告実父武知ヨリ金円借出シノ世話ヲ依頼

セラレKB源兵衛口入ヲ以テ彼者養父源右工門ヨリ

借受ル筈ニ契約相調同人名宛ノ借金證文并地券

証ヲモ武知ヨリ受取り金円拝受ノ際ニ臨メハ之ヲ武知ニ

(一一三B)

通知シ別段受取人ヲ差越スノ申合ナレトモ元來

武知トハ別懇ノ間柄ユヘ臨時便宜ニ依リテハ證書ト

金円引換ノ上武知ヘ相渡スノ心得ニ有之然ルニ證書

金額百貳拾七円ノ内貳拾円明治八年六月借受タレトモ

瀧二郎俱々諸所ニテ費用シ武知ニ相渡サ、リシユヘ

武知ヨリ催促セラレ申訳ケ無之ニ付明治八年十月

十九日迄ニハ證書地券証トモ可差返トノ一札ヲ差出シ

其後武知ハ死去シ瀧二郎ヨリ證書地券証トモ返シ

明治 九(一八七六)年 分

山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

六四六(三四四)

呉ル、様催促ヲ受ケシニ之レヨリ先キ源右エ門父子ノ者共
瀧二郎兄弟及ヒ自分共買物代飲食料ノ滞リ有之
内ヘ右證書ノ殘金百七円ヲ立用ノ儀自分ノ許諾ニ
依リ差引勘定ニテ相済タレハ現金貸渡セシモ同様
ナト、故障申立テ證書地券証トモ不差返ニ付

〔二一四A〕

源右エ門父子ヲ詰責シ取返スヘキ心得ニテ明治九年
三月十五日迄ニハ瀧二郎ヘ差返スヘクトノ一札ヲ渡シ
置シニ今日ニ至リテハ右借受タル貳拾円ヲ俱々費用
セシハ無之段瀧二郎ヨリ申立格別証拠モ無之ニ付

此貳拾円ハ自分ノ引受トナルモ詮方ナシト雖トモ源兵衛方
ノ飲食料買物代等ヲ武知借金證文ニテ差引

立用スルヲ許諾セシハ一切無之ヲ源右エ門父子ノ
者トモカ、ル難題申掛クルハ不条理至極ニ付既ニ

借受タル貳拾円ヲ払入ナハ源右エ門ヨリ證書地券証トモ
差返スヘキ筋ニ可有之然ラサレハ原告ノ求メニ応シ難キ旨答弁セ

リ

引合人K B 源右エ門ハ明治八年五月T T 武知ナル者商事
資本金入用ニ付所有ノ耕地書入借金相成間敷哉

相談致シ呉ル、様止宿ノ客人M U 新太郎ヨリ相頼マレ

〔二一四B〕

シ趣養子源兵衛ヨリ相咄セシユヘ急速ニハ何分ノ決答モ

相成難シト申聞セ置シニ其後源兵衛ヨリM U 新太郎
及武知ノ男退三瀧二郎兄弟トモ止宿飲食料

買物代等百円余モ相滞リタル処武知ヨリ差出シタル
證書金額百貳拾七円ノ内ニテ飲食代等ヲ引去リ

殘余ヲ現金ニテ借受度段新太郎ヨリ示談有之タル旨
相咄セシユヘ新太郎ヘ相對ノ上委細ヲ承ルニ源兵衛ノ

申分ト同様ニ付證書地券証トモ受取貳拾円ハ現金
貸与ヘ百七円ハ源兵衛方ノ飲食料買物代ノ滞リヲ

立用シ自分ト源兵衛トノ間ハ別段ノ差引ヲ以テ勘定
相済セシユヘ全ク自分ヨリ百貳拾七円ヲ貸渡セシモ

同様ニテ最前武知ヨリ新太郎ヘ委任ノ權限ヲモ告知
セサレハ公正ノ證書并ニ地券証ヲモ所持スル新太郎ハ

〔二一五A〕

武知ノ代人タルハ無論ト認定シ貳拾円ノ金ヲ相渡
シ飲食料買物代ノ滞リヲモ立用致セシユヘ武知ト直ニ

取引セシモ同一ナレハ今日ニ至リ瀧二郎新太郎ヨリ
故障申立ル筋ハ有之間敷旨陳述セリ

依テ判決スル左ノ如シ

第一條 原告ニ於テ金円授受ノ際ニ臨メハ被告

ヨリ之ヲ通知シ別段受取人ヲ差越スノ口約ヲナシ
タル旨申立ルト雖モ此約定タルヤ恃リ原被ノ間ニ通用

スルモ債主ヘ掛合置カサルヲ以テ債主ヘ對シ無効ノ

陳述トス

第二條 引合人ニ於テ負債主武知ヨリ新太郎へ

委任ノ權限ヲモ告知セサレハ公正證書并ニ地券証ヲ
所持スル新太郎ハ即チ武知ノ代人ト認定シ瀧二郎

〔一一五B〕

兄弟及ヒ新太郎等ノ飲食料買物代ノ滞リヲ差引

立用セシモ新太郎ノ許諾ヲ得タレハ本人武知ト直ニ
取引セシモ同一ナル旨申立レトモ新太郎ニ於テ承諾
シタルニ非ル段申立ルノミナラス仮令承諾ヲ受タルモ
別段武知許諾ノ証ヲ得スシテ三人ノ負債ヲ差引

立用スルノ理由無之然レトモ金貳拾円ヲ渡シ新太郎ニ於テ
之ヲ受取タルハ武知ヨリ差入レタル証書面貸借契約ノ
幾分ヲ行フタルモノニシテ受授ノ効有リトス

第三條 被告ニ於テ債主ヨリ受取リタル金貳拾円ハ

原告俱々費用セシ段申立レトモ原告ニ於テ一切關係セサル
旨申立到底拗ルヘキ証左無之ニ付被告申分難相立

必竟被告人ニ於テハ證書ノ殘額ヲ債主ヨリ受取り
先ニ領受セシ貳拾円ヲ相添全額百貳拾七円ノ金員ハ

〔一一六A〕

原告人へ引渡スヘキ責ヲ免レサルモノトス

第四條 前条々ノ筋合ナルヲ以テ原告人ニ於テハ
金円ヲ受取ントスルノ請求ハ為スヲ得ヘケレトモ今更

被告人ニ対シ證書并ニ地券証ヲ取返サントスルノ
理由無之モノトス

明治十年五月九日*

掛 七等判事 山本 昌行 印

* 西曆一八七七年

主 十六等出仕 鈴木 円平 印

副 一級判事補進 十六 印

〔一一六B〕

（記述なし）

〔一一七A〕【五七】【目次五五】【貸米催促之訴^(注81)】

明治十年第百八十二号*

所長代理**

* 本行朱書き
** 「山壽」の丸朱印

申 渡

山口縣第貳大區九小區
舟木村□□番屋敷 平民
原告 OB 宗之助

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）
十（一八七七）年

六四四（三四一）

△資料▽

山口縣第拾壹大區八小區下郷

□□番屋敷 平民

右代人 SB 敬三

貸米催促之訴

山口縣第拾貳大區九小區船木村

□□番屋敷 平民

被告 FI 吉兵衛

山口縣第拾大區拾小區中原町

〔一二七B〕

□□□□番屋敷 平民

右代人 KG 休右エ門

其方共一件遂審理処

原告ハ明治三年十二月*米拾五石明治四年二月期限ニテ

* 西曆一八七〇年

第拾貳大區九小區舟木村FI吉兵衛ヘ貸渡此外ニ

明治三年四月ヨリ明治三年八月迄ノ間ニ旧山口藩札拾

七貫目貸付置タル処明治四年八月吉兵衛ヨリ旧藩札

六貫目差入タルニ付米拾五石ヲ壹俵四斗四升入ノ俵ニシテ

三拾四俵零九朱零九拂ヲ壹俵ニ付旧藩札百四拾目ノ

相場ニテ此代銀四貫七百七拾貳文目七分貳厘六毛ヘ明治

三年十二月ヨリ明治四年七月迄八ヶ月々別壹歩三朱ノ

利足四百九拾六文目三分六厘三毛ヲ加ヘ五貫貳百六拾九文目

修道法学 四一卷 二号

六四三(三四一)

八厘九毛トナル此レヲ六貫目ノ内ニテ引去残り七百三拾目九分

〔一一八A〕

壹厘壹毛ノ過銀ヲ直クニ預リ置矢張壹歩三朱ノ

利足ヲ付ケ明治六年六月迄ノ元利合シテ九百七拾目四厘

壹毛ノ高ヲ貸金ノ内ヘ納入ノ計算書明治六年七月

吉兵衛ヘ相渡置タル処貸金ノ返済相滞ルニ付明治

十年二月二日吉兵衛ニ掛リ貸金催促ノ儀出訴セシニ

其節被告ニ於テ右六貫目ノ請取ヲ一ツノ証拠ニ相立テ

タルユヘ是ハ貸米代ニ受取リタルニテ貸金ノ納入ニアラサル段

申聞セタレトモ不聞入到底米代ニ受取リタルノ明文無之ヲ以テ

所詮申分相立間敷ト見込右ヲ貸金ノ納入トスルナラハ

貸米ノ返済ヲ請求セント思念シ訴狀願下ケ更ニ此度

貸米催促ノ出訴ヲ為シタルニ被告ニ於テ明治十年二月

ニハ借金ノ内ヘ差入レタリト主張セシ六貫目ヲ今日ニ至リテハ

還テ借米拾五石ノ元利ヘ払入タリト申立ルハ不条理至極

〔一一八B〕

ニ付證書ノ貸米元利トモ速ニ返済センヲ請求セリ

被告ハ明治三年十二月*米拾五石明治四年二月期限ニテ

* 西曆一八七〇年

OB宗之助ヨリ借受タルハ相違無之然ルニ右ハ明治四年

八月**旧山口藩札六貫目ノ内ヲ以テ払入請取書モ有之尚

** 西曆一八七一年

明治六年七月^{***}宗之助ヨリ調へ呉タル計算書中九百七拾目

^{***}西曆一八七三年

四厘壹毛ノ但書ニ拾五石ノ貸米代銀立テニシテ返弁ノ過銀

ヲ貸金中ニ立用スルノ明文モ有之彼此レ拾五石ノ借米ハ

元利返済セシヲ判然タル処原告ニ於テ明治十年二月^{*}

^{*}西曆一八七七年

貸金催促出訴ノ節六貫目ハ米代ニアラス借金ノ内へ納入

タル様自分ヨリ申出タル趣ニ此度申立ツレトモ左様ノ儀ハ

一切無之還テ其砌原告ヨリ右六貫目ノ受取書ハOB造三

名前ニテ宗之助ノ名前ニ非ルユヘ別途ノ貸金へ払入タル分ナト、

故障申立タレトモ素ヨリ米代金ナルヲハ明治六年七月ノ

〔二一九A〕

計算書ニテモ明瞭ニテ畢竟米金ヲ合シテノ計算ナレハ

右六貫目ハ米金ノ内イツレノ納入ニ立用致シ呉ルトモ勝手ニ

任スヘケレトモ只利息ノヲニ至リ示談不相調終ニ原告ヨリ

訴狀願下ルニ至リタル節後日又ハ訴ヘラレテハ迷惑ニ付

米金ヲ合シ利足モ至当ノ計算書相調呉ナハ一件相片付度

願下ハ不同意ト申タレトモ訴訟入費モ原告ヨリ弁償スヘク

トノヲニ付不得止其分ニ承諾セシ所其後至当ノ計算書

モ不差越シテ米金合一ノ計算済迫其俣ニ差置タル

払済ノ證書ヲ以テ貸米催促ノ出訴ニ及タル段尤不条理

至極ニ付原告ノ求ニ応スヘキ筋ハ無之旨抗弁セリ

依テ判決スル左ノ如シ

第一條 原告ニ於テハ明治十年二月^{*}出訴ノ節^{*}西曆一八七七年

被告自ラ借金ノ内へ差入タリト主張セシ六貫目ヲ

〔二一九B〕

今日ニ至リ前言ヲ翻覆シ貸米返済ノ用ニ

立ントスルハ不条理ノ段申立被告ニ於テハ還テ原告

コソ六貫目ハ出訴ニ関セサル別途貸金ノ内へ受取

タルナト故障ヲ申セシ旨申立ルト雖モ共ニ無証

ノ争ニ付互ノ申分採用ヒ難シ

第二條 原告ニ於テ明治六年七月^{*}被告へ渡シタル

計算書中米拾五石ハ代銀ヲ以テ受取其残余ノ^{*}西曆一八七三年

元利九百七拾目四厘壹毛ヲ貸金ノ納入ニ立用シタル

ヲ相見ヘ且先キニ出訴セシトキ六貫目ハ貸米代金

ノ内へ受取りタリトハ原告自ラ陳述スル所ニシテ

計算書ノ旨趣ト符合スルヲ以テ已ニ貸米ノ

返済ヲ受ケタルヲ明カナレハ今後之ヲ請求スル

ノ筋ハ無之事

〔二二〇A〕

明治十年六月十二日^{*}

掛 一級判事補 山崎 萬幹 印

^{*}西曆一八七七年

主 十六等出仕 鈴木 円平 印

副 四級判事補 伏見 孝廉 印

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

六四二（三四〇）

〔二二〇B〕

(記述なし)

修道法学 四一卷 二号 六四一(三三九)

原告ハ明治八年三月^{*}古酒四斗入百五拾挺壹挺ニ付

^{*} 西曆一八七五年

代価貳円五拾錢宛ニシテ被告ヘ売渡シ代金ハ被告ノ

頼ミニ依リ壱岐国辺ヘ運送売捌婦船ノ後払入度

トノヲ承諾シ代金三百七拾五円無利足ニテ借用致スノ

証書被告ヨリ取置右ノ内百五拾円ハ明治九年四月ト

七月^{**}ニ請取り殘金貳百貳拾五円ノ前早々払入ル、様

^{**} 西曆一八七六年

数度催促ニ及ヘトモ今以払方不致此外ニ山口縣下

協同会社米券八拾五石ヲ代価六百拾貳円ニシテ明治

七年十二月十五日^{**}被告ヘ売渡是レモ同人ノ頼ニ任セ代価

^{**} 西曆一八七四年

六百拾貳円ヲ改テ利息月別壹歩付ニシテ明治八年二月

期限ノ借用証書受取置シニ此内元利金ヘ対シ明治

八年七月迄ニ五百九拾三円三拾三錢三厘払入殘金返済

相滞ルニ付催促ニ及ヒシニ明治八年五月廿四日付ニテ

〔二二一A〕

差越セシ計算書ニ八拾五石ヲ誤テ八拾石ノ代積ニテ

差引シタルヲ以テ今日ニ至リ五石ハ受取不申ナリ故障

申立ツレトモ前条兩度ノ貸金催促勸解出願中酒代

貸金受取殘貳百貳拾五円ノ半方五ヶ年賦返済ノ勘弁

ヲ乞ヒタル節五石ヘ当ル借用金ハ速ニ可払入段申シタルヲ

〔二二一A〕【五八】【目次五六】【貸金催促之訴】^(注82)

^{*} 本行朱書き

明治十年第五拾壹号^{*}

申渡

所長代理 印^{**}

^{**} 「山崎」の丸朱印

山口縣第九大區七小區宮市町

□□番屋敷 平民

原告 A B 恭輔

貸金催促之訴

山口縣第九大區壹小區富海村

□□□□番屋敷 平民

被告 M N 柳之進

山口縣第拾大區拾壹小區堅小路町

□□□□番屋敷 平民

右代人 N H 基祐

其方共一件遂審理処

〔二二一B〕

モ有之且是迄八拾五石ノ代価借用証書ヲ返シ呉ル、様
ニトノ掛合ヲ受シモ無之就テハ五石ノ代金未タ相済サルヲ
ハ被告ノ心ニ覺ヘ可有之尚又貳百貳拾五円ノ内半方ハ
年賦返済ニ勘弁スキ間幸ヒ親類ニ相当ノ人柄有之ヲユヘ
保証人ニ相立テヘシト申セシニ右ハ調ヒ難キ由ニテ別ニ
引当ツル者ハ所詮慥カナラサル者ノミニ付終ニ示談不
相調依テ兩度ノ貸金払不足利子付ノ分ハ利息トモ
速ニ被告ヨリ返済ヲ受タキ旨陳述セリ

〔一二二B〕

被告ハ明治八年三月*古酒四斗入百五拾挺代金三百七拾

* 西曆一八七五年

五円ニテ原告ヨリ買得シ壹岐国ヘ運漕売捌船ノ上
代金可相払約定ニテ借用證書差出シ置其後明治九年

四月ト七月**二百五拾円払入残り貳百貳拾五円ノ半方年賦

** 西曆一八七六年

返済ノ勘弁ヲ乞ヒシ所年賦払入ノヲハ承諾致シ呉レタレトモ

原告望ム所ノ人柄ヲ保証人トスルヲ得ス終ニ示談不

相調此外ニ明治七年十二月十五日**原告ヨリ八拾五石ノ

** 西曆一八七四年

米券買得ノ筈ニテ此代価六百拾貳円利息月別壹歩

ニテ明治八年二月期限ノ借用証書差入タルハ相違ナ

ケレトモ其節都合之レ有リ八拾石ノ外受取不申就テハ

八拾石ノ證書ニ調替可申哉ニモ相考タレトモ渡サ、ル
モノヲ渡シタリト申様ナル原告ノ人体ニ非ラスト信シ
其俣ニ差置キ明治八年二月迄ニ五百四拾円ノ金ヲ払入
〔一二三A〕

タル処明治八年五月廿四日恭輔ヨリ是迄ノ払入金ヲ差引
残り元利五拾三円三拾三錢三厘四毛早々返済スル様計
算書差越タルユヘ明治八年六月十一日ト七月廿二日兩度ニ
相払是ニテ八拾石ノ代価借用元利皆済ニ相成タリ然ルニ
今日ニ至リ最前其俣ニ差置タル八拾五石ノ代価ヲ記セシ
証文ヲ以テ八拾石ニアラス八拾五石ナリト申立レトモ八拾石ナル
ヲ

ハ明治八年五月廿四日付原告自筆ノ計算書ニテ明瞭ナル
ヲ誤テ八拾石ト相認メタリト云ヒ且勸解出願中酒代

借用殘貳百貳拾五円ノ半方ヲ年賦納入ノ相談ヲ致セシ
トキ五石ヘ当ル代金ハ直ニ可払入段自分ヨリ申シタリトハ

即今設ケタル言葉ニシテ甚不都合ノ儀ニ有之畢竟

両条トモ原因売掛代金ニシテ貳百貳拾五円ノ酒代残り

モ示談上ノ取引ハ兎モ角モ裁判ヲ仰クニ至リテハ出訴

〔一二三B〕

期限モ過去リタルモノニ付最早引渡スヘキ義務ヲ

免レタルモノト心得居ルノ段答弁セリ

依テ判決スル左ノ如シ

△資料▽

修道法学 四一卷 二号

六三九 (三三七)

第一條 被告ニ於テ該訴借金ニ元來買得物品

ノ代価ナルモ更ニ借用証書差入ル、ノ際売掛金ハ

既ニ尋常貸借金ニ改リタレハ出訴期限モ規則

第一條ニ依ルヘキモノニ非ス依テ引渡スヘキ義務ヲ

免レタリトノ被告申分相立難シ

第二條 被告ニ於テ原告自筆ノ計算書ヲ

以テ買得米ハ八拾五石ニ非スシテ八十石ナル旨申立ル

ト雖モ最前證書ヲ書改メサルモ已ニ八拾石ノ代価

皆済ニ至ラハ速ニ證書取返スヘキ筈ナルニ今日迄

依然原告ノ手ニ存在シ別段八拾石タルノ証憑

〔二四A〕

モ無之ニ付原告失誤ト申立ル計算書ニ依リ

八拾五石ニ非ストノ被告申分相立難シ

第三條 前條々ノ次第ナルヲ以テ原告人

請求通り速ニ被告人ヨリ償却スヘシ

明治十年六月十九日

掛 一級判事補 山崎 萬幹 印

主 十六等出仕 鈴木 圓平 印

副 四級判事補 伏見 孝廉 印

(記述なし)

〔二五A〕【五九】【目次五七】【預ケ証書取戻ノ詞訟】^(注83)

明治十年第四拾号*

所長代理 印**

裁判言渡稿

山口縣第四大區壹小區遠崎村

□□□□□番地居住

原告人

商 A M 三郎右衛門

同縣第拾貳大區七小區奥萬倉村

□□番地居住當時 同縣第拾大區拾小區

今道町□□□□番地寄留

右代人

士族 T T 瀧次郎

〔二五B〕

同縣第拾大區拾小區西門前町

□□□□□番地居住

被告人

商 Y 平兵衛

同縣第拾大區拾小區田町

□□□□□番地居住

〔二四B〕

引合人 商 H 半 槌

其方共預ケ証書取戻ノ詞訟審理ヲ遂ル処

原告人ハ明治九年五月廿七日*日半槌へ金貳百円貸付ケ利息月壹歩半

ヲ加ヘ明治九年十月卅一日限り返済ノ契約アル証書ヲ取置ク処期限二至

リ半槌ニ於テ其約ヲ履行セサルニ付右証書ヘ証人ニ相立チタルY平兵衛ヘ

〔一二六A〕

明治九年十月付ケ被告第壹号証ノ委任状ヲ授与シ右貸金催促一件ヲ

嘱シタレ共遷延埒明カス遂ニ明治十年一月六日*平兵衛ヨリ第六号ノ

* 西曆一八七七年

書面ヲ以テ右貸金ハ出訴ノ上ナラデハ道付^マキ難キニ付出訴ノ権限ヲ

委任受ケ度且貸金証書ヲ預リ度旨申越シ第貳号ノ証書ヲ通

送シタレ共第貳号証ハ甚タ粗漏ナルニ付其保留^マ置キ貸金証書ハ相預ケス然ル処其後平兵衛ヨリ第壹号ノ証書并第七号ノ

書面ヲ差越シタルニ付明治十年一月付ケ被告第貳号証ノ委任状右貸金証書共被告第三号証ノ書面ヲ添ヘテ平兵衛ヘ送達セシ処

豈図ランヤ明治十年二月廿五日平兵衛ヨリ第四号ノ書面ヲ以テ右貸金

ハ一旦出訴シタレ共訴状ニ不都合ノ廉有之ニ付訴状ヲ願下ケ更ニ他

〔一二六B〕

ノ代人ヲ以テ出訴シ其訴状ヲ半槌へ相渡シタル処半槌ニ於テハ結局身

代限りヲ以テ償却スル様子ニ相見ヘ夫レニテハ双方迷惑ニ付自分ノ取

計ヲ以テ年賦返済ノ熟談ヲ取結ヒタル趣申越シ且第五号ノ年賦証書ヲ送リタルニ付一応年賦証書ヲ預リ置キ直ニ平兵衛ノ使ヘ被告第四号ノ書面ヲ相渡シ続テ自分手代仙助ヲ遣ハシ平兵衛專

断ヲ以テ年賦証書ヲ受取りタル廉督責ニ及フ処平兵衛ニ於テハ委任権内ノ取計ヒナル旨申立テ貸金証書ヲ返還セス仍テ

不得已明治十年三月十四日*勸解願出タレ共被告平兵衛ニ於テ一切

* 西曆一八七七年

承服セス尚ホ委任権内ノ所為ナル旨主張セリ就テハ勸解不調ト相成タルニ因リ這回及上訴処被告人ニ於テ漸ク右貸金証書ハ

〔一二七A〕

返還スヘキ者ト覚悟シ明治十年四月廿六日第三号ノ約定書ヲ自分ヘ

相渡シタリ仍テ原被連署ヲ以テ済口日延対談書ヲ捧呈シタル処日延期限ニ至リ被告人ニ於テ其約ニ反シ加之目今ニ至リテハ半槌ヨ

リ

貸金証書ヲ取戻ス術策無之抔種々ノ苦情ヲ申立ルト雖モ被告第壹号証ノ委任狀ハ明治十年二月六日出訴ノ節ニ至リ全ク消滅シ又被告第貳号証ノ委任狀ハ明治十年二月六日訴狀願下ケノトキニ於テ既ニ効力ヲ失シタルモノニ付被告人ニ於テ右訴狀願下ケ
ノ後半槌ト内済ノ示談ヲ遂クルナレハ更ニ自分ヨリ委任狀ヲ徴スヘキ
筋ナリ然ルニ其委任狀モ之ナクシテ年賦証書ヲ半槌ヨリ受ルハ被告人ノ專断タルヲ明白ナリ且又明治十年四月廿六日第三号ノ約〔一二七B〕
定書ヲ自分ヘ相渡シナカラ尙今貸金証書ヲ返還セサルハ被告人ノ所為甚タ不条理ニ之アリ仍テ貸金証書ハ速カニ被告平兵衛ヨリ返還受度旨陳述シタリ
被告人ハ原告人ヨリ提供スル第壹号ヨリ第七号マデノ証書類ハ夫々
相渡シタルニ相違之ナクト雖モ右証書ノ原由ハ明治九年五月廿七日原
告人ヨリ日半挺ヘ金貳百円貸付ケ其証書ヘ自分証人ニ相立チタル
処
半槌ニ於テ返金ノ期限ヲ怠リタルニ依リ原告人ヨリ自分ヘ返金ノ
駁
引致シ呉ル、様依頼シタリ就テハ明治九年十月第壹号委任狀ヲ

領収シ貸金催促ノ部理代人ト相成リ爾來數度半槌ヘ返金ヲ
促スト雖モ埒明カサルニ付明治十年一月六日原告人ヘ原告第六号
証

〔一二八A〕

ノ書面并原告第貳号証ヲ相送り右貸金ハ出訴ノ上ナラデハ
道付キニ至ラサルニ付出訴ノ委任受度旨申遣ハシタル処以後何
ノ返答モ之ナクニ付明治十年一月廿六日再度原告第七号証ノ書面
并

原告第壹号証ヲ相送りタル処其節原告人ヨリ第貳号ノ委
任狀貸金証書共第三号ノ書面ヲ副ヘテ通送シタリ依テ明治十年
二月六日半槌ヲ相手取り貸金催促ノ訴訟ニ及フ処訴狀ニ不都合ノ
廉之アルニ付一応訴狀ヲ願下ケ其後第三号書面ノ趣モ有之ニ付
再三相對ヲ以テ半槌ヘ返金ヲ促ス処半槌ニ於テ結局身代限り
ヲ以テ償還ノ外無之抔申立ルニ付夫レニテハ双方共迷惑ナラント
思

慮シ第壹号委任狀ノ権内ニ於テ年賦返金ノ熟済ヲナシ第

〔一二八B〕

壹号ノ委任狀ヲ半槌ニ示シ原告第五号ノ年賦証書ヲ半槌ヨリ
落手ノ上原告人ヘ相送りタル処原告人ニ於テ年賦返金ノ熟済ハ不
承諾ノ趣ニテ第四号ノ書面ヲ差越シ続テ原告ノ手代仙助來リ
兼テ預ケタル貸金証書ヲ返還スヘキ旨督責ヲ受ケタルニ付第
壹号委任狀部理代人ノ権内ニ於テ貳百円ノ貸金証書ヲ半槌

へ還付シ年賦証書ニ改約シタル上ハ今更取戻スヘカラスト返答ニ
及フ処其俣仙助ハ立去リタルニ付原告人モ必ス承允シタルト相
心得居リタル処不図明治十年三月十四日原告人ヨリ自分ヲ相手取
リ

証書取戻シノ義勸解願出テタルニ付委任権内ノ取計ヒナル
旨申立テタル処遂ニ勸解不調ト相成リタリ就テハ今回原告

〔二二九A〕

人ヨリ及上訴ト雖モ自分ニ於テハ固ヨリ委任権内ノ所為ニ付半植
ヨリ

貳百円ノ貸金証書ヲ取戻ス義務ハ無之ト相心得居ル処原告

人ニ於テ頻リ二年賦証書ハ迷惑ノ旨申立ルニ付精々半植ヘ其趣

掛合ヲ遂クヘク心組ニテ出訴中原告人ヘ第三号約定書ヲ相渡

シ対談日延書ヲ捧呈シ爾來数度半植ヘ右ノ趣示談ニ及フ処

半植ニ於テ一切承諾セス然ル上ハ縦令原告第三号約定書

之アリト雖モ年賦証書ノ義ハ兼任権内ノ取計ヒニ付半植

ニ於テ承允セサレハ自分ニ於テ原告請求ニ応シ難キ旨弁駁シタリ

引合人ハ明治九年五月廿七日原告人ヨリ借受ケタル金貳百円ハM

W

惣右衛門ノ負債ニ帰スヘキモノ之アル処惣右衛門留守中ニ付一

時

〔二二九B〕

自分借主ノ名義ヲ以テ貳百円ノ借用証書ヲ原告人ヘ差入レ置キ

タル処惣右衛門ハ遂ニ帰郷セス折柄明治九年十月卅一日返金ノ期
ニ際シ原告人ヨリY平兵衛ヲ代人トシテ頻リニ貸金ヲ催促ニ及
フニ付不得止明治十年二月十三日ニ至リ代人平兵衛ト年賦返金ノ
示

談ヲ遂ケ一応被告第壹号ノ委任状ヲ披見シ原告第五号

ノ年賦証書ヲ平兵衛ヘ相渡シ予テ差入レアル貳百円ノ借用

証ハ返還ヲ受ケタリ然ル処先般以來平兵衛ヨリ貳百円ノ借

用証ヲ戻スヘキ旨督促ニ及フト雖モ実ニ意外ノ駆引ニ之

アリ抑モ年賦返金ノ約ヲ原告ノ代人平兵衛ト取結ヒ既ニ其証

書モ差入レタル上ハ一時皆済ノ約ハ更改シタル訳ニテ貳百円ノ

〔二三〇A〕

借用証ハ既ニ消滅シタルモノナリ且年賦証書ヲ原告代人平兵衛

ニ於テ一旦落掌シタルナレハ全ク年賦返金ノ約定ハ相調ヒタル

筋ニ付縦令目今原告三郎右衛門ト代人平兵衛トノ間ニ紛

議之アルトモ自分ニ於テ更ニ関係之ナク依テ一旦自分ヘ返

還ヲ受ケタル貳百円ノ借用証書ヲ再ヒ平兵衛ヘ相渡ス筋

ハ決テ無之旨申立テタリ因テ原被告引合人等ノ口供

并証拠書類ヲ審閲シ該訴訟ヲ裁決スル左ノ如シ

第一条

原告三郎右衛門ヨリ被告平兵衛ニ授与シタル被告第壹第貳両
号ノ委任状ハ蓋シ三郎右衛門ヨリ裁判庁并借主日半植ニ

〔二三〇B〕

対シ此平兵衛ハ自分ノ代理人タルヲ明示スル証書ニシテ而シテ亦裁判序并借主半槌ニ於テモ右ノ委任状ヲ閱見セハ平兵衛ハ三郎右エ門ノ代理人タルヲ信認シテ毫モ疑ヲ容セス且平兵衛ニ於テモ此委任状ヲ携持セル内ハ公然タル三郎右エ門ノ代人ニシテ三郎右エ門ヨリ半槌ニ掛ル貸金催促事件ニ付刑法ニ触ル、所為ヲ除クノ外半槌ト如何ノ取計ヒヲ為スモ其權内ニシテ三郎右エ門ヨリ其所為ノ是非ヲ咎ムル權ハ毫モ之ナキ筋ナリ如此効力ヲ保存セル委任状ヲ干今原告人ヨリ被告人ヘ与ヘ置キナカラ原告人ニ於テ被告第壹号ノ委任状ハ明治十年二月六日貸金出訴ノ節ニ於テ消滅シ亦被

〔一二一A〕

告第貳号ノ委任状モ明治十年二月六日訴狀願下ケノ際ニ於テ消滅シタルトノ陳述ハ明治六年太政官第二百十五号^(註84)ノ公布委任状ノ旨趣ヲ通曉セサルモノトス

第一条

被告所携ノ兩通委任状ハ前条ノ理由ヲ以テ公正ノモノト認定スル上ハ原告第三号第五号証ヲ除ク外惣テノ証書ハ右ノ委任状ニ対シテ既ニ証書取戻シノ効力ヲ失ヒタリ而シテ又原告第三号ノ約定書ハ被告人ニ於テ年賦証書ノ改約ヲ代人權内ナレ共穩当ナラサル所為ト自ら覚悟シテ原告人ヘ授与シタルハ昭々タリト雖モ右約定書ハ日半槌承認セル連署

〔一二一B〕

押印モ無之ニ付完全ナル約定書ト謂フヘカラス其旨趣ハ原告人ノ被告人ニ請求スル貸金証書ハ日半槌借主ノ証書ニ付半槌承諾セサレハ被告人ヨリ右貸金証書ヲ原告人ヘ返還スルヲ能ハサル筋ナリ然レハ到底右約定書ハ事実ニ於テ原被告ノ間ニ遂ケ得サル契約ヲ為シタルモノナリ且引合人半槌ニ於テ原告第五号ノ年賦証書ハ被告第壹号ノ委任状ヲ披見ノ上原告代人平兵衛ニ相渡シタル旨申述ヘ平兵衛ニ於テモ第壹号委任状ヲ引合人半槌ニ示シタルハ相違無之旨明言スル上ハ今更被告人ヨリ引合人ニ向テ貳百円ノ証書ヲ取戻ス權利ハ決〔シ〕テ無

〔一二一A〕

之然ル上ハ原告第三号ノ約定書ハ被告第貳号兩号ノ委任状ニ対シテ既ニ幾分ノ權利ヲ剥奪セラレ又半槌承認ノ押印之ナキ廉ヲ以テ全ク無効ノ証書ナリト認定ス

第三条

前条々ニ説明スル筋合ナルニ付結局原告人ヨリ被告人ニ向テ日半槌借

主ナル貳百円ノ貸金証書ヲ取戻シ度トノ請求ハ不相立モノ也

明治十年七月三十一日

掛 八等出仕 横地 安信 印
主 十六等出仕 小島 範一郎 印
副 判事補 鈴木 円平 印

(一三三B)

(記述なし)

熊毛郡宇佐木村□□□□番
屋敷 土族 MO 要人 代人
第拾大區拾小區周防国吉敷郡
今道町□□□□番屋敷寄留
士族

T T 瀧二郎

引合

山口縣第五大區拾小區周防国
熊毛郡田布施村□□番屋敷

(注85)

(一三三A)

【六〇】【目次五八】

【頼母子金淹滞之訴】
* 欄外右側上部に朱書き

申渡

所長代理印**

** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

(一三四A)

平民

原告

山口縣第五大區拾小區周防国

熊毛郡田布施村□□番屋敷

引合

山口縣第五大區拾小區周防国
熊毛郡田布施村□□番屋敷

F I 鉄之進

平民 HO 市助 代人 第拾大區

平民

拾壹小區周防国吉敷郡

HO 市藤治

I H 清吉

引合

被告

山口縣第五大區拾小區周防国

山口縣第五大區拾小區周防国

熊毛郡田布施村□□番

熊毛郡田布施村□□番屋敷

屋敷 平民

士族 YM 祐廣外五名人兼
同大區同小區同村□□番

(一三三B)

(一三四B)

F I ラク

屋敷 平民

被告

山口縣第五大區六小區周防国

H T 十右工門

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

六三四(三三三)

ハ資料

引合 山口縣第五大區拾小區周防国

熊毛郡田布施村□□□番

屋敷 平民 MN小太郎代人嫡男

MN 周三

頼母子金淹滞ノ訴訟審理ヲ遂ケシ処

原告代人I日清吉ハ慶応三年卯ノ五月

F I鉄之進発起ノハ丸拾貫目〔錢ハ拾文ヲ以テハ丸壹匁トス

旧山口藩札銀壹匁ハ第五大區内當時通用ノ錢相場ニテ

丸拾五文ナリハ丸拾貫目ヲ銀札ニ引直セハ八貫四百弍拾

〔一二三五A〕

壹匁五厘貳毛余ニテ銀壹貫目ハ新貨拾三円ニ

当ル此金高百九円四拾七錢三厘六毛余ナリ〕*

* カッコ内二行にわたる割注の形で記載

以下同じ

頼母子へ入組明治五年申ノ六月**六番口ヲ

ハ丸九貫目〔即チ金九拾八円五拾貳錢六厘三毛〕ノ落札ニテ取当リタ

ルニ

実弟H〇市藤治ヨリ此頼母子ハ兄ノ所有ニ非ル

ユヘ頼母子人数ヨリノ掛金兄ハ渡シ呉レマシクト

掛合越シタルニ付兄弟間ノ紛争和解迄ハ

市助ノ取当リトハ難定段連中ノ決議ナル旨

発起人鉄之進申張り終ニ市助へ掛合ナク

修道法学 四一卷 二号

六三三 (三三一)

更ニ入札ノ上HT十右エ門ナル者六番口ヲ取当リ

タルハ不条理ニ付鉄之進十右エ門ヲ相手取出訴

〔一二三五B〕

セントスル内鉄之進ハ明治七年*ヨリ他行其

留守ハ妹ラク諸世話致シ頼母子会席等

モ引受心配スル様子ニ付ラクト十右エ門ヲ

相手取明治九年七月十九日*勸解出願シ

兩人共召喚相成リタルニラクハ病氣ニ依リ

十右エ門壹人出頭シ説諭相成リタル上頼母子

連中申合スヘキ由ニテ帰在シ其後ラク和解

庭ヘ一ツノ書付ヲ持參セシユヘ之ヲ披見スルニ

其要旨ハ明治九年頼母子拾番口ハ丸

八貫九百九拾五匁ニテFM善吉取当リタル

〔一二三六A〕

ヲ市助ノ取当リニ振替五百五匁ヲ増シハ丸

九貫五百目トシ此内ニテ六番口ヨリ九番口マテ

市助掛出サ、ル四口先取人ノ返掛ヲ引去

残額ヲ可相渡トノフニ有之然ルニ明治五年*

六番口ノ取当リニ廻リ利足ヲ計算スレハ

我掛戻スヘキ金円ヲ引去ルモ尚百八拾三円

余ノ受取ルヘキ金アリラクガ持參セシ書面ニ

記載スル如クニテハ余分ノ損失アルヲ以テ

承允セサリシニ勸解中頼母子人数惣代

ノ由ニテMO要人出頭シラク共々金百貳拾

(一三六B)

四円ニテ勘弁致シ呉レナハ明治九年八月

三十一日迄ニ金円引渡スヘクトノ二付終ニ許

諾シ第壹号ノ証書ヲ受取シニ百貳拾三円

五拾錢トアリテ五拾錢ノ差違之レ有レトモ僅カ

ノコユヘ其俣ニテ勘弁致シ遣シタリ尤MO

要人F Iラクハ此事件ニ付頼母子連中

ヨリ代理ヲ委任セラレタルヤ否ハ尋問モ不致

委任状ヲモ一見セサレトモ此證書両人氏名ノ

右側ニ惣代ト記シタレハ相違無之ヲト信スル

而已其後期限違約ニ付再ヒ勸解出願セシニ

(一三七A)

明治九年十月三十日迄ニハ無相違可相渡若

違約ノ節ハ金高ヘ毎日壹歩ノ償金相添

渡方可致トノ二テ第貳号ノ約定書受取

タレトモ矢張違約ニ付明治九年十一月廿五日

出訴対決後両度延期勘弁シ明治十年

二月一日ノ期限ヲ過ツニ於テハ其翌日より第

四号約定書ノ通是迄ノ償金ヲ改メ毎日

金高ヘ壹歩ノ利子ヲ加ヘ受取ルノ筈ニ之レ

有タル所又モ違約シ還テ第壹号証書

ハ市助方ニテ相調押印ヲ乞タル様申立ルノミ

(一三七B)

ナラス八九貫五百目ノ内ニテ六番口ヨリ

九番口マテ先取四人ノ返掛ヲ引去殘額六貫

三百目ヲ金員ニ引直シタルモノトノミ思ヒ

何心ナク押印セシナト申立レトモ全ク否ラス

元來受取ルヘキ金額百八拾三円余ヲ百貳拾

三円五拾錢ニテ勘弁致シ遣シタル節證

書ハ彼レヨリ相調印紙ヲモ貼付シタレハ何ノ

金員若干ナルヲ知ラサルノ理アラシヤ依テ

定約證書ノ前ヲ以テ速ニ金円ノ引渡ヲ受

度旨申立

(一三八A)

被告人F Iラクハ明治九年七月原告HO

市助ヨリ自分及ヒHT十右エ門ヲ相手取実兄

鉄之進発起ノ頼母子六番口取当差纏ノ儀

勸解願出自分共召喚相成タル処自分ハ

病氣ニ付十右エ門尅人不取敢出頭間モナク

罷歸リ勸解庭ニ於テ説諭ノ趣モ有之タル

由ニテ頼母子連中ヘ示談シ相片付度トノ二テ

心配シ終ニ連中ニ於テモ明治九年拾番口八九

八貫九百九拾五匁ニテFM善吉取当リ居ル分ヲ連中ヨリ五百五匁相増都合八九九貫五百目

〔一三三B〕

ニテ市助ノ取当リニ振替六番口ヨリ九番口マテ市助掛出サ、ル四口ハ先取人数ニ於テモ亦返掛スヘキ道理無之ユヘ右ヲ引去殘金ヲ可相渡トノヲニ示談相調折柄自分病氣モ稍快ク相成タルニ付右ノ趣ヲ記シタル書付ヲ携ヘ勸解庭ヘ出頭前件ノ旨趣陳述セシニ原告市助ニ於テハ六番口ヨリノ利息相添スシテハ承允シカタキ旨強テ申立タレトモ説論ノ末漸ク自分ノ申立通りニ許諾致シタリ然ルニ金円引渡ノ期限ヲ定ムルヲハ我了簡

〔一三三A〕

ニモ任セサルユヘ在所ノ母マテ申越セシニ親類MO要人山口表ヘ罷出旧曆盆前引渡スニ相決シ約定書ハ原告方ニテ書調呉レ押印ヲ乞フニ付要人モ押印シ自分モ約定通ノ金員ト期限トヲ記シタルモノトノミ思念シ押印ノ上勸解庭ヘハ済口書差出シ在所ヘ罷歸リ金円引渡ノ期限前余分ノ金員相違アルヲ承知シ大ニ驚キ要人俱々其段勸解

庭ヘ申出タレトモ錯誤ノ証拠モ無之ユヘ採用不相成当惑スルノミ手段モ無ク其後第貳号

〔一三九B〕

第三号ノ証書差入タル末明治十年二月一日ヲ期限トシ金百貳拾二円五拾錢引渡スヘク若違約ノ節ハ金高ヘ毎日壹歩ノ利足相添可申段第四号ノ通証書差入タレトモ全ク第壹号金員相違ノ証書ヘ押印セシハ失錯ニ有之且此事件ニ付頼母子人数ヨリ代理委任セラレタル儀ハ無之ト雖モ元来自分ノ疎漏ニ付六貫三百目ハ何時モ原告ヘ引渡シヲ為スヘケレトモ証書全額ノ金員ヲ受取ントスル求ニハ難応旨申答

〔一四〇A〕

被告MO要人代人TT瀧二郎ハ明治九年七月原告HO市助ヨリHT十右エ門FIラクノ兩人ヲ相手取FI鉄之進発起ノ頼母子六番口取当差纏ノ儀勸解出願セシユヘラク出頭シ右頼母子金員市助ヘ引渡ス筈ニハ決シタレトモ何月幾日ト申ス期限ヲ定メスシテハ一件不相濟趣ラク儀山口表ヨリ申越シタルニ付連中ヘ相談セシニ旧曆盆前ニハ取揃ヘ渡方相成ル

ニ付此趣山口へ罷越シラクへ通知ノ上片時モ
早クラク帰在相成ル様ニト両人母ヨリ依頼

〔一四〇B〕

セラレ素ヨリ親族ノ間柄ユヘ直ニ承諾山口へ
罷出勸解庭へモ出頭シ明治九年拾番口ヲ

八丸九貫五百目〔即チ金百四円〕ニテ市助ノ取当リト定メ

此内ニテ六番口ヨリ九番口マテ先取人四口ノ返掛

八丸三貫貳百目〔即チ金三拾五円三錢壹厘六毛〕ヲ引去殘六貫三百目

〔即チ金六拾八円九拾六錢八厘四毛〕ヲ明治九年八月三十一日ニ相渡
ス答ニ

決シ原告方ニテ約定書ヲ調ヘ押印ヲ乞タルユヘ
筆算不調法ナル自分只前段ノ金員ト授受

ノ期限トヲ記シタルノミノヲニ可有之ト何心

ナク押印致シタル処期限ニ迫リ金円引渡方

〔一四一A〕

心配ノ際金員相違ノ趣承知大ニ驚キ其旨

勸解庭へ申出タレトモ失錯ノ証ナキヲ以テ採用

セラレス而シテ第壹号證書自分氏名ノ右側ニ

頼母子連中惣代ト之レ有ルモ委任サレタル儀

ハ一切無之其文字モ読ムヲ不能ノ文盲ナレハ

如此記載アリトハ心付カス押印ヲ為シタレトモ

必竟自分ノ疎漏ヨリ生シタルヲナレハ前段九貫

五百目ノ内三貫貳百目ヲ引去殘八丸六貫三百目
〔即チ金六拾八円九拾六錢八厘四毛〕ハ何時モ可引渡此外ニ償金トシテ
拾貳円差出スヘク旨原告人へ示談スレトモ承允

〔一四一B〕

セサル趣答弁セリ

引合人F I 鉄之進ハ此度H O 市助ヨリ六番

口ヲ取当リタリト申立ルハ丸九拾貫目頼母子ハ

慶応三年卯ノ五月自分發起シ懇意ノ

者共へ加入ノ儀相頼ム折節市助ハ九州辺へ

為商用罷越シ留守ハ同人弟市藤治諸世話

致シ居ルニ付加入ノ儀市藤治へ相頼ミシニ

承諾致シ呉レ其後頼母子会坐ヘモ毎度

市藤治出席シタレトモ同居且兄弟間ノヲユヘ

何レノ所有ナルヤトノ尋問ニモ不及シテ頼母子

〔一四二A〕

帳簿ニハH O ノ屋号鍋屋ト記シ市助ノ名前

ヲ記入致シ置シ明治五年*六番口ヲ市助

取当リタル処弟市藤治ヨリ兄ノ所有ニ非ルユヘ

金円ヲ渡シ呉マシクト掛合越シ市助ハ我所有

ナル旨主張スルユヘ詮方ナク兄弟ノ紛争和解

迫ハ双方ノ内一方へ相渡ス様ニハ不相成ト連中

決議シ期限ヲ定メテ何分ノ落着ヲ待テトモ

何事モ不申越サリトテ其俣ニ差置テハ
頼母子仕法ノ崩レトモ相成ルユヘ連中衆議

更ニ入札ノ上ハHT十右エ門ノ取当リニナリタル

(一四二B)

旨申述

引合人HT市藤治ハ過ル慶応三年卯ノ

五月*八丸拾貫目頼母子発起人FI鉄之進

* 西曆一八六七年

ヨリ加入ノ儀頼ミニ依リ壹口分入組明治三年**

四番会迄掛金致シ居ルニ付テハ自分ノ所有

** 西曆一八七〇年

タルヲ勿論ノ処明治四年未ノ五番会ヘ兄

市助出席シ明治五年申ノ六番口ヲ九貫目

ニテ落札シタル由ニ付此頼母子兄ヘ渡スヲハ

不相成旨発起人FI鉄之進ヘ掛合タル処

双方ヨリ故障ヲ申シテハ甚困却ニ付兄弟

(一四三A)

互ニ申合何分相決スル様ニト返答シタレトモ

是ヨリ先キ財産分与方ノヨリシテ兄弟

間不和ヲ生シ明治三年八月終ニ別居スルニ至リ

シ客体ユヘ右頼母子所有ノ事モ不相片付

月日遷延ス内昨明治九年三月*第五大區

* 西曆一八七六年

扱所ニ呼出サレ兄市助名前ノ頼母子ニ故障

ヲ申スハ不当ノヲニ付此上不心得ノ儀ヲ主張

スルニ於テハ警察処ノ取糾ニモ相成ルヘクトノ

ヲユヘ無余儀兄ヘ引渡スヘキ旨書付ヲモ

差出シタレハ爾来自分所有ノ念ヲ断チ

(一四三B)

タル旨陳述セリ

引合人HT十右エ門ハ明治九年七月原告

HT市助ヨリFIラクト自分ノ兩人ヲ相手取

FI鉄之進発起頼母子六番口取当リ

差纏ノ儀勸解出頭セシニ付召喚相成

其節ラクハ病氣ユヘ自分壹人勸解庭ヘ

出頭シタル処説論ノ旨モ之レアリ平穩熟和

ヲ主トシ一ト先頼母子連中ヘ示談ノ為メ在所

ニ歸リ連中ヘ相談セシニ明治九年拾番口

ヲ八九九貫五百目ニテ原告市助ノ取当リト

(一四四A)

定メ六番口ヨリ九番口迄市助掛金セサル

四口ノ返掛三貫貳百目ヲ引去殘六貫三百目

ヲ市助ニ可相渡ト承允致シタル折柄ラク病氣

快ク相成タルニ付同人ヨリ其趣勸解庭ニ於テ

上申致シタル迄ニテ固ヨリ市助ニ於テ頼母子

惣人数ヲ相手取タル儀ニ無之ユヘ惣人数ヨリ

答弁スヘキ事件ニ非サレハ連中惣代ヲラクヘ

委任スヘキ道理無之且ラクヨリ勸解庭へ
持參セシ由ノ書面ヲ披見スルニ連中ヨリラクヘ
付与シタルモノニ無之乍併頼母子連中ニ

〔一四四B〕

於テモ市助ヘ拾番口ヲ取当ラセ八九九貫
五百目ノ内ニテ三貫目ヲ引去残り六貫

三百目ヲ引渡スヲハ承允セシニ相違ナケレトモ
ラク并MO要人ノ兩人ヘ頼母子事件ニ付

連中ヨリ代理委任セシヲハ一切無之旨申述ヘ
タリ

引合人MN周三八FI鉄之進発起ノ頼母子
事件ニ付テハYM祐廣外五名代人兼HT
十右エ門申立ノ通相違無之ニ付別段申立ツ
ヘキ事柄無之旨陳述セリ

〔一四五A〕

因テ裁判スル左ノ如シ

第一条

原告ニ於テ最初FIラクHT十右エ門
ヲ相手取頼母子事件勸解ヲ出願スルヤ
被告十右エ門ニ於テ平穩熟和ヲ主トシ
是ヲ頼母子連中ヘ示談スルニ連中ニ
於テ速ニ肯允シ明治九年拾番口ヲ八九

九貫五百目ニテ原告ノ取当リト定メ此内
先取四人ノ返卦ヲ引去残額六貫三百目ヲ
相渡ス筈ニ決セシヲハ頼母子連中ト被告ノ

〔一四五B〕

陳述スル所同一ナレトモ前段残額六貫三百目
〔即チ六拾八円九拾六錢八厘四毛〕ト第壹号証書ニ記載スル
金員トハ五拾四円五拾錢余ノ差違アリテ

原被双方ノ申口齟齬スルニ付該証書ニ
就テ相違ノ起源ヲ推考スルニ八九若干目

ヲ金円ニ引直ノ算法ヲ誤リ加之三貫貳百目
ヲ扣除セサルニ出タルヲ明白ナリ乍去被告ト

頼母子連中ノ間ニ於テ代理委任ヲ授受
セサルヲ互ノ口供符合シ原告ニ於テモ委任状

ヲ審閱ノ上代人タルヲ確認シタルニ非レハ
〔一四六A〕

該証書ニ頼母子連中惣代ト肩書アル

モ全ク有名無実ニシテ連中ノ代人ニ非ル

ヲ著明ナリ既ニ代人ニ非ルトキハ被告兩人ニ
於テ毫モ此頼母子事件ニ關係スヘキ者ニ

非ルヲ以テ該証書ノ如キハ原由ナキノ契約ニ
帰シ到底被告兩名ニ於テ負担スヘキ義務

無之モノトス

ハ資料

第二条

前条ニ説明スル筋合ナルヲ以テ原告ニ於テ被告ヘ対シ頼母子金円ヲ請求スル

(一四六B)

理由無之事

明治十年八月十五日

掛 八等出仕 横地 安信 印

主 判事補 鈴木 円平 印

副 十六等出仕 小島 範一郎 印

(一四七A) 【六一】目次五九 【貸金催促ノ詞訟】^(注86)

明治十年第六拾五号*

所長代理 印**

** 朱書きと「横地安信」の丸朱印 朱書き

申渡

原告 山口縣第拾貳大區九小區長門國

厚狹郡船木村□□番地住居

士族 K I 半介

被告 山口縣第拾貳大區九小區長門國

厚狹郡船木村□□番地住居

工 U D 喜右衛門

修道法学 四一卷 二号

六二七 (三二五)

引合 山口縣第拾貳大區九小區長門國

(一四七B)

厚狹郡船木村□□番地住居

商 O F 席介

貸金催促ノ詞訟審理ヲ遂ケシ処

原告人ハ父仙吉義旧曆明治五年申^{明治六年一月廿八日ニ相当}極月大晦日 被告

人ヨリ * 西曆一八七二年

第壹第貳両号ノ地所売渡証ヲ領収シ旧山口藩札七貫六百目

金九拾八

円八拾錢

ヲ貸付ケ明治七年戊^{**}十二月三十日ヲ返金ノ期限ト定メ口約ナレ

共一ヶ月ニ

* 西曆一八七四年

付利息老步五朱ヲ受取ル筈ニ有之処右期限ニ至リ被告ニ於テ返

金ノ約ヲ履行セサルニ付屢々催促ノ末被告ヨリ元利金ノ内へ度々

ニ金

ハ拾円払入ル、耳ニテ元利皆済ニ至ラス遂ニ明治十年一月ニ至リ

被告

ヨリ残ル元利金償却スヘク旨申越シタルニ付明治十年一月廿三日

被告第貳

(一四八A)

号ノ計算書ヲ相与ヘタリ然ル処被告ニ於テ尚遷延返償ノ義務ヲ怠

リ

却テ被告ヨリ代人OM德三郎ヲ以テ明治十年二月^{*}中計算差纏ノ

義勸

* 西曆一八七七年

解出願シタルニ付父泰造 仙吉ノ
改名 ヨリ雇人A M健吉ヲ以テ代人ニ
差出シタル

ル処被告代人ニ於テ右計算書ノ内明治九年十月十九日払入レタル
金七拾円

ハ即チ七貫六百目ノ該債ニ払入レ旧歷明治五年極月別ニ借受ケタ
ルニ

貫目ハ明治九年十月二日* 現金五拾五円ヲ払入レタル杯意外ノ不
条理申立

* 西曆一八七六年

ルニ付父泰造代人健吉ヨリ右ノ計算ハ相違セサル廉縷々弁解ノ未
被

告代人ヨリ第三号ノ約定書ヲ受取りタル処遂ニ被告代人ヨリ右勸
解願

下ケヲ為シタリ如此勸解ヲ願下ケ且被告代人ヨリ第三号ノ約定書
ヲ

父泰造ヘ相渡シタル上ハ被告ニ於テ右計算書ハの当セル計算ト見
認

〔二四八B〕

メタル訳ナルニ尚ホ返金ノ義務ヲ尽サザルニ付不得已明治十年五
月二日自分

明治十年三月父泰造退
隠自分相続人ト相成タリ ヨリ勸解願出デタル処其勸解ハ明治十年七
月十二日

遂ニ不調ト相成タリ因テ這般及上訴処被告ニ於テ猶ホ右計算書ヲ
証拠トシテ七拾円ハ明治九年十月十九日該債七貫六百目ヘ払入レ
タル旨申立

テ并被告第壹号約定書ヲ憑証トシテ七貫六百目ノ残ル元利金償却
セハ四拾円ハ戻シ呉ル、筈ナリト大ナル不筋申述ルト雖モ被告第
壹号定約書ニ調印セルO F席介義ハ明治十年二月二日被告ヨリ勸
解

願出候節一旦父泰造ヨリ代人ヲ囑託シタルモ席介ハ至親又ハ雇人
ニ非ラサルヲ以テ代人ノ許可無之ニ付明治十年二月廿日父泰造ヨ
リ委任

状ヲ取り戻シ更ニ雇人A M健吉ヲ代人ニ差出シタリ依テ父泰造ニ
〔二四九A〕

於テ席介ヨリ被告ヘ第壹号約定書ヲ相与ヘタルハ一切承知セス
然ル上

ハ縱令目今自分ハK I家ノ戸主ナリト雖モ先ノ戸主用認セサル証
書

ハ自分ヨリ約定ヲ履行スル義務ハ無之且被告第貳号ノ計算書ノ
内明治九年十月十九日受取りタル七拾円ハ現金ヲ受取りタルニ非
ラス明治

五年極月大晦日貸付ケタル三貫目 金三拾九
円ナリ ノ償却ヲ受クル為メ
三貫目

ノ証書ニ抵当ニ相成リタル耕地壹反式畝拾式歩ヲ七拾円ノ代価ヲ

以テ明

治九年十月十日買取り明治九年十月十九日第四号ノ耕地売切証ヲ被告ノ使

〇Ｂ金介ヨリ受取り右三貫目ノ証書ヲ金介ヘ相渡シ第五号ノ受取書ヲ取り置キタル次第二付右七拾円ハ該債七貫六百目ノ内ヘ領収セサルヲハ

明了ナリ尤右三貫目ノ元金ヘ月壹歩五朱ヲ加ヘ明治六年一月ヨリ明治

〔一四九Ｂ〕

九年十月迄四拾六ヶ月ノ利子ヲ計算セハ元利金合テ六拾五円九拾壹

錢ト相成ルニ付右七拾円ニテ其元利金ヲ差引ケハ殘金四円零九錢之アリ仍テ其殘金四円零九錢ヲ該債七貫六百目ノ内ヘ差繼ク積リニテ已ニ相済ミタル三貫目ノ差引計算ヲ明治十年一月廿三日被告ヘ与ヘタル計算書ニ記載シタル義ナリ而シテ右第五号受取書ニ調印セル〇Ｂ金介義ハ目今九州旅行中ニテ帰郷ノ程モ予メ期スヘカラサルニ付自分ヨリ証拠人ニ召連レ出頭ハ相叶スト雖モ公正ノ証書

タルハ聊カ相違無之如此自分ニ於テハ第壹号ヨリ第五号マテノ完全ナル証書五通ヲ所持シ前述ノ通り該訴ニ於テハ充分ノ權利ヲ有セルニ付速カニ被告ヨリ元利殘金九拾三円六拾三錢三厘〔一五〇Ａ〕

ヲ償還受度旨陳述シタリ

被告人ハ原告人ヨリ捧呈シタル第壹号ヨリ第四号マデノ証書ハ夫々相渡シ

タルニ相違之ナキ処借用金返済期限ナル明治七年十二月三十日ニ至リ返金ノ

資力無之ニ付一ヶ月ニ利息壹歩五朱ヲ払入ルヘク口約ヲ為シ原告人

ヘ返金ノ延期ヲ乞イ漸ク明治九年十月十九日迄ニ金高百五拾円度々ニ入金セシニ付明治九年十月十九日ニ於テ該債ハ元利皆済シタル義ト

相心得ヘ原告第壹第貳両号ノ証書ヲ戻〔シ〕呉ル、様及掛合処原告ニ於

テ尚ホ些少ノ殘金有之旨申立テ時日遷延シテ右両通ノ証書ヲ返還セサルニ付些少ノ殘金アレハ其計算書ヲ渡スヘクト再度掛合ニ及フ

処明治十年一月廿三日ニ至リ原告ヨリ第貳号ノ計算書ヲ差越シタリ依テ

〔一五〇Ｂ〕

其計算書ヲ一度握掌シ篤ト計算ノ方法ヲ点檢セシ処豈図ラン

ヤ旧歷明治五年申極月大晦日ノ別口借用金三貫目 金三拾 九円 毛右計算書ニ掲載アリテ該債七貫六百目 金九拾八円 ノ元利金ト右三貫目ノ八拾錢

元利金トヲ合算シテ内入金百五拾円ノ辻ニ計算ヲ為シタリト雖モ

右三貫目ノ負債ハ明治九年十月二日現金五拾五円*ヲ払入レ三貫目ノ

* 欄外上部に「注」がある（本丁末部参照）

ノ証書ヲ取戻シ其証書へ裏ニ抵当ニ相成リタル耕地壹反貳畝拾貳歩ヲ代価七拾円ニテ原告人へ売渡シ其売渡証ヲ明治九年十月十九日

OB金介ヲ以テ原告へ通送シタル次第二付右代価七拾円ハ七貫六百目ノ該債へ償還シタルヲ明瞭ニ之アリ就テハ前々ノ入金八拾円ヲ合テ百五拾円ノ入金高二相成タリ然ルニ原告ニ於テ如右的不當ノ計算

* ○注印*

* 「小島」の丸朱印

三貫目ノ負債ハ利息ノ定

メ無之ニ付扱人主入りヲ

以テ一ヶ月八朱四味ノ利

息ヲ加ヘ元利金五拾五

円払入レタリ

（以上五行にわたり記入）

〔二五一A〕

書ヲ差越シタルハ甚タ不条理ノ所為ト相考ヘ明治十年二月三日O

M徳三

郎ヲ代人トシ右計算書ヲ捧ケ計算差違ノ義勸解願出テタル処

KI泰造 原告人ノ父ニシテ

ヨリOF席介ヲ代人ニ差出シタルニ付

双方勸

解庭ニ於テ互ニ弁論致シタルモ遂ニ判官ノ説諭ニ承服シ双方和

解ヲ取結ヒ明治十年二月廿三日双方約定書 原告第二号被告 第一号ノ証書ニ相当ヲ交換シ

自分ヨリ七貫六百目ノ元利残金五円九拾九銭貳厘ヲ明治十年三月一日限り

償却セハ自分ヨリ利子ノ明記モ無之証書ニ付テ月二毫歩五朱ノ利子

ヲ払入ル、高誼ニ対シ原告人ヨリ四拾円ヲ戻呉ル、契約ヲ為シ明治十

年二月廿五日自分代人ヨリ右勸解ヲ願下ケタリ其後明治十年三月一日

ニ至リ右交換約定書ニ基キ原告人方ヘ立越シ元利残金五円九拾九〔二五一B〕

銭貳厘ヲ償却スヘクニ付四拾円ヲ戻呉ル、様掛合ニ及フ処原告ニ於テ四

拾円ヲ戻ス様子無之ニ付其俣立帰リ爾後自分ヨリハ何ノ掛合モ為サル処原告ヨリ明治十年五月二日貸金催促ノ義勸解出願シタル

赴ニ

テ自分喚出シ相成リタルモ其節自分ハ九州旅行中ニ付遂ニ出頭

致サス然ル処今回原告ヨリ上訴ニ及ヒ明治十年二月廿三日双方約定

書ヲ交換シナカラ尚ホ明治九年十月十九日払入レタル七拾円ハ三貫目ノ貸

金へ受取り差引殘金四円零九錢丈ケ該債へ差継キ受取りタル杯申立ルト雖モ決テ然ラス三貫目ノ負債ハ前述ノ通り明治九年十月二日皆済シ其証書モ取り戻シタル義ニ付明治九年十月十九日ノ七拾円

入金ハ七貫六百目ノ内払ナルヲ明白ニ之アリ且原告ニ於テ自分第〔一五二A〕

壹号証即チ交換約定書ハ一切承知セス其証書ニ調印セルOFF席介ハ代人ノ許可無之抔意外ノ不筋申立レ共此亦偽言ニシテ自分ハAM

健吉ノ原告代人ニ出頭シタルヲハ承知セス勿論交換約定書ハ公正ニシテ

聊カ無疑モノナリ加之原告ニ於テ第五号ノ受取書ヲ自分使OB金介ヨリ受取りタル旨申立ルト雖モ右証書ハ自分承知セス而シテOB金介ハ原告第四号ノ耕地売渡証ヲ送達方耳相頼ミタル義ニテ其他ノヲハ自分依頼ノ外ニ之アリ且事實ニ於テ既ニ明治九年十月

二日自分手元へ返還ヲ受ケタル三貫目ノ証書ガ再ヒ明治九年十月十九日原告ノ手元ニ有之謂レ決テ無之ニ付原告第五号ノ証書ハ信

用
セス併シ一応自分ヨリOB金介ニ取調ヘ度ナレ共金介ハ目今九州〔一五二B〕

變動ノ為メ同所ヘ夫方ニ罷越シ帰郷ノ期モ予定シガタキニ付右

証書ノ信偽判然セスト雖モ縷々前陳ノ次第ニテ到底原告ヨリ差越シタル計算書ハ不筋ノ計算ニ付固ヨリ容諸難相成且明治十年二月廿三日交換シタル定約書モ之アル上ハ七貫六百目ノ殘金五

円九十九錢貳厘ヲ償却シテ原告ヨリ四拾円ヲ受取ル外原告トハ一切取引ハ無之筋合ナリ仍テ原告請求ニ応スル義務決

テ無之旨弁駁シタリ

引合人OFF席介ハ明治十年二月三日UD喜右衛門代人OM徳三郎ヨリKI泰造ニ掛リ勸解願出テタル筋一旦泰造ノ代人ト相成リ遂ニ其委任状ヲ返還シタル次第ハ原告陳述ノ通り相違無之

〔一五三A〕

ニ付明治十年二月廿三日喜右衛門代人ヨリ勸解願下ケノ際ハ自分義泰造

ノ代人ニ非ラスシテAM健吉ナル者泰造ノ代人タリ併シ自分ハ喜右衛門代人トハ談判カ、リノ次第モ有之故健吉一回出頭シ且兼テ泰造トハ喜右衛門ヨリ返金セハ直ニ其金ヲ自分借り受ケノ内

約モ有之ニ付一時モ早ク喜右衛門ヨリ泰造ヘ返金サセハ自分其金ヲ借受ケ商法ノ目的モ有之ニ依リ被告第一号ノ約定

書ヲ喜右衛門代人OM徳三郎ヘ払渡シタリト雖モ泰造ノ代人ニテ該証ヲ相渡シタルニ無之旨申述タリ

仍テ判決スル左ノ如シ

第一条

〔一五三B〕

明治六年一月廿八日*被告人ノ原告人ヨリ借受ケタル旧山口藩札七貫六百目

* 西曆一八七三年

即チ金九拾八円八拾錢ヘ一ヶ月壹歩五朱ノ利子ヲ加ヘ明治六年一月ヨリ

明治九年十月マテ四拾六ヶ月ノ利息ヲ乗算セハ利金六拾八円拾七錢貳厘ト相成リ其利金ヲ元金九拾八円八拾錢ヘ加算セハ百

六拾六円九拾七錢貳厘ノ金高ヲ現出セリ然レハ被告人陳述ノ通リ右元利金ノ内ヘ明治九年一月ヨリ明治九年十月十九日迄ニ都合金高

百五拾円入金シタリト仮定スルモ尚ホ六拾六円九拾七錢貳厘ノ不足金之アリ然ルニ被告ニ於テ右入金百五拾円ニテ該債元利皆済シ

タルト相心得ヘタルハ誤算ト謂フヘシ且右入金百五拾円ニテ該債ヲ皆済シタル義ナレハ原告第壹第貳両号ノ証書ヲ明治九年十

〔一五四A〕

月十九日入金ト引換ヘ取戻ス筋合ナリ然ルニ右証書ヲ取戻サル上ハ固ヨリ殘金之アルヲ被告ニ於テ承認シタルモノト見認メサルヲ得ス而又右入金百五拾円ノ内七拾円ノ金ヲ明治九年十月十九日該債ニ内払ヲ為シタルナレハ其受取書ヲ原告ヨリ徴スヘキ筈ナリ

然ルニ七拾円ハ該債ノ内払金ナルヲ明証スヘキ受取書ヲ所

有セサル上ハ別口三貫目ヲ皆済ノ為メ明治九年十月十九日七拾円ノ金ヲ払入レタルヲ明昭ナリト信認ス

第二条

被告人所携ノ第壹号約定書ニ署名押印セルOF席介ハ原告ニ於テ右約定書授与ノ当日即チ明治十年二月廿二日頃ハ〔一五四B〕

代人委任ヲ解キタル旨申立テ引合トシテ召喚シタルOF席介モ原告陳述ノ通り相違無之旨陳告シ別ニOF席介

ハ明治十年二月廿三日頃原告代人タルヲ証明スル書類モ無之ニ付右約定書ハ原告ニ於テ承認セサルモノトス因テ被告ニ於テ右約定書ヲ捧ケ原告ニ向テ該約ノ履行ヲ望ムヲ得ス

第三条

被告ヨリ明治九年十月十九日払入レタル七拾円ハ原告ニ於テ別口貸金三貫目ノ元利六拾五円九拾壹錢ヲ差引ケハ殘金四円

零九錢之アルニ付四円零九錢丈ケハ該債ヘ内入シタル旨申立〔一五五A〕

ルト雖モ三貫目即チ金三拾九円ノ貸金利子ハ一ヶ月壹歩五朱ノ契約ナル歟否被告申分吻合セス且他ニ明証無之上被

告ニ於テ三貫目ノ元利金ヘ償還スヘキト見認メタル五拾五円ノ外原告ニ於テ受取ルヘキ權利無之依之右七拾円ノ

内ニテ五拾五円ヲ引キ殘金拾五円ハ該債ヘ差継キ受取ルヘキ筋合ナリ然レハ七拾円ノ内殘金四円零九錢ノ外尚殘金

拾円零九拾壹錢之アルニ付其金ハ該債ニ入金セシト認定

ハ 資 料 ヲ

ス其他原告無証ノ陳述ハ一切採用セス

第四條

前条々ニ説明スル筋合ナルニ付結局被告ニ於テ原告請求

〔一五五B〕

スル金高九拾三円六拾三錢三厘ノ内前第三條ニ入金ト

認定シタル拾円零九拾毫錢ヲ差引殘金ハ八拾貳円七拾

貳錢三厘速ニ原告人ヘ償還スヘキ事

掛 八等出仕 横地 安信 印

明治十年八月廿一日 主 十六等出仕 小島 範一郎 印

副 判事補 鈴木 円平 印

〔一五六A〕 【六二】 【目次六〇】 【貸金催促之訴】^(注87)

明治十年第五十九号*

* 欄外右側に朱書き

申渡

所長代理 印** 原告 山口縣第拾大區九小區周防国

** 「横地安信」の丸朱印

吉敷郡木町□□□□番屋敷

士族 K Y 四郎 代人 嫡男

K Y 市郎

修道法字 四一卷 二号

六二一 (三二九)

被告 山口縣第拾大區拾小區周防国

吉敷郡中河原町□□□□番

屋敷 士族 T N 義彦 代人

同大區同小區道場門前町

□□□□番屋敷寄留 士族

〔一五六B〕

O N 軌太郎

貸金催促之訴訟審理ヲ遂ケシ処

原告代人 K Y 市郎ハ過ル明治八年* 山口縣第拾大區

柁^{ひこぎ} 村居住士族 O G 正治ナル者同縣長門国 * 西曆一八七五年

阿武郡藏目喜村鉦山百五拾坪借區許可ヲ

得タル処内実ハ同人父隱居 O G 一路諸世話

致シ親族其他三四名申合セ各出金シ自分ノ父四郎モ

其宅人ニ加入合商致ス内明治九年一月二至リ

都合有之借區主ヨリ銅品捌方其他鉦山

事件總テ四郎ヘ委任シ四郎ヨリハ毎年金貳百

〔一五七A〕

五拾円宛借區年限中正治ヘ相渡スヘキ約条

一路ト取結ヒタルニ付テハ其本人タル正治ヨリ

委任狀并約定書差出ス筈ノ処折節正治ハ

大阪滞在中ニ付右両通ノ書面ヘ印章ヲ取付ル

為メ一路ヨリ T N 源七ヘ委託シ被告 T N

義彦ヲ差添正治ノ許ヘ遣セシニ数日相立テトモ
兩人帰縣セス其頃父四郎別段ノ用向ニテ

上阪スル儀出来シ幸ヒ兩人ノ様子ヲモ聞合
セント明治九年四月縣地発足シタル処途中
ニテ行違ヒ源七八既ニ正治ヨリ此条約事件ヲ

〔一五七B〕

委任セラレ前段両通ノ書類ヲ携帯シ帰縣
ノ上明治九年五月十四五日頃自分ヘ両通ノ

書面ヲ渡セシユヘ受取書差出シ其旨大阪滯
留致シ居ル父ノ許ヘ申越セシニ明治九年五月

下旬帰縣シタルユヘ両通ノ書面ハ父四郎ヘ相渡
シタリ是ヨリ先キ父四郎大阪表用事相済

出発前被告義彦父ノ旅宿ニ来リ阪地長滯

留ニ付諸費ヲ差添ヒタル由ニテ金五拾円借用
致度旨頼談スルニ付明治九年五月十三日付証

書ノ通貸与ヘタリ而シテ帰縣後屢々返済ヲ

〔一五八A〕

促スト雖モ被告ニ於テハ該證書ニ帰縣ノ上
道付成就次第元利返済ノ明文アリテ道付

成就トハ鉾山委任事件互ノ条約相調タル上
之レヲ管庁ニ願請シ許可相成ルノ日ヲ指シタル旨

申立レトモ道付成就トハ正治ヨリノ委任状并条約

書ヲ我方ニ落手スル迄ヲ指シタルニテ管庁ヨリ
許可ヲ得ルノ日ヲ指シタル儀ニ無之ユヘ速ニ元利
金ノ返済ヲ受度旨申立

被告代人ON軌太郎ハ明治九年五月十三日*
大阪ニ於テ原告ヘ證書差入金五拾円借受タルハ
* 西曆一八七六年

〔一五八B〕

相違無之返済期限ハOG正治ト原告ノ間ニ
鉾山委任事件条約取結之レヲ管庁ニ願請

シ許可相成リタル上返済スル筈ニテ証書ニモ
帰縣ノ上道付成就次第元利返済ノ旨掲載

之レアリ右道付成就トハ即チ管庁ノ許可ヲ
得ルノ日ヲ指シタル儀ニ有之尤万一許可セラ

レサルモ其指令ヲ得レハ一件落着ニ付借金返済

ノ期限タルハ勿論ノト心得居タリ然ルニ明治
九年五月十八日頃義彦帰縣セシニ鉾山

委任事件ニ付原告トOG一路トノ間ニ紛議ヲ

〔一五九A〕

生シ管庁ヘ願請スルニ至ラスシテ月日遷延
漸ク明治十年七月三日*ニ至リ最前ノ約定
* 西曆一八七七年

ヲ改メ更ニ鉾山ヲOG正治ヨリ原告ヘ譲渡ス筈ニ
談判相調タルユヘ前約鉾山委任事件ハ

此日ヲ以テ成就セサルニ決シタルモノナレハ明治十年

七月三日已後原告ヨリ貸金返済ヲ促スハ至當ノヲナレトモ未タ期限内ナル明治十年六月廿八日付貸金催促ノ訴狀ニ對シテハ原告ノ求ニ応シ難キ旨抗弁セリ

因テ裁判スル左ノ如シ

〔一五九B〕

第一條

該訴ノ証書前文ニ（鉾山御預リ事件ニ付云々借用申処実正）ト之レアリテ結文ニ（帰縣ノ上右道付成就次第元利返済可致）ト之アル兩文ヲ再三熟見シテ条理ヲ推考スルニ該借用金返済期限ハ右鉾山委任事件ノ落着セシ当日タルヲハ明昭タリ而シテ其鉾山借区ヲ他人ヘ委任スルハ人民相互ノ自由ニアラス必ス之ヲ管庁ニ上申シ可否ノ指令ヲ請テ後初テ右委任事件ノ成否落着スル筋合ナリ然レハ証書中帰縣

〔一六〇A〕

ノ上道付成就ノ文字ハ被告人申立ツル通り右委任事件落着セシ当日ヲ指定シタルモノト謂ハサルヲ得ス就テハ原告人ニ於テ該件出訴ノ明治十年六月廿八日前ニ於テOG正治ヨリ一旦委任狀并条約書ヲ落手シタル当日ハ即チ道付

成就ニシテ該貸付金返弁ヲ受ル期限ナリトノ申立ハ証書中前後ノ文脈ト事理トニ適當セサルヲ以テ該件出訴ノ明治十年六月廿八日ハ未タ期限未滿ナリト認定ス

第二條

〔一六〇B〕

明治十年六月廿八日ハ勿論期限内ナリト雖モ被告人ニ於テ本訴答期中明治十年七月三日原告トOG正治トノ鉾山借区委任一件ハ遂ニ成就セス更ニOG正治ヨリ原告人ヘ鉾山借区ヲ讓渡スヲ改約シタルニ付明治十年七月三日ハ即チ借用金返済期限ナル旨自ラ陳述スル上ハ明治十年七月三日ニ於テ此借用金ヲ原告人ヘ返還スヘキ筋合ナリ然ルニ被告人ニ於テハ期限經過ノ今日迄尚ホ借用金ヲ返償セス却テ原告人期限未滿内ノ出訴ヲ責メ目今返金

〔一六一A〕

ノ期限外ナルヲ自認シナカラ該訴ニ對シ其義務ヲ尽サ、ルハ先キニ旅中ノ困苦ヲ凌キシ恩義ヲ忘却シタルモノニテ尤不条理ナリトス

第三條

前条々ニ説明スル理由ニ付原告人請求ノ

通り元金五拾円へ法律上ノ利子 壹ケ年
速ニ被告人ヨリ弁償スヘキ事 百分ノ六 ヲ加ヘ

但 訴訟入費ハ各自費タル可シ

明治十年八月廿四日 掛 八等出仕 横地 安信 印

主 判事補 鈴木 円平 印

〔二六一B〕

副 十六等出仕 小島範一郎 印

西分□□□□番邸住居
〔二六二B〕

士族MT慎吾 代人 同縣同大區第八小區

同國同郡萩町□□□□番邸住居

商 K B 吉右衛門

貸金催促ノ詞訟審理ヲ遂ケシ處

原告代人OA傳八ハ原告SK昭介義明治三年午十二月ヨリ明治四年 * 西曆一八七〇年

未六月廿九日迄五度ニ被告人ヘ旧山口藩札合六拾壹貫四百拾五匁

即チ金七百九拾八円三拾九錢五厘ヲ貸与ヘ第壹号ヨリ第五号マ

テノ五通証書ヲ領取シ第壹号証ノ貸札拾四貫九百拾五匁ハ一ヶ月

ニ付利息壹歩貳朱ヲ加ヘ明治三年十二月限り第貳号証ノ貸札八貫

目

ハ一ヶ月ニ付同様利息壹歩貳朱ヲ加ヘ明治四年十二月限り第三号

証

〔二六三A〕

ノ貸札三貫五百目ハ一ヶ年ニ付利息壹割ヲ加ヘ明治四年十二月晦

日限り

第四第五両号証ノ貸札合三拾五貫目ハ口約ナレ共一ヶ月ニ付壹歩

ノ利

息ヲ加ヘ明治四年十二月限り返償ヲ受クル契約ニ之アル処被告人

ニ於

〔二六二A〕【六三】【目次六一】【貸金催促ノ詞訟】^(注88)
明治十年第九拾壹号*
所長代理 印 ** 民事課 ** * 朱書き
* 朱書き

申 渡 *** 朱書き

原告 山口縣第貳拾大區第六小區長門國

阿武郡松本□□□□番邸住居

士族 SK昭介 代人 同縣同大區第九小區

同國同郡萩町□□□□番邸住居

士族 O A 傳 八

被告 同縣同大區第拾貳小區同國同郡椿郷

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

六一八(三一六)

テ右期限何レモ經過シテ返金ノ義務ヲ怠タルニ付屢々催促ノ末漸ク明治九年六月十六日*被告人ヨリ右貸金元利ノ内へ宅地山林畠

*西曆一八七六年

ヲ相渡セシニ付其宅地山林畠ヲ代価五百九拾壹圓七拾六錢三厘ニ

証書差入度旨依頼セシニ付一応任其意タル処又即金式百円ヲ違約セルニ付遂ニ明治十年七月廿六日右勸解ハ不調ト相成

取リ明治九年六月十六日付ケ宅地山林畠ノ受取書ヲ相与へ被告人ヨリ該

對シ相渡候山林宅地畠云々ノ文字ヲ証拠トシテ申立テ且同證書中末段ノ三拾円并殘金ノ約ハ別口借用金ノ取引ナル旨申述ルト雖

債ノ内へ右山林宅地畠ヲ相渡シタル廉并該債殘金ヲ明治九年六月廿

モ実ニ意外ノ不条理ナリ抑第六号証書中ニハ被告人ノ誤文アリ第一ハ前項ノ(貳拾三貫九百拾五匁ハ)(貳拾六貫四百拾五

日限り払入レノ約定ヲナシ尤三拾円ハ明治九年六月廿日現金ヲ払入レ尚

誤記ナリ并第二ハ三項ノ(右江對シ相渡候品)ノ文字ハ(右ノ内ハ對シ云々)ノ誤文ニ之アリ決(シ)テ該債ヲ五百九拾壹圓七拾六

殘金ハ改テ借用ノ新証書ヲ差入レ更ニ返済ノ期限ヲ相定ムヘク(一六三B)

錢三厘ノ) 価アル山林宅地畠ヲ受取り相済マシタルニ無之夫故五通貸金証

トノ第六号約定書ヲ受取タル処被告人ニ於テ約ノ如ク三拾円ノ現金

モ未タ被告人へ返還セス依然原告人ノ手ニ存在セリ且事實ニ於テ該債ノ元金スラ七百九拾八圓三拾九錢五厘ノ高二相成リ

ヲ明治九年六月廿日相渡サス并殘金新規証書モ差入レサルニ付爾後

利金ヲ合算セハ明治九年六月頃既二千円余ニ及フ貸金ヲ總(一六四B)

嚴催ニ及フト雖モ荏苒時日ヲ遷延シ殘金償還セサルニ付不得已明治十年六月十八日*裁區裁判所へ殘金請求ノ義勸解願出テ

*西曆一八七七年

タル処説諭ニ依テ被告人ヨリ該債殘金ニ對シ四百円ニテ

号証書末段ノ三拾円并殘金ノ約ハ別口借用金ノ取引ニアラス若シ別口借用金ノ取引ナレハ其明記之アル筋ナリ然ルニ其明記

勘弁致與ル、ナレハ内貳百円ハ即金償還シ尚殘金貳百円ハ新

モ無之ハ果シテ該債殘金ノ取引結約タルヲ判然タリ如此

被告人ニ於テ殘金取引ノ明治九年六月廿日ヲ違約シ
于今返金セサル上ハ明治十年九月以後ノ利子ヲ原告人ニ於テ勘弁
ヲ加ヘ請求セスト雖モ明治十年八月以前ニ滯タル元利殘金七百
六拾九円九拾四錢五厘ハ速カニ被告人ヨリ弁償受度旨陳述シ
タリ

被告代人K B 吉右衛門ハ被告M T 慎吾義明治三年午十二月ヨリ明
〔一六五A〕

治四年未六月廿九日迄五度ニ原告人ヨリ旧山口藩札合六拾壹貫四
百拾五

匁即チ金七百九拾八円三拾九錢五厘ヲ借受ケ第壹号ヨリ第五号マ
テ

ノ五通証書ヲ差入レ右返金期限并利息ノ歩合等ノ定メハ原告人陳
述ノ通り相違無之然ル処返金期限ニ至リ被告人身元困窮^{困窮}ヨリ

* 貧しくて困ること

弁償ノ術策無之時日遷延スル内原告人ヨリ嚴催ヲ受クルニ付不
得已明治九年六月該債元利金ニ対シテ山林宅地畠ヲ代価五百九拾
壹円七拾六錢三厘ニ相渡シ右山林宅地畠ノ受取書ヲ明治九年六月
十六

日受取り被告人ヨリ原告人ヘ第六号ノ約定書ヲ授与シタル処原告
人ニ於テ無異議第六号証ヲ領収シタリ然ル上ハ原告人ニ於テ該債
元利ヲ五百九拾壹円七拾六錢三厘ノ価アル山林宅地畠ニテ相濟
〔一六五B〕

マシ殘金ヲ勘弁シタルヲ判然タリ而シテ第六号ノ約定書中前項ノ
旧
藩札（貳拾三貫九百拾五匁）ハ（貳拾六貫四百拾五匁）ノ誤文ト
雖モ其他ハ

総テ公正ノ文字ナリ其公正ナル約定書起頭ニ該債ノ金員ヲ揭
ケ但書ニ証書ノ数ヲ記シ次ニ（右之通借用致居候処右江對シ相
渡候山林宅地畠云々）ト明記有之上ハ該債ハ山林宅地畠ヲ相渡シ
取引既済タルヲ愈明白ナリ而シテ右約定書末段ノ三拾円并殘金
等ノコハ別口負債三百円ノ取引ニシテ決テ該債ノ殘金ニ非ラス
併シ右約定書ヘ別口負債ノ取引ヲ記シタルハ蓋シ該債取引済
ノ日別借三百円ノ取引モ一緒ニ道付クヘク申合ヒ三百円ノ内三拾
円ハ明治九年六月廿日限り払入レ殘ル貳百七拾円ハ明治九年六月
廿

〔一六六A〕

日改テ借用シ返済期限ヲ確定シテ新規証書ヲ差入ルヘク契約ヲ
ナシタル義ナリ如此該債ハ明治九年六月十六日相濟タルニ付別借
三百円

ノ内三拾円ヲ約定書期限通り明治九年六月廿日原告人ヘ相送りタ
ル処原告人ニ於テ故障申立テ三拾円ヲ領収セス剩ヘ該債殘金ヲ
請求セリト雖モ固ヨリ既済ノ該債殘金ヲ償還スル筋無之ニ付被
告人ヨリ何タル応答モナサル処豈図ランヤ明治十年六月十八日
原

告人ヨリ該債殘金請求ノ義ヲ萩区裁判所へ願出テタルニ付被告人義度々勸解庭へ召喚レ懇ニ理解之アルニ依リ別借三百円ヘ対シ三百円ノ外二百円ヲ増テ払入レ其三百円ハ宅地ヲ相渡シ殘百円ハ融金次第可相渡旨原告人へ及示談処原告人ニ於

〔一六六B〕

テ承允セス仍テ遂ニ明治十年七月廿六日右勸解不調ト相成タリ然ル処今般原告人ヨリ及上訴ト雖モ右五通ノ借用金証書ハ第六号約定書ニ対シ權利全ク消滅シタルモノニ付被告手元へ取戻サス共既ニ反古証文ニシテ前陳ノ通り該債ハ全ク取引既済ナル義ニ付原告人請求スル該債殘金七百六拾九円九拾四錢五厘ハ弁償ノ義務一切無之旨弁駁シタリ仍テ判決スル条々左ノ如シ

第壹条

原告人所携ノ第六号定約書中央ニ(右之通借用致居候処右江対シ相渡候品左ノ如シ)ト之アリテ次ニ(山林宅地畠共云々相渡候)ト

〔一六七A〕

記載アル文意ハ同証書前文ノ負債金ヲ山林宅地畠ヲ引渡シ相済シタルニ似タリト雖モ被告人ニ於テ取引既済ノ証書五通 第五号マテヲ原告人へ依然相渡シ置ク条理決テ無之耳ナラス右六号証中ニ於テ借用証五通ハ反古タルヘキトノ明文モ掲載ナク且被告人ニ於テ山林宅地畠ヲ五百九拾壹円七拾六錢三厘ノ代

価ニ相渡シタル旨明言スル上ハ實際右山林宅地畠ノ代価ハ七百九拾八円三拾九錢五厘ノ該債元金ニスラ引足ラス況ヤ利金ヲ加レハ不足金員若干増加セリ而シテ別ニ不足殘金ハ原告人ニ於テ勸弁シタル明証モ無之彼此参考セハ右山林宅地畠は該債ノ内へ引渡シタルヲ明々昭々タリ仍テ右五通ノ証

〔一六七B〕

書ハ貸借ノ効力ヲ有セリトス

第貳条

同六号証書中結文ノ三拾円并殘金ノ契約ハ被告人ニ於テ別借三百円ノ取引ニシテ決テ該債ノ殘金ニ非ラザル旨申立ルト雖モ原告人ノ申分吻合セザル耳ナラス本証ヲ原告人へ授与シタル所以ハ該債ノ取引ヨリ起リタルナリ然ルニ結局へ別借ヲ記載スル謂レ無之且別借ト三百円ノ金員トヲ証スヘキ明記モ無之上ハ右被告人ノ陳述ハ無根ノ弁解ナリトス因テ右三拾円并殘金ハ該債ノ殘金ト確認ス随テ被告人ノ明治九年六月廿日*現金三拾円相渡シ其節尚ホ殘金ヲ改テ借

〔一六八A〕

* 西曆一八七六年

用新証書ヲ差入ル、契約ナルトノ陳述モ該債殘金返償期限ノ約定トス其旨趣ハ明治九年六月廿日三拾円ノ現金ヲ払入レ尚ホ殘金ヲ改テ借用スル義ナレハ殘金モ一応明治九年六月廿日原告人へ払入ル、訳ニテ全ク該債ノ皆済期日ヲ明治九年六月廿日ト定メタルト謂ハサルヲ得ス然ルトキハ五通ノ借用金証

書返済期限ノ結約ハ明治九年六月十六日第六号証書成就ノ当日ニ於テ消散シタリ然ルニ被告人ニ於テ明治九年六月廿日該借皆済ノ期ニ至リ三拾円ノ現金ハ勿論殘金ノ新規借用証ヲ原告人ヘ付与セザルハ甚タ不条理ナルモノナリ其他原被告共枝葉并無証ノ弁論ハ一切採用セス

〔一六八B〕

第 参 条

前条々ニ説明スル筋合ニ付原告人請求ノ該債殘金七百六拾九円九拾四錢五厘ハ速ニ被告人ヨリ償還スヘキ事

明治十年十月十二日*

* 月日の記載は朱書き

掛 判 事 横地 安信 印
主 十六等出仕 小島 範一郎 印
副 判事補 鈴木 円平 印

〔一六九A〕 【六四】 【目次六二】 【預ケ七島筵取戻ノ詞訟】^(注89)

明治十年第九十七号*

所長代理 印**

** 朱書き
朱書きと「横地安信」の丸朱印

申 渡

原告 大分縣第二大區二小區豊後國

速見郡南杵築村□□□□番屋
敷平民 EY勝兵衛事 KB勝十郎
代人 甥 同縣同大區同小區同國同郡
同村□□□□番屋敷 平民
ST 勇三郎
被告 山口縣第九大區三小區周防國
〔一六九B〕
佐波郡新田村□□□番屋敷 平民
NY小兵衛事
NG 小兵衛
預ケ七島筵取戻ノ詞訟審理ヲ遂ケシ処
原告代人ST勇三郎ハ原告KB勝十郎義
魚問屋ニテ其傍ラ七島筵売買ノ義モ取計ヒ就テハ
被告人NG小兵衛ヘ明治元年三月*ヨリ七島筵売買
ノ義ニ付数度ノ取引致ス内就中明治元年四月廿七日
売買ノ都合ニ依リ取引殘七島筵百六十二束相
預ケ其預証ヲ取置キタリ抑売買ノ都合トハ右筵
〔一七〇A〕
之相場下直ナルニ付売捌方ヲ見合セ一時預ケ置
キタリ仍テ倉敷金并品物保存等ノ定約ハ別段無
之且売捌方ハ預リ主NG小兵衛ヘ相任スト雖モ相場

* 西曆一八六八年

明治 九(一八七六)年
十(一八七七)年

分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

六一四(三二二)

ノ高下一応報知ノ上承諾ヲ經テ売却代価差越ス
約定ナル処爾來代価モ不差送且物品モ不返ニ付凡一
兩月ヲ經テ物品取戻シ催促ノ掛合ヲナシタリ尤明治
元年九月五日明治元年十月廿一日兩度原告EY勝兵衛
事KB勝十郎自筆ノ書翰ニ右差違中又候七

島延二百束差送ル掛合致シ右預ケ延ノ義催促ニ不
及ルハ今更漏漏*歟ト考合致スナレトモ結局右預ケタルハ

(一七〇B) *疎漏(そろう)。手抜かりの意

相違無之ニ付時々便宜ニ口演ヲ以テ催促致セ共返戻

不致仍テ明治十年六月八日預ケ延取戻ノ義及掛合

処仕切済ノ旨回答致シ返却ノ心底無之故明治

十年八月廿七日*山口區裁判所へ勸解ヲ願出ル処理

*西曆一八七七年

不尽而已申募ルニ付明治十年九月七日終ニ不調ニ

相成不得已今回上訴ニ及フ義ニ付右延取戻度ナレトモ

明治元年四月廿七日ヨリ既ニ数年ヲ超過セシ義ニ付

現品存在ハ無覺束若シ存在致スナラハ現品取戻シ

度已ニ売払事ナラハ代金百九拾四圓四拾錢^{今日}ノ相

場積 受取度旨陳述セリ

(一七一A)

被告人NG小兵衛ハ原告人ヨリ捧呈シタル預リ証ハ相
渡シタルニ相違無之ト雖モ此取引ノ義ハ明治元年

三月ヨリ明治元年五月迄原告EY勝兵衛事K
B勝十郎手代久治郎紋平并ニ船頭永太郎ヨリ
七島延五百七拾六束追々積來ル内ノ預リ証ニ有之
然ル処客方ヨリ品物預リ置爲換金^{爲換金トハ品物差越ストキ凡}
見込ヲ以テ現金相渡シ追テ売
致ス^{見込ヲ以テ現金相渡シ追テ売}ナリ 差出スト雖モ物品有之ニ付客方ヨリ手形等

取附ル義モ不致習慣ニテ物品ヲ見詰取引致ス処右
預リ七島延ノ義ハ明治元年五月十八日明治元年九月

廿六日兩度ニ外品并七島延五百七十六束トモ仕切書差

(一七一B)

出ス内ノ分ニテ計算済ニ相成リ居其節預リ証不取

戻ハ失念ノ至ナレトモ明治元年九月五日EY勝兵衛ヨリ

船頭永太郎へ七島延不殘仕切引渡呉レトノ依頼狀并ニ

明治元年十月廿一日ノ書翰ニモ預ケ七島延無之故不申

越其後ハ更ニ取引等モ不致ニ付音信不通ニ有之処明

治十年六月八日預ケ七島延有之坏ト書翰差越ス故先

年仕切済ノ由相答へ尚不分リノ廉モ有之時ハ其節

ノ支配人久治郎紋平永太郎ヲ以テ委曲可承様返

翰致ス処反古タル証書ヲ以テ勸解上願致スニ付

自分手控ノ帳簿ニ払済ノ記載有之通上申

(一七二A)

スル処原告代人理不尽申立終ニ明治十年九月七日
不調ニ相成依テ今般及出訴処却テ自分不条理

申立ル抔トノ文面殊ニ訴狀面七島筵百六十二束

代価金百九十四円四拾錢ト有之何人ニテ取究メ記載

致スヤ於自分更ニ承諾不致結局前陳ノ次第二付

原告人ノ請求ニ応スル義務無之旨答弁セリ仍

テ判決スルヲ左ノ如シ

第壹条

原告人ニ於テ明治元年四月廿七日七島筵百六拾貳束
相預ケタルヨリ凡一兩月ヲ經テ取戻シ催促ヲ為シ其

〔一七二B〕

後モ右筵取引上苦情有之趣ニテ便宜ニ口演ヲ以テ

催促ナシタル旨申立ルト雖モ被告人ヨリ提供セシ明治元

年九月五日付ケ并明治元年十月廿一日付ケ原告人自筆

ノ両書翰中一ツモ預ケ筵催促ノ文字ヲ顯出セス却テ

七島筵売買取引ノ次第ハ甚タ熟和上ヨリ起ル意

味ヲ包含セリ而シテ他ニ筵取戻ノ催促ヲ証明スヘキ

一片ノ書類モ無之ニ付右原告人の陳述ハ採用ナシ

難シ

第貳条

明治元年四月廿七日原告人ヨリ被告人ヘ預ケタル七島筵

〔一七三A〕

百六拾貳束ノ取引差纏レ居ルナレハ明治元年十月廿一

日ノ書翰ニ原告人ヨリ被告人ヘ又七島筵貳百束ヲ差

送ル掛合ヲナス条理決テ之レアル間數且該筵ハ教歲

月ヲ經レハ朽敗モ難計品ナルニ付商人取引上ニ於テ

如此物品取引未済ノ俣十年間ノ久シキニ荏苒今

日ニ至ルノ筋アルヘカラス是ニ因テ之ヲ觀レハ該預リ証ハ仍

ホ原告人ノ手ニ存在セリト雖モ已ニ取引相済タル古

証書ナリト認定ス

第三条

前条ニ説明スル筋合ニ付原告人ノ請求ハ不成立

〔一七三B〕

者也

明治十年十月十九日

掛 判 事 横地 安信 印

主 十六等出仕 竹内 丈太郎 印

副 十六等出仕 小島 範一郎 印

〔一七四A〕【六四一2】【目次六二】【預ケ筵取戻ノ控訴】^(注90)

裁 決 書

大分縣豊後國速見郡南

杵築村 KB勝十郎 代人

I M 松次郎

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

六一一（三二〇）

預ケ延取戻ノ控訴

山口縣周防国佐波郡新

田村□□□番地 N G 小

兵衛 代人

松山 廣居

原告控訴ノ要領ハ自分儀從來生魚間
屋業ノ者ニテ傍ラ七嶋延売買致シ被
告トハ兼テ懇意ノ間ニテ前々ヨリ該
品ノ取引ヲナシ來レリ然ル処去ル明
〔一七四B〕

治元年四月廿七日*七島筵百六拾二束
ヲ被告方ヘ送付シ売捌キ方依頼ニ及
フ処當時該品ノ相場至テ下落ニ付追
々直段ノ騰貴スルヲ待テ売捌クヘシ
ト其俣被告方ヘ預ケ置キ第壹号証拠
物ノ如ク被告ノ預リ手形ヲ授受シタ
リ而シテ其後二三ヶ月ヲ經過スルモ
右直段ノ替リモ無之ニ付該品取戻ス
ヘクト明治元年九月書翰ヲ以テ懸合
ニ及ヒシ処何等ノ返書モ不差越其俣
打過ルニ付猶又催促ニ及ト雖モ返答
之レナク其後明治三年五月**ニ至リ幸

便ヲ以懸合ニ及ヒシ処被告申越セル
〔一七五A〕

ハ該品預リシ前ヨリ尚又相場下落ナ
シタルニ付今一層直段立直リ候ハ、
原告ヘ照会ノ上可売捌トノ事故其俣
ニナシ置タリ而シテ其後數歲月ヲ經
ルモ被告ヨリ何等ノ通知無之ト雖トモ
何分遠隔ノ地ニシテ自分立越シ催促
ノ運ニモ不至自然許多ノ年月ヲ經過
シ終ニ昨明治十年九月中山口區裁判
処エ該品取戻ノ勸解願出シ処被告〔二〕於
テハ右七島筵百六拾二束ハ既ニ仕切
済ナリト申立タリ因テ該官ヨリ更ニ
之レカ計算書ヲ原告ヘ渡スヘキ旨達
セラレ則チ勸解席ニ於テ之レカ計算
〔一七五B〕

書ヲ受取り熟覽スルニ本訴ノ筵百六
拾貳束ハ脱漏セリ因テ係官ヨリ懇々
説諭アリシモ被告利解ニ不基ヨリ終
ニ勸解不調トナリ明治十年十月*山口
支廳ノ裁決ヲ受タレ共自分請求不相
立該証書ハ全ク取殘シノ古証文ナリト

* 西曆一八六八年

** 西曆一八七〇年

* 西曆一八七八年

認定セラレタレ共承服ナシ難シ何トナレハ初審裁決書原告陳述書ノ中右筵代価百九拾四円四拾銭ヲ請求セシ云々書載有之ト雖モ其代価ヲ記載セシハ其係リ官ノ指図ニ從ヒ凡ノ代金ヲ認メシモノナレ共全ク該金額ヲ請求スルノ意ニアラス該物品ノ返戻ヲ

〔一七六A〕

訴ヘシモノナリ曩ニ被告ヨリ收受シタル計算書ト今般提供セル計算書ト相違セルハ被告ノ虚ナルヲ判然セリ依テ第壹号預リ証書ノ七島筵ハ被告ヨリ返還ナスヘキ様覆審ノ裁判受度旨申立タリ

被告答フル要領ハ自分儀従来問屋業ニシテ他ヨリ物品送付スル節ハ一時之レヲ預リ問屋ノ手ニテ売捌キ其代価ハ時々荷主エ相渡シ其商ヒ高ノ中ヨリ相当ノ口銭受領スルハ所謂問屋口銭ト唱フルモノニテ問屋一般ノ規則ナリ尤該物品ニ於ケル荷主ノ指直

〔一七六B〕

段ヨリ相場下落ナル時ハ荷主エ協議ノ上売捌キ又相場ノ騰貴セシ時ハ問屋ノ適宜ニ売捌クモノナリ然ル処去ル明治元年三月始テ原告ヨリ七島筵漸々差送り同年五月迄ニ合テ五百七拾六束到着セリ依テ其際一時預リノ手形ヲ相渡セリ尤右員数ノ中三百八拾四束ハ原告ノ手代惠吉ノ手ニテ売払ヒ百九拾貳束ハ則被告ノ手ニ売捌キシモノナレ共其商イ高ノ口銭ハ問屋ノ手ニ落ルカ故問屋ニ於テ売捌キシモ同一ナリ依テ右五百七拾六束ノ代価ヲ計算シ明治元年九月廿六日別

〔一七七A〕

紙仕切書ノ通り殘金貳分壹朱余ト該仕切書トヲ添ヘ原告ノ手代惠吉エ相渡シ差引勘定済タルモノナリ然レハ原告提供スル預リ手形ハ全ク取殘シノ古証ニシテ其効ナキモノナリ既ニ原告ヨリ差越シタル第壹号書翰中筵并諸品御売捌キ下サレ候趣具ニ承知仕候云々有之上ハ其売捌キシハ明瞭

ナリ又原告（ニ）於テハ該品被告エ預ケ置シハ其相場ノ下落ナルヲ以テナリト申立ルト雖トモ同書翰中直段ノ高価相成ル云々記載有之上ハ其代価ノ騰貴セシモ亦顯然タリ猶又同年十月廿一

〔一七七B〕

日附ノ送翰ニ此度青筴二百束ヲ積送ルヘキ処昨今此表格別ノ高直ナル云々有之ヲ以テモ其節代価ノ高貴セシハ証スルニ足り若（シ）原告申述ノ如ク該品ヲ預ケ置キ往々返翰ノ督促ヲ受ルモ被告（ニ）於テ其俵ニナシ置モノナレハ何ソ其事ヲ果サス貳百束ノ延積送ルヘキ懸合ヲナスノ理アラシヤ是等ヲ以テモ該品売サハキ其勘定ノ既済ナルハ明白ナリ然ルニ自分ヨリ先ニ山口區裁判所ニ於テ原告エ渡セシ計算書ト今又捧呈スル計算書ト同一ナラサル旨原告申立ルト雖トモ該計算書ニ

〔一七八A〕

於ケル勸解ノ都合ニ依リ其概略ヲ記シタルモノナレハ重複セシ處^モアレ

* 麤の略字。粗いの意

共尙調査スレハ今般改正スル処ノ計算書モ同一ノモノニシテ該品ノ差引済タルヲ判然タリ因テ原告ヘ対シ今更尽スヘキ義務無之旨答弁ス

判決

原告（ニ）於テ明治元年四月七島筴百六拾貳束ヲ被告エ送付シ売捌方依頼及処当時該品ノ価下落ニ付其騰貴ヲ待売捌クヘシト第壹号預リ証書ヲ受取リ其俵預ケ置シヲ以テ該品取戻請度旨陳述スト雖トモ其後明治元年九月中被

〔一七八B〕

告エ差送りシ書翰中延并諸品御売捌被下候趣態々被仰越呉々承知仕候云々ト有之上ハ被告（ニ）於テ該品売捌キシヲ原告承諾セルヲ明瞭ナリ若（シ）原告申立ル如ク其後直段ノ替リモ無之ニ付該品取戻スヘクト明治元年九月^モ書翰ヲ以テ被告ヘ掛合及ヒシモノナレハ同年月中被告ヘ送りシ書面ニ昨今直段高価相成ル云々ト記載アルヘキ理ナク又同シ明治元年十月ニ至リ差送

* 西曆一八六八年

リシ書狀中ニ有之青筴貳百束ヲ被告
ヘ積送ルヘキモノニアラサルナリ何
トナレハ先ニ該品ノ取戻ヲ掛合未タ
〔一七九A〕

其事ヲ果サ、ルニ再ヒ同品物ヲ差送
ル理由ナキモノトス依テ原告第壹号
証書ノ七島筴ハ預リノ明文アルモ其
後原告承諾ノ上被告〔二〕於テ売捌キシモ
ノナリトス

前条ノ理由ナルヲ以テ原告第壹号証
書ニヨリ該品取戻シヲ請求スルノ權
利ナキモノナリ

明治十一年四月 大阪上等待判所

〔一七九B〕
(記述なし)

〔一八〇A〕【六五】〔目次六三〕〔貸金催促ノ詞訟〕^(注9)
明治十年第七拾七号*
所長代理 印**
申 渡
* 朱書き
** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

原告 山口縣第三大區十二小區周防國玖珂郡
小川村□□□番地居住 平民 F I 岩五郎 代人
同縣第拾大區十一小區同國吉敷郡久保
小路□□□番地居住 平民
I H 清吉

同縣第三大區四小區周防國玖珂郡
阿賀村□□□番地居住 平民 S B I 宇吉 代人
〔一八〇B〕
同縣同大區十三小區同國同郡南藥村
□□□番地居住 平民
T H 孝藏

貸金催促ノ詞訟審理ヲ遂ケシ処
原告代人 I H 清吉ハ原告人義明治元年辰十一月*被告人ヨリ第壹
第貳
両号ノ地所売券証ヲ抵当ニシタル第三号ノ借用証書ヲ受取り旧山
口

藩札三貫目ト五貫目ヲ貸付ケ尤五貫目ハ明治元年辰十一月ヨリ
五六ヶ月中数度ニ貸渡シ都合貸札八貫目即チ金百四円ノ高二相

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について (二・完)

六〇八 (三〇六)

成り而シテ三貫目ハ一ヶ月ニ付利息壹歩ヲ加ヘ五貫目ハ無利ニテ明

治四年未十二月^{**}限り返済ノ定約ニ有之処被告人ニ於テ右期限経
（二八一A）^{**} 西曆一八七一年

過セシモ返金セサルニ付数度及催促処漸ク明治九年旧歴四月十七
日^{*}該債^{*} 西曆一八七六年

利金ノ内ハ金五拾円ヲ被告人ノ弟SBI健作ヨリ受取タリ然ル処
其節健

作ニ於テ兄宇吉ハ借用札五貫目ハ實際三貫三拾五匁ノ外一切受取
ラサ

ル旨申立ル由申聞ルニ付右ハ固ヨリ被告人ノ苦情ナレ共被告人ヲ
納得致サス

為メ兼テ被告人ヘ渡置キタル通ヒ帖ト原告人ノ手扣帖簿トヲ引合
セ篤ト

殘金ヲ計算シ明治九年旧歴閏五月中ニ道付クヘクトノ定約ヲ右入
金受

取書ヘ記載シ健作ヘ相渡シタル処被告人ニ於テ期限通り通ヒ帖ヲ
持

參シテ計算ヲ遂ケサルニ付若殘金計算ヲ遂ケサルナレハ証表ノ元
利殘金

受取度旨被告人ヘ及掛合処明治九年旧歴閏五月廿九日被告人ヨリ
健作ヲ以テ

金拾円ヲ差越シタルニ付該債利金ノ内ヘ受取り其受取書ヲ健作ヘ
相

（二八一B）
渡シタリ然ル処其後被告人ヨリ殘金計算ノフハ一切掛合無之且明
治九年

旧歴閏五月廿九日殘金計算モ不遂ニシテ金拾円ヲ返還シタルハ蓋
シ五貫目

モ全ク借用シタルニ相違無之ヲ覺悟シタル明証ナリ然ルニ尚ホ殘
金返

償セサルニ付不得已明治十年五月廿一日^{*}岩國區裁判所ヘ勸解願
出候処

被告人ニ於テ種々苦情申立ルニ付明治十年六月十五日右勸解不調
ニ相成^{*} 西曆一八七七年

リタリ依之這回及出訴処被告人ニ於テ五貫目ハ實際三貫三拾五匁
ノ外

一切借用セス而シテ五拾円受取書未段ノ定約ハ被告人宇吉ノ負債
ヲ健

作引受ケ兼テ原告人ト健作トノ取引アル双方帖面ヲ差引計算シテ
宇

吉ノ負債ニ差繼ク旨趣ナル旨申立ルト雖モ実ニ意外ノ不条理ニシ
テ該貸金并五拾円受取書ノ次第ハ前述ノ通り相違無之而又両通受

取書

〔一八二A〕

ヲ健作名宛ニナシタルハ畢竟同人ハ被告人ノ弟ニシテ該証ノ受人ナルニ

付如此記載シタリ決テ健作ニ於テ被告人負債ヲ代償スルトノ契約ヲ原告人承諾シタル訳ニ無之且ツ被告人ニ於テ該訴ハ出訴期限経過セシ旨申立ルト雖モ決テ然ラス抑モ明治十年七月廿八日該訴狀ヲ捧呈セシ処訴訟所詰官吏ヨリ訴狀粗漏ノ廉有之ニ付改正ノ上可差出旨申達セラレタルニ付一応訴狀ヲ取下ケ明

治十年七月卅一日改正ノ訴狀ヲ捧呈シタリ就テハ最初出訴ノ明治十年七月廿八日ハ勿論出訴期限内タルヲ判然タリ依之証表

ノ貸札三貫目ハ定約ノ利子ヲ加ヘ五貫目ハ一ヶ年百分ノ六ノ利子ヲ加ヘル内ニテ右入金六拾円ヲ引キ残ル元利金速カニ被告人ヨリ

〔一八二B〕

弁償受度旨陳述シタリ

被告代人T日幸藏ハ原告人ヨリ捧呈セシ証書ハ夫々相渡シタルニ相

違無之ト雖モ借用札五貫目ノ口ハ証表但書ノ通り明治元年辰十一

月

五貫目ノ札ヲ悉皆受取りタルニ無之明治元年辰十一月原告人ヨリ通ヒ帖

ヲ受取り其通ヒヲ以テ度々ニ三貫三拾五匁借受ケタル処借用札三貫目并右三貫三拾五匁償却期限ナル明治四年未十二月二至リ被告

人ニ於テ調金ノ資力無之ニ付遷延相成リ遂ニ明治九年旧曆四月ニ至リ被告人ニ於テ弟健作ハ負債追付方ヲ依頼セシ処健作ト原告人トハ外取引モ有之趣ニテ健作ヨリ明治九年旧曆四月十七日被

告人ノ負債ヘ対シ原告人ヘ金五拾円払入レ其節原告人ニ於テ殘金〔一八三A〕

ハ健作ト原告人トノ取引帖面ヲ双方精算ヲ遂ケ被告人ノ負債ニ差繼キ明治九年旧曆閏五月中二道付クヘクトノ定約ヲ記載シタル右金

受取書ヲ健作ヘ相与ヘタリ其後明治九年旧曆閏五月中原告

人ヨリ健作方ヘ計算ヲ遂クヘク掛合有之タル処其際健作ハ無摺他ノ用向アリテ計算ヲ相断リタル処原告人ニ於テ至急金子入用ノ趣

ニ付又健作ヨリ金拾円ヲ相渡シ明治九年旧曆閏五月廿九日付受取書ヲ取

置キ其後健作ニ於テ他ノ用向相濟シタルニ付原告人ヘ計算ノ義掛合タル処原告人ニ於テ無謂遷延計算ヲ遂ケス遂ニ明治十年五月廿一日岩國區裁判所ヘ勸解願出テ証書面ノ通り三貫目ト五貫目貸付ケタル却意外ノ不筋申立ルトニ付被告人ニ於テ承諾不致依

〔一八二B〕

之明治十年六月十五日右勸解不調ニ相成リタル義ニ付仮令今回原告人

ヨリ及出訴ト雖モ該借用札并殘金道付方ノ義ハ前陳ノ通り相違

無之ニ付目今通ヒ帖ハ紛失シタルナレ共實際ノ借用札三貫目

ノ元利ト三貫三拾五匁ノ元金トヲ合算セシ内ニテ入金六拾匁

ヲ引キ殘金ハ五拾匁受取書契約ノ通り健作ノ取引金ト差引計

算ノ上不足相立チタル方ヨリ弁金スル筋合ニ有之且原告人ニ

於テ両通受取書ヲ健作名宛ニシタルハ畢竟健作ノ代償ヲ承

諾シタル明証ナリ依之被告人ニ於テ固ヨリ原告人ノ請求ニ応スル

義

務無之加之該証ハ明治四年未十二月限り返金ノ約ニ付明治五年

壬申七月一日ヨリ原告人出訴ノ明治十年七月三十一日迄ノ年月日

ヲ計

〔一八四A〕

算セハ滿五ヶ年ト二日ナル故ヘ明治五年第三百号布告并明治六年

司法省第五十号ノ布達^(注93)ニ依リ出訴期限經過セシモノニ付被

告人ニ於テ返金ノ義務ヲ免レタル旨弁駁セリ仍テ判決スル

如左

第壹条

被告人ニ於テ借用札五貫目ノ口ハ實際三貫三拾五匁ノ外一切受取
ラサル旨申立ルト雖モ其通ヒ帖ヲ紛失シタル上ハ無証ノ弁解ニ付

信用セス

第貳条

被告人ニ於テ該債ハ弟健作引受ケ原告人モ健作ノ代償ヲ承諾

〔一八四B〕

シタル旨五拾匁受取書ノ契約并受取書ノ名宛ヲ証拠トシテ申述

ルト雖モ五拾匁受取書中ニ於テ健作代償或ハ引受ケノ明文ヲ顯

出セス又同証書中双方帖面ノ文字モ果シテ健作ノ帖面タルヲ証ス

ル明

証モ無之且ツ真ニ健作代償ヲ契約ナシタルナレハ明治十年辰十一

月付ケ該借用証ヲ依然原告人ヘ相渡シ置ク条理決テ無之加之

原告人ヨリ通ヒ帖ヲ被告人ヘ相渡シ置キタル廉原被告申分

吻合スル上ハ右双方帖面計算ノ契約ハ被告人ノ通ヒ帖ト

原告人ノ帖面トヲ計算スル義ト看做サ、ルヲ得ス然ルニ

被告人ニ於テ其通ヒ帖ヲ紛失シタル上ハ被

告人右申立モ亦信用セス

第叁条

〔一八五A〕

被告人ニ於テ該証ハ出訴期限經過セシ旨申立ルト雖モ原告人ニ於

テ該訴狀ヲ明治十年七月廿八日捧呈シタル処訴面粗漏ノ廉アリテ

訴訟所詰ヨリ改正ノ上可差出ト申達セラレタルニ付明治十年七月

三十一日改正ノ訴狀ヲ提供セシ旨申答ルニ付訴訟所詰平了鎮

ヲ取調ヘタル処了鎮ニ於テ原告人申立ノ通相違無之旨申出ル

ニ付原告人ノ該証出訴ハ明治十年七月廿八日ニテ固ヨリ出訴期限内ナリトス

第四 条

前条々ニ説明スル筋合ニ付原告人請求ノ通り三貫目ノ金三拾九円ノ借用ヘハ定約ノ利子ヲ加ヘ五貫目ノ金六拾五円ノ借用
〔一八五B〕

ヘハ返済期限ノ翌日ヨリ法律上ノ利子 一ヶ年 ヲ加ヘ現出シタル金員ノ内ヨリ入金六拾円ヲ引キ残ル元利金 百分六 ノ当日迄ヲ計算スシハ速ニ被告人ヨリ弁償スヘキ事

明治十年十月十三日 掛 判 事 横 地 安信 印

主 十六等出仕 小島範一郎 印
副 判事補 鈴木 円平 印

〔一八六A〕 〔六六〕 〔目次六四〕 〔立戻金催促ノ詞訟〕^(注94)
明治十年第六拾壹号* 朱書き
所長代理 印** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申 渡 山口縣第拾貳大區拾壹小區長門國

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

厚狹郡西須恵村□□□番地 士族
Y N 市 郎
被 告 同縣第拾大區拾壹小區周防國吉敷郡
吉敷村□□□□番地 農
Y M 龜右衛門

立戻金催促ノ詞訟審理ヲ遂ケシ処原被告申立ル要領如左
〔一八六B〕

原告Y N 市郎ハ明治二年三月*被告人ヘ旧山口藩札八拾貫目貸付ケ

タル処被告人ニ於テ返償方遷延ヨリ遂ニ目今ニ至リ右八拾貫目ノ残金尙四百七拾七円四拾壹錢八厘之アリ其証憑ハ第一第三第四号三通ノ証券ナリ就テハ被告人ヘ返金ヲ促ス処被告人ニ於テ兼テ定約ノ徳金ト差引クトキハ受取ルヘキ金円アリテ返却スヘキ殘金無之旨申立ルト雖モ決テ然ラス右徳金ノ原由ハ明治二年三月被告人ヘ貸与ヘタル八拾貫目ハ他ヨリ自分借受ケ而シテ被告人ヘ貸付ケ其後又旧藩撫育所ニ於テ自分千五百円借替ヘタル事有之処自分ノ債主ナル撫育所ニ於テ勸弁仕方相付キ元利金ニテ千四百九拾七円六拾九錢ニテ相済ミタリ然ルトキハ自分ノ被告

人
〔一八七A〕
ヨリ度々ニ受取リタル八拾貫目元利ハ悉ク自分ノ債主ヘ拂入二不及シ

テ被告人ヨリ受取リタル八拾貫目ノ元利ノ内自分ノ徳金之アルニ付其

徳金ヲ被告人ヘ分配スヘク定約ナシタリト雖モ結局精算ノ上被告人ヘ分賦スヘキ徳金ハ貳百拾五円貳拾五錢五厘ノ外一切無之二付八拾貫目ノ元利殘金ノ内ニテ右徳金ヲ差引キ尚ホ殘金貳百六拾貳円拾六錢三厘弁償受度旨陳述セリ

被告Y M 龜右衛門ハ原告人ヨリ提供スル第一第三第四号証書ハ相渡シタルニ相違無之二付原告人ヨリ請求スル金円ハ相渡スヘキ筈ナレ共元

來八拾貫目ノ負債ハ原告人ニ於テ他ノ債主ヨリ借受ケ其金ヲ自分借

受ケタル義ニ有之処原告人ノ債主ニ於テハ勘弁仕方相付キ原告人ヨリ

〔一八七B〕

些少ノ金円ヲ払入レ相済ムコトニ相成リタルニ付自分ヨリ原告人ヘ八拾貫

目ノ元利ニ内入レシタル金円ハ多ク原告人ノ徳金ト相成リ其徳金ヲ

原告人ヨリ受取ル約定ヲナシタルコト第四第六号其他教通証書ノ通りニ有之而シテ其徳金員數ハ貳千八百四拾三円六拾七錢貳厘ニ有

之ニ付此金員ヲ定約通りニツ割ニシテ自分ヘ原告人ヨリ受取ルヘ

キ

徳金千四百貳拾壹円八拾三錢六厘ト相成ルニ依リ其内ニテ原告人ヘ償却金員ヲ差引モ自分ヨリ受取ルヘキ金円多數有之仍テ差引計算ヲ遂ケ徳金ヲ原告人ヨリ受取リ度旨弁駁シタリ因テ成法ニ照シ判決スル如左

第壹條

〔一八八A〕

原告人ノ被告人ヘ向テ請求スル金円ハ原告人ニ於テ明治二年三月八拾貫目被告人ヘ貸付ケタル元利殘金ナル旨明言シ而シテ被告人ノ原告人ヨリ分配ヲ求ムル徳金ハ右八拾貫目貸借ヨリ生スル取引徳金ナル旨原被告申分吻合セルニ付原被告ノ互ニ請求スル金円ハ明治五年第三百号布告^(注96)第一項并明治五年司法省第四十一号布達第一條第五條ニ依リ採上ケ裁判〔三〕及ハス

第貳條

前條ニ説明スル筋合ニ付原告人ヘ訴狀却下候事

明治十年十月十五日

掛 判事

横地 安信 印

〔一八八B〕

主 十六等出仕 小島 範一郎 印
副 判事補 鈴木 円平 印

〔二八九A〕【六七】【目次六五】【貸金催促之訴】^(第57)

明治十年第百八号*
所長代理 印**
* 朱書き
** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申渡
原告

山口縣第七大區三小區周防國
都濃郡東豐井村□□□番

屋敷 平民 H M 利吉 代人 同縣
第拾大區拾壹小區同國吉敷郡
久保小路□□□番屋敷 平民

I H 清 吉

被告
山口縣第七大區八小區周防國

都濃郡徳山村□□□□□番
屋敷 土族

M I 義 彦

引合

山口縣第七大區二小區周防國
都濃郡東豐井村□□□番
屋敷 平民 H M 利吉長女

フ テ

引合

山口縣第七大區二小區周防國
都濃郡東豐井村□□□番
屋敷 平民 T I 藤藏 代人長男

〔二九〇A〕

T I 友 吉
引合
山口縣第七大區三小區周防國
都濃郡東豐井村□□□番

屋敷 平民

H M 實 造

貸金催促ノ訴訟審理ヲ遂ケシ処
原告代人 I H 清吉ハ明治五年八月*被告 M I
義彦ヘ第壹号証書取之金百円壹ケ月利足
壹歩五朱ニテ明治五年十二月返済期限ニテ
貸付明治六年旧曆七月第三号証書ノ通
* 西曆一八七二年

〔二九〇B〕

又々金百円利足壹ケ月壹歩付同暮期限テ
田地九畝ヲ抵当ニテ貸渡セシニ返済不埒ニ付
被告第四号ヨリ第六号迄ノ計算書ニ相見
ユル通百円貳タ口ノ元利金貳百貳拾七円ノ内利金
拾六円六拾錢余受取残リ貳百拾円三拾錢余
ノ返済ヲ促ス処第三号証書ニ記載セシ田地
九畝ヲ右貳タ口ノ元利金ヘ引受ケ皆済ニ致シ
呉ル、様被告義彦ヨリ相頼ミタレトモ代価引足
ラサル見込ニ付承允致シ難キ段相断ル処追テ
ハ可受戻積リニ付何卒許諾致シ呉レヨトノ

〔一九一A〕

㊦ニ付第三号百円ノ証文ヘ対シ仮リニ受取置ク
心得ニテ明治七年六月廿日*九畝ノ田地名前切換

* 西曆一八七四年

我所有トナリタルユヘ明治七年右田地ヨリ生スル

利益米ハ示談ノ上原被告各半方宛配分明

治八年ニハ原告手元ニテ耕作シ明治九年ニハ原告

ヨリSK正吉ナル者ヘ小作致サセシニ原告金子

入用儀出来シ明治九年十二月**右田地九畝外ニ

所有品相添同大區下松町MN庄兵衛方ヘ入質** 西曆一八七六年

金百五拾円借用スル節名義ハ売渡ト申ス

証文ナレトモ實際質入ナルユヘ地券証ハ今ニ原告

〔一九一B〕

利吉ノ名前ナリ之レヨリ先キ明治七年六月右田地

原告ノ所有ト相成ル節貳百円元金ノ利子ハ

田地ヨリ生スル利益ニテ流用スルトモ又ハ右ニテ不足

スルトキハ別段現金ヲ受取ル等ノ㊦及ヒ田地九畝ハ

何程ノ代価ニテ引受ルトノ取極メハ致シ置カサリ

シナレトモ全ク貳タ口ノ貸金元利ヘ対シ引受ケ

タルニ無之ユヘ兩度ノ借金証文ハ依然原告ノ

手ニ存在セリ尤貳タ口ノ内第三号証書ハ被告ヘ

差返スモ妨ナキニ似タリト雖モ貸金貳タ口ノ計算

半途且別段ニ田地讓渡ノ証文ヲモ受取ラサルユヘ
〔一九一A〕

後證ノ為今ニ所持致シ居ル旨陳述セリ

被告MI義彦ハ明治五年八月*明治六年旧曆

七月**兩度ニ金百円宛原告第壹号三号

証書ノ前借受タルハ相違無之然ルニ原告ヨリ

差越セシ第四号ヨリ第六号迄ノ計算書ニ

相見ユル通百円貳タ口ノ元利金貳百貳拾七円

ノ内利金拾六円六拾錢余払入殘金貳百拾円

三拾錢余返済ノ手段他ニ無之ユヘ原告第三号

証書ニ記載セシ田地九畝ノ抵当ヲ引渡スヘクニ付右

貳百拾円三拾錢余ノ元利金皆済ニ致シ呉度旨

〔一九一B〕

相頼ミシニ承允致セシユヘ明治七年六月二十日

副戸長役場ヘ申出九畝ノ田地ハ原告利吉名前ニ

切換タレトモ讓渡ノ証文ハ別段差出シ不申其節

以來百円貳タ口ノ証書差返シ呉ル、様催促ニ及フ

処右ハ貸金ノ代リニ受取リタル田地ナル㊦ヲ後日

證スル為留置クトノ㊦ニ付其儘ニ差置シニ明治

九年九月以來原告第三号即チ田地抵当ノ証書

TS新一HM屋與兵衛ト申者共ノ手ニ涉リ

返済ヲ促サル、ヨリ大ニ驚キ明治十年四月

原告利吉ハ旅行ノ留守ナレトモ長女フテ此事件

〔一九三A〕

承知致シ居ルニ付同人へ前頭ノ趣相咄シ被告
第壹号ノ書面ヲ読聞セタルニフテ承允ノ上
利吉ノ印頼ヲ取出シ自分へ押捺ヲ任セタルユヘ
押印ノ上取置キタリ元來九畝ノ田地ヲ原告へ
引渡セシ頃右代価ハ貳百四拾位ノ見込ニ付
貳百拾円余ノ負債へ引渡スハ残念ナリシカトモ
他へ入札払耀売等ニ致ストキハ再び我手ニ還ル
程モ無覺束原告トハ懇意ノ間柄ユヘイヅレハ
受戻スヘキ心事ヲモ語り尚俗ニ所謂涙金貳拾
五円程出シ呉ル、様嘆願セシトモ有之全ク貳百
(一九三B)

拾円余ノ価ヒナキ田地ヲ強テ相渡セシニ無之
乍去原告第壹第三両号ノ証文トモ田地名前
切換ノ際取返サバリシト今日ヨリ之ヲ觀レハ
頗ル不都合ナレトモ後年田地受返シノ節両通ノ
証文ヲ引替スルノ筈ニ有之タル旨申立タリ
引合人フテハ父利吉被告義彦へ貸金有之ヲハ
父ノ代人I日清吉申立ル通相違無之然ルニ明治
十年四月*義彦儀被告第壹号ノ書面ヲ持
參シ文言ヲ読聞セ父ノ印章ヲ押シ呉ル、様

* 西曆一八七七年

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

六〇〇(二九八)

申シタレトモ愚婦ノ身分其文意ヲ詳ニ解シ得ル能ハス且其節
(一九四A)

父ハ旅行ノ留守ユヘ相断リシニ父帰県ノ上不
折合ノ儀モ之レ有ラハ調替遣スヘクトノヲニ付父
ノ印判ヲ取出シ押捺ハ義彦へ相任セタル次第
ニテ元來被告義彦へ明治五年八月貸付原告
第壹号証書金百円返弁催促一件ヲTS新一ト申者へ
相頼ミタル節今迄通即チ第三号田地抵当
百円ノ証文ヲモ先ツ預リ置ヘシト新一取揚ケ其
後此ヲ新一己レカ負債ノ代リニHM屋與兵衛方へ
渡シ與兵衛儀被告義彦へ催促致セシヨリ
義彦打驚キ右ハ先年田地引渡シ相濟タル証文
(一九四B)

ナルヲ他人ノ手ニ涉リ加様ノ儀出来由断不相成
ニ付反古同様トノ書面受取置度トノヲニ付反古
同様トハ原告第參号証書ノヲトノミ心得
居リシニ第壹号明治五年八月貸付百円ノ証
文ト併セテ貳通ヲ反古同様ト記載シ之レ
有ル段以後ニ承リタレトモ貳通ヲ併セテ反古
同様トハ承允セシニ無之旨申述
引合人藤藏代人TI友吉ハ明治五年八月
MI義彦ヨリHM利吉へ差入タル金百円借用

証文へ受人ニ相立タルハ相違無之其後明治六年

(一九五A)

旧曆七月又々百円九畝ノ田地ヲ抵当ニテ義彦

借金セシニ兩度ノ元利金へ対シ九畝ノ田地ヲ義彦

ヨリ利吉へ引渡シ皆済ニ相成リタル由利吉妻ヨリ

承リタレトモ妻ハ已ニ死去セシユヘ之ヲ證スルニ由ナシ

ト雖モ此レニテ皆済シタルモノト信シ居ルニ付

明治十年四月被告第壹号ノ証書H M利吉

代判フテト記セシ分へ証人ニ相立タル旨

申立タリ

引合人H M実造ハH M利吉長女フテヨリM I

義彦へ相渡シタル明治十年四月付被告第壹号

(一九五B)

証書へ証人ニ相立タル訳ハ義彦元所有地九畝

ヲ貳ツニ分ケ其一部ハT I 藤藏一部ハ自分

小作致セシニ明治七年ノ秋H M利吉方ヨリ

粗暴ニ稲刈取ルニ付詰問セシニ利吉方ヨリ

義彦へ貳百円余ノ貸金ニ対シ此田地ヲ引受

タルユヘ勝手ニ刈取ル段申スニ付右地ハ兎モアレ

作物ハ我植付タル分ナレハ自由ニ至サセ難キ

旨相争ヒシニ中裁人アリテ和熟シ其年ノ

小作米ハ利吉義彦方へ各半方宛相納ムルニ

立至レリ此小作米半方ヲ義彦へ利吉ヨリ

(一九六A)

渡セシハ俗ニ云涙金ト申スニ相当リ且前額

貳百円余ノ貸金へ対シ受取リタル田地ナレハ

勝手ニ刈取ルトノ口上彼是該債ハ田地ノ

授受ニテ皆済セシモノト相考居ルニ付被告

第壹号明治十年四月付ノ書面へ証人ニ

相成タル旨陳述セリ

依テ裁判スルノ如シ

第一條 被告第壹号ノ証書タルヤ

引合人フテニ於テ反古同様トハ原告第三号証ヲ

指シタルニテ原告第壹号証ヲモ併セテ反古同様ト

(一九六B)

承允セシニ非ル旨申立且被告ヨリ相渡セシ

原告第貳号ノ書面文中(不工合モ有之候へハ

認替可申)*ト記載シタルヲ見レハ未タ確定ノ

* 丸カッコは朱書き

モノニ非ス加フルニ原告利吉ノ許諾ニ出サルヲ以テ

全ク無効ノモノナレハ採用セス

第二條 原告ニ於テ被告所有ノ田地九畝ヲ引

受シハ第三号地所書入百円ノ証書へ対シ仮ニ受

取リ置タルニテ全ク百円ニタ口ノ貸金元利皆済ヲ

許諾セシニ非ス必竟ニタ口貸金計算半途ニ付第壹第三両号ノ証書依然手元ニ存在

〔一九七A〕

スル旨申立ルト雖モ被告ニ於テ該地所ハ百円ニタ口ノ負債償却ノ為引渡サント欲スルヲ原告若シ其求需ニ応セスンハ何ソ被告ニ於テ該地所有ノ權ヲ原告ニ移スノ理アランヤ加之原告所有ノ權ヲ得タルノミニテ該償ノ計算半途ナルトキハ其地ヨリ生スル利益ヲ以テ元利納入ノ一部ニ引当ル歟又ハ別段ノ締約アルニアラスンハ其利益故ナク原告ノ所得トナルノ理アルヘカラス是ニ由テ之ヲ觀レハ兩通ノ証文ハ今ニ原告ノ手ニ存在スルモ

〔一九七B〕

該地所有ノ權ヲ授受セシ日ハ全ク原告ニ於テニタ口ノ貸金元利既済ヲ許諾シ地券狀ヲ申請シタルモノト認定ス

第三條 前條々説明スルカ如ク該証書ハ

既ニ取引済ニ属スルヲ以テ原告ニ於テ被告ヘ対シ返済ヲ促スノ理由無之事

明治十年十一月十九日* 掛 判事

横地 安信

印

* 日付は朱字

主 判事補 鈴木 円平 印
副 十六等出仕 竹内 丈太郎 印

〔一九八A〕【六八】〔目次六六〕【貸金催促ノ訴訟】
明治十年第百七号*
所長代理 印***
係 鈴木 円平 印**

*** 朱書き
** 鈴木 印
*** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申 渡

原 告

山口縣第九大区五小区周防国
佐波郡三田尻町□□□□番
屋敷 平民

M T 伊右工門

同縣同大区七小区同国同郡

宮市町□番屋敷 平民

S O 直 輔

〔一九八B〕

全

同縣同大区五小区同国同郡
三田尻町□□□番屋敷 平民
S K 重平代人兼同町□□□

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完） 五九八（二九六）
十（一八七七）

ハ資料V

□番屋敷 平民

A G 源 吉

被 告

山口縣第拾貳大區五小區長門国

厚狭郡小野村□□番屋敷 平民

H D 熊三郎

貸金催促ノ訴訟審理ヲ遂ケシ処

原告 M T 伊右エ門外三名ハ明治九年五月

(一九九 A)

廿六日*被告 H D 熊三郎ヨリ第壹号金千百円

* 西曆一八七六年

利足八朱付明治九年十月十六日返済期限ノ

証書取之内四百円ハ現金三百七円五錢三厘ハ

現酒ヲ以テ貸渡シ残り三百九拾貳円九拾四錢

七厘ハ終ニ貸与フルニ立至ラサリシ処右貸金

七百七円五錢三厘返済期限違約其後被告承

諾ノ上四百円ノ元金ヘ壹ヶ月毎ニ壹歩五朱利付

明治九年六月ヨリ十月迄五ヶ月ノ利子三拾円ヲ

元金ニ結ヒ更ニ四百三拾円トシ現酒ニテ貸渡セシ

代価三百七円五錢三厘ハ明治九年十月ノ期限

(一九九 B)

迄ハ無利足ナリシヲ期限後ハ利子ヲ生スル筈ニ

結約ニタ口合セテ七百三拾七円五錢三厘ヲ

明治九年十月ノ元金ト定メ利足八月ニ壹歩

修道法学 四一卷 二号

五九七 (二九五)

五朱付明治十年三月十四日*ヲ返済期限トシ

* 西曆一八七七年

若シ違約ノ節ハ貸渡シノ月ヨリ日別壹歩五朱

ノ違約金受取ル筈ニテ第貳号証書ノ通明治

十年二月十五日契約セシニ明治十年五月十二日

元金ヘ百円差入残金返済不埒ニ付明治十年

五月三十日迄延期勘弁相加ヘ此期限ヲ過ツトキハ

毎日壹歩五朱付即チ第貳号証ニ違約金

(二〇〇 A)

トアルヲ利足ノ名目ニ相改且被告数度ノ違約

ニ付諸入費ヘ対シ貸金ノ外ニ五拾円差出ス筈

ニテ第四号証書受取リタル処明治十年五月

三十一日ニ至リ第五号証書ノ通明治十年六月

十二日迄延期ヲ乞ヒ爾來第六号第七号第

八号ノ通延期致シ遣シタレトモ所詮違約スルノミ

ナラス數通ノ証書ヲ差入置ナカラ被告ニ於テ日別壹歩

五朱ノ利足ハ只約定ヲ堅固ナラシムル為ニテ

万一期限違約ニ立至ルトモ必ス之ヲ請求スル

訳ニテハ無之段自分共申スニ任セ延期ノ承允

(二〇〇 B)

ヲ得ンガ為之ヲ記入シタル迄ニテ真ニ許諾セシニ

非サル旨并ニ明治九年十月第貳号証書

四百三拾円ト之レアル三拾円ハ不当ノヲニテ壹歩

五朱利ヲ加ヘ元金ニ引結フノ契約ハナサ、リシ
ナド申立ルハ尤不條理ノ儀ニ之レアリ乍去日別
壹歩五朱ノ利子ハ明治十年五月三十日ノ
期限迄八月々壹歩五朱ノ利息ニテ勘弁

致シ遣シ元金七百三拾七円五錢三厘ノ内明治
十年五月十二日払入タル百円ヲ引去リ残り六百
三拾七円五錢三厘ハ明治十年五月三十一日ヨリ

(二〇一A)

返済当日迄日別壹歩五朱ノ利子ヲ加ヘ尚
第四号証ニ相記セシ金五拾円即チ諸入費ニ
当ル分共一同速ニ償却ヲ受度旨申立

被告H D熊三郎ハ明治九年五月廿六日付

金千百円利息八朱付明治九年十月十六日返済

期限即チ原告第壹号証書差入此内四百円ハ

現金三百七円五錢三厘ハ現酒ヲ以テ以上七百七

五錢三厘ノ前ハ借受タルニ相違無之然ル二期限

ニ至リ金子調達難出来ニ付原告ヘ延期勘弁

ヲ乞ヒ第貳号証書差入タレトモ四百円ノ元金ヘ明治

(二〇一B)

九年六月ヨリ十月迄毎月壹歩五朱ノ利子ヲ加ヘ
之ヲ引結ヒ四百三拾円ノ元金トナスヲ許諾セシ
儀ハ一切無之該証書ハ原告ノ手元ニテ調製シ

押印ヲ乞ヒタルユヘ契約外ノ一記載シアラントハ
思ヒモ依ラス粗漏ニ看過シ押印セシハ誤リ
ナレトモ毎月八朱ノ利息ヲ払ヘハ原告ニ於テ不折
合申立ル筋ハ無之筈且期限違約ノ節ハ

日別壹歩五朱ノ利息可相払旨証書ニ

記載シアルハ只約定ヲ堅固ナラシムル為ニテ

万一違約ニ立至ルトモ必ス之ヲ請求スルニテハ

(二〇一A)

無之旨原告ヨリ申聞セシユヘ延期ノ許諾ヲ

得ンガ為其意ニ応シタルモノニテ真ニ承允

セシニ非ス依テ四百円ノ元金ヘハ明治九年六月ヨリ

十月迄ハ毎月八朱ノ利子ヲ加ヘ明治九年十一月

ヨリ明治十年五月迄ハ四百円ト三百七円五錢三厘

ヲ合セ金七百七円五錢三厘ハ毎月壹歩五朱利

ヲ加ヘ明治十年六月ヨリハ既ニ払入タル百円ヲ

引去残りノ元金六百七円五錢三厘ハ毎月壹歩

五朱ノ利足ヲ計算シ此外二原告第四号証書ニ

記セシ金五拾円ハ是迄数度ノ違約ニ原告ノ

(二〇一B)

損害不弁ト信認シ居ルユヘ借金元利

一同償却ニ及フヘ然レトモ前顯明治九年

六月ヨリ十月迄壹歩五朱利ヲ加ヘ四百三拾円ノ

ハ資料V

元金トナシタルヲ并ニ毎日壹歩五朱ノ利子ヲ受取ラントスルハ原告不條理ニ付此兩條ノ求ニハ応シ難キ旨陳述セリ
依テ裁判スル左ノ如シ

第一條 被告ニ於テ原告ヘ差入タル第貳号証書四百三拾円トアル三拾円ハ契約外ノヲニシテ

〔一〇三A〕

承允セシニ非ル旨申立ルト雖モ第四号以下數通ノ証書何レモ三拾円ヲ元金ニ加入シ居キ別段錯誤ノ証拠無之ヲ以テ被告申分相立難シ

第二條 原告ニ於テ明治十年五月卅一日以後元金ヘ毎日壹歩五朱ノ利息ヲ加ヘ返済ヲ受度旨申立ルト雖モ被告ニ於テ數度ノ違約ニ付原告ノ損失アルヲ信認シ毎月壹歩五朱利ノ外別段五拾円ヲ出シテ其損害ヲ償ハントスルニ原告是ヲ足レリト

〔一〇三B〕

セス強テ毎日壹歩五朱ノ利子ヲ受取ントスルハ尤不條理ナル上当時其制限ナキモ如此過当ノ利子ハ契約ノ効ヲ有セサルモノニ付原告ノ請求相立難シ

修道法学 四一卷 二号

五九五 (二九三)

第三條 前條々ニ説明スル筋合ナルヲ以テ被告人ハ明治九年十一月ヨリ明治十年五月迄ハ原告携呈スル第二号証書合金七百三拾七円五錢三厘ヘ毎月

壹歩五朱ノ利息ヲ付シ明治十年六月ヨリハ

既ニ払入タル百円ヲ引去リ残り元金六百三拾

七円五錢三厘ヘ返済当日迄前同様ノ

〔一〇四A〕

利子ヲ加ヘ別段約定セシ金五拾円共速ニ原告人ヘ

償却シ原告人ハ之ヲ受取ルヘシ

明治十年十一月廿一日* 掛判事 横地 安信 印

* 日付は朱字

主 判事補 鈴木 円平 印
副 十七等出仕 日比 豪 印

〔一〇四B〕

(記述なし)

【二〇五A】【六九】【目次六七】【貸金催促之訴訟】^(注96)

明治十年第百号*

所長代理 印**

申渡

* 朱書き
** 「横地安信」の丸朱印

原告

山口縣第十一大区十二小區周防國
吉敷郡井關村ノ内阿知須浦□

□□番屋敷居住 商 E G 茂兵衛 代人

同縣第十大区十一小區同國同郡

久保小路町□□□番屋敷居住 商

I H 清 吉

被告

同縣第十一大區十二小區周防國吉

【二〇五B】

敷郡井關村□□□□番屋敷居住

士族 O N 孫右衛門 代人 同人長男

O N 小次郎

引合人

同縣同大区同小區同國同郡同邸

□□□□番屋敷居住 商

K T 治兵衛

貸金催促之訴訟審理ヲ遂クル処

原告代人 I H 清吉ハ明治四年*月日不覚旧山口藩札壹

* 西曆一八七一年

貫三百八拾貳匁即チ金拾七円九拾六錢六厘被告人ヘ貸

与ヘタル処淹滞返金イタサ、ルニ付当明治十年ニ至リ引

【二〇六A】

合人 K T 治兵衛^マ中裁ヲ以テ元金拾四円ニ立テ直シ利息

壹ヶ月式歩ト定メ明治十年^マ二月中返済期限ニテ更ニ

結約シ即チ第壹号證書取付ケ置タル処尙亦返戻

イタサ、ルヨリ催促ニ及フ処図ラサリキ被告人ニ於テハ該負債

タル素ト慶應三年*ノ貸借ヲ新規證文ニ書改メタル儀

* 西曆一八六七年

ニテ殊ニ此他差引計算スヘキ廉コレアル間双方精算ノ上

ニアラサレハ何分返金イタシ難ク且ツ第一号證書中返金

期限来ル二月廿九日ト記載コレアリ然ルニ当十年ノ如キハ二月廿

九日ノ日称無之ヨリ来ル明治十二年二月廿九日返金ノ期日

ニ付旁即今返金スヘキ理由無之抔種々不条理申立

【二〇六B】

更ニ返金ノ心底コレナクニ付明治十年三月六日*山口區裁判所

ヘ貸金催促ノ勸解願出ル処被告人前同様不条 * 西曆一八七七年

理申立ルヨリ明治十年三月九日不調ト成リ然ルニ被

告人ヘ対シ差引払渡スヘキ金員ハ毫モ無之且ツ慶応

三年ノ貸金ニハ決シテ無之ヲ返金期限来ル二月廿九日ト

記載コレアルトモ畢竟僻陋*ノ痴民ニシテ唯旧曆ニ拘泥シニ

* 「へきすう」片田舎

月廿九日モコレアルト心得別段掛合ヲモナサス其儘取置キ

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

十(一八七七)年

五九四(二九二)

タル儀ニテ實際明治十年二月中期限タルハ第二号證書

中當二月廿九日返金云々ノ明文コレアリ尤是亦廿九日ト認メ

タルハ右同様ノ無念ニ出ツルト雖トモ當二月ト記載セシ上ハ當

(二〇七A)

十年二月ノ結約ナルハ明瞭タリ殊ニ被告人申立ノ如クナラハ來ル

二月廿九日ト認メスシテ明治十二年二月廿九日ト明記イタスヘク

筈ニ有之且ツ第一号證書利息月別云々ト記載シタルハ

第一約シタル期ノ如ク返金ナササル際利子計算ノ異議

ヲ生ゼンモ図リ難クニ付仮令ヒ一ヶ月内取引ノ約定ト雖トモ予

メ月別ト認メタル儀ニ有之決テ明治十二年二月*返済ノ結

* 西曆一八八〇年

約ニハコレナクニ付速ニ元利金受取度旨申立タリ

被告人ON小次郎ハ原告捧呈シタル第一号證書ハ

差入レタルニ相違ナシト雖トモ元來該負債タルハ慶應三年

ノ貸借ヲ當明治十年二月一日ニ至リ新規證文ニ書換ヘタル

(二〇七B)

儀ニ決シテ原告人申立ノ如ク明治四年*ノ貸借ニハ無之且ツ原

* 西曆一八七一年

告人請求高ノ外却テ原告人ヨリ請取ルヘク金員コレアルニ付双

方精算ノ上ニアラサレハ何分返金イタシ難ク尤右ニ付証憑タ

ルヘキ書類ハ親類OB宗久ヘ預ケ置キ剩ヘ宗久儀目今他

行中ニ付即時呈拱スルアタハザレドモ第一明治十二年二月廿九日

返

濟期限ノ證書ヲ以テ既ニ上訴スルハ不条理當ナラス依之明

治十年三月六日原告人ヨリ山口區裁判所ヘ貸金催促ノ勸

解願出タル節其旨弁駁イタシ遂ニ明治十年三月九日不

調ト成リ然ルニ原告人ニ於テハ明治十二年二月廿九日ト明記セ

ス并ニ第二号證書中返金當二月云々ト書載有之ヲ以テ

(二〇八A)

當十年二月期限ノ旨申立ツレドモ仮令ヒ明治十二年ト明記セサ

ルモ來ルト認メタルハ其約定ヲナシタル月ヲ指スニアラス殊トニ

當十年ノ如キハ二月廿九日ノ日稱無之且ツ利息月別云々ト記載

シタルハ尅ヶ月内ノ期限ニアラス來ル明治十二年二月廿九日返済

期限ナルハ了瞭タリ然ルニ第二号證ノ儀ハ曩キニ一応

披見シタルトモ直チニ差返シ自分ニ於テ更ニ容諾シタル證書ニ

無之間該證ヲ以テ返済期限ヲ明証スル理由無之ニ付第

一号証明文ノ如ク來ル明治十二年二月廿九日ノ返期ナレハ原告人

ノ

請求ニ応スル義務ハ未タ無之旨答弁セリ

引合人K T 治兵衛ハ原告人ヨリ被告人ヘ貸金コレアル処返

(二〇八B)

金淹滞ニ及ヒタルヨリ中裁^マニ立入り周旋ノ末双方熟議上ニテ

更ニ明治十年二月中返済期限ト定メ尤右ニ付被告人ヨリ原告

人へ差入レタル第壹号證ノ儀ハ一円承知イタサ、レトモ明治十季
二月中返金期限ノ義ハ堅ク口約ヲナシ置キ且ツ第二号證
中当二月廿九日返金云々ノ明文有之尤廿九日ト記載イタシタ
ルハ未開ノ身分専ラ旧曆ニ泥^{どろ}ミ^{どろ}ス^{どろ}ク書載イタシタレトモ当二
月ト認メタル證書ヲ被告ニ於テ承諾ノ上取置キシ以上ハ明
治十年二月中返金期限ノ儀ハ相違無之旨陳述セリ
仍テ判決スル左ノ如シ

第一条 被告人ニ於テハ原告人請求高ノ外却テ原

〔二〇九A〕

告人ヨリ要求スヘキ金員コレアリ將タ該件ハ慶応三年
ノ貸借金ヲ新證文ニ書改メタル抔申述ルト雖トモ俱ニ
無証ノ陳述ニ付採用セス

第二条 被告人ハ第一号證書返済期限来ル

二月廿九日ト記載有之処当十季ノ如キハ閏年ニアラサルヨリ二
月廿九日ノ閏日ナク且ツ(利息月別)云々及ヒ(来ル二月)ト記
載

セシカ如キハ即チ一ヶ月内ノ期限ニアラス依テ来ル明治十二年二
月

廿九日返済期日ニ付原告人ノ請求ニ応スル義務ハ未タ無
之旨申立ツルト雖トモ利息月別幾許ノ儀ハ日別月別ノ區
画ヲ謂フ而已ニシテ壹月ニ幾許ト云フ可キ称ナルニ付之レヲ以テ
〔二〇九B〕

一ヶ月内ノ期限ニアラズト証明スルニ足ラス且ツ廿九日ト認メタ
ル

ヲ依然原告ニ取置キタルハ畢竟鄙邑ノ民庶ニ至テハ太陽
曆平年二月ノ日数二十八日ニ止マルヲヲ弁知セサル者無之ト
言難シ依テ推考スルニ月ノ大小ハ偶々之ヲ知り得タルモ其日
数ニ至テハ太陰曆ト同シク廿九日ヲ月末ト誤認シ改正ヲ乞
ハサリシモノト認定ス

第三条 原告人ヨリ提供シタル第二号證儀ハ被告

人ニ於テ曩キニ一閱シタレトモ直チニ差返シ更ニ承諾セサルノ証
書ナリト答弁シ且ツ該證書ハ既ニ引合人ノ手元ニ取返

シ而シテ被告人容諾シタル一点ノ証左ナキヲ以テ其効ナキ

〔二一〇A〕

モノトス

第四条 被告人ニ於テ第一号證来ル二月ト記載セ

シハ明治十二年二月ナル旨申立ツルト雖トモ来ルノヲタル逐次来
ル所ノ年月ヲ指スハ都鄙一般ノ通例ニシテ一閏年月ノ后

ヲ示スノ謂ヒニアラサルヲ以テ明治十一年二月ヲ指称セシニ似タ
リ

ト雖トモ明治十一年二月ニアラサル旨被告自カラ陳述スルニ付
是ニ依テ之ヲ觀ルニ其明治十年ノ結約ニ明治十二年二月ヲ指
シテ単ニ来ル二月ト記スルノ理ハアルヘカラス依テ廿九日ノ日称
アルトモ其期限タルハ實際当明治十年二月ノ月末ナリ

ト信認セリ

(二二〇B)

第五条 前条々ニ説キ明カス筋合ナルニ付被告人ニ

於テ原告人ノ請求ニ応スル義務ハ未タコレナクトノ申分

ハ相立タサルニ付原告請求スル元利金共速ニ払渡スヘ

シ

明治十年十一月廿九日*

* 日付は朱字

掛 判事 横地 安信 印

主 十七等出仕 日比 豪 印

副 判事補 鈴木 円平 印

山林代価取戻ノ訴訟審理ヲ遂ル處

原告代人 Y G 助三八被告 A B 清八ヨリ

明治九年九月*山林貳町五反買得致シ代価

金百五拾円相渡セシ處山林引渡延引ニ及フ

ニ付屢催促セシニ明治十年一月**ニ至リ右山林

故障出来セシ由ニテ既ニ受取シ代価ハ毎月貳歩

(二二一A) 【七〇】 【目次六八】 【山林代価取戻ノ訴訟】
明治十年第百貳拾壹号 係 鈴木 円平 印*

* 朱書きと「鈴木」の丸朱印

所長代理 印** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申 渡

原 告 山口縣第一大區八小區周防国

大島郡東屋代村□□□□番

屋敷居住 平民 S M 伝介 代人

(二二一B) 被告 山口縣第拾大區三小區周防国

吉敷郡小鯖村□□□□番屋敷

居住 平民 A B 清八

Y G 助三八

同縣第拾大區拾壹小區同国

吉敷郡堂ノ前町□□□□

□番屋敷居住 平民

Y G 助三八

差返ニ付承諾致シ呉ル、様相頼ユヘ承允シ

約定書取置処期限等閑ニ打過漸ク

明治十年五月山林貳町五反ヲ代金百三拾

五円ニテ引受呉ル、様申スニ付是亦其頼ニ

ノ利息ヲ付シ明治十年三月十四日限可

(二二一A)

** 西曆一八七七年

— 88 —

応シ元利金ノ内ヘ引受遣セシニ残金返弁
不致ノミナラス第貳拾大區萩居住士族

UD 誠ヘ金子相渡シタルニ付山林代価ハ最
早皆済ニ相成居ル抔申立レトモ前頭百三拾
五円ヘ対シ山林貳町五反ヲ引受タル他尠錢
〔二二一B〕

モ受取タル儀ハ無之ニ付残金四拾貳円ヘ利子
ヲ加ヘ速ニ受取度旨陳述シ

被告ハ原告提供スル證書ハ差入タルニ相違
無之然ルニ第貳拾大區萩本居住士族

UD 誠ト申者山林売買最初ヨリ立会
此事件承知ニ付右返償引当外ニ諸雜費

ヘ対シ金百六拾三円明治十年三月八日相渡
シ其後誠ヨリ原告申談百三拾五円ハ山林貳町

五反ヲ以テ原告ヘ相渡シ拾円ハ現金差入残余ハ
原告ト誠トノ相對借ニ相成タル

旨承リタレトモ別段原告ヘ対スル証拠書類
モ無之且誠儀ハ長病ニテ臥床罷在即今

〔二二三A〕
奈何トモシ難クニ付原告請求スル元利金

ノ内当坐貳拾円差入残リハ拾ケ年賦払入ニ
勘弁致シ呉ル、様示談スレトモ承允セス自分ニ

於テハ貳重払ノ難渋モ有之ニ付一時ノ請求
ニハ難応旨申立タリ
依テ裁判スル左ノ如シ

第一條 被告ニ於テ山林代価返償
ノ金円ハ既ニUD 誠ヘ相渡シ貳重払ノ
難渋有之ガユヘ原告一時ノ請求ニハ應シ
難キ旨申立ルト雖モ原告ヘ対スル証拠
〔二二三B〕

無之ヲ以テ貳重払トノ申分相立難シ
第貳條 前條ノ筋合ナルヲ以テ被告人ニ
於テハ山林代価返償殘金四拾貳円ヘ明治
十年六月ヨリ返済当日迄約定ノ利子ヲ
附シ速ニ原告人ヘ返却スヘシ

明治十年十二月七日
掛 判 事 横 地 安 信 印
主 判 事 補 鈴 木 円 平 印
副 十六等出仕 竹 内 丈 太 郎 印

〔二二四A〕【七二】【目次六九】【寄附耕地取戻ノ訴】^(注四)
明治十年第百貳拾五号*

* 朱書き

（資 料）

所長代理 印**

** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申 渡

原 告

山口縣第壹大區八小區

周防国大島郡西屋代村

□□□□番屋敷居住 士族

FY庄作 代人 同縣同大區

同小區同村□□□□番

屋敷居住 士族

K M 正 作

（二一四B）

被 告

山口縣第壹大區八小區

周防国大島郡東屋代村

□□□□番屋敷浄土宗

SR寺住職MH大道 代人

徒弟

Y I 龍 苗

寄附耕地取戻ノ訴訟審理ヲ遂ル処

原告代人KM正作ハ四世ノ祖新兵衛代

天保四年二月*先靈菩提ノ為メ護念經

千部永代読誦料トシテ所有ノ田畑三反

（二一五A）

* 西曆一八三三年

修道法学 四一卷 二号

五八九（二八七）

七畝貳拾歩山林八畝共SR寺へ寄附セシニ

右ノ内山林三畝ハ同寺先住隋譽自保ニ充

拂ノミナラス当住職大道ニ於テモ不都合

ノ所置有之就テハ自然法勤懈怠終ニ先祖

寄附ノ趣旨ニモ不相叶様立至ルハ必然ト相考

明治八年七月*山口縣聽訟課岩国出張所へ寄

附地取戻ノ出訴ニ及フ処示談相調第壹号

証書ノ通明治八年八月廿七日現地引渡ス筈ニ

相決シタルユヘ先年來SR寺ヨリ受取居シ

証拠物等ハ悉皆差返シ右期日ニ至リ地所

（二一五B）

山林トモ受取此内ニテ地所反別壹畝拾歩ト

山林五畝ハ名前切換既ニ原告ノ所有ニ帰シ

タレトモ残りノ田畑名前替ノ儀種々故障申

立ルニ依リ明治十年八月廿九日*岩国區裁

判所へ勸解願出説諭ノ末第貳号証ノ如ク

地券名前換ノ儀連印ヲ以テ何時モ差出ス

ヘク以往故障筋無之旨ノ一札ヲ差出シ置

ナカラ其約ニ背戻シ或ハ檀家ノ者ヨリ故障

申立ル由ヲ口実トシ或ハ自身ノ所有ニ無之

忤ト申張前約ヲ履行セサルニ付寄附地

（二一六A）

* 西曆一八七七年

* 西曆一八七五年

速ニ我手ニ歸ル様致度尤被告不如法ニシテ
法勤懈怠ノ確証トテハ無之旨陳述シ

被告代人 T I 龍苗ハ天保四年二月原告

四世ノ祖新兵衛代田畑山林共当寺ヘ寄附

セシハ相違無之処明治八年頃ヨリ右寄附地

取戻シ度段屢掛ケ合越タレトモ差返スヘキ道理

之レ無キ旨返答ニ及ヒシニ明治八年七月山口縣

聽訟課岩国出張所ヘ原告ヨリ出訴セシユヘ

熟談和解シ原告ヘ第壹号証書差入レ右

期限明治八年八月廿七日現地引渡シ縣庁ヘ

〔二二六 B〕

地券名前切換ノ願書差出セシ処寄附ノ

願未取戻ノ事実詳細申出ヘクトノ事ニ付

前件ノ次第申出テシニ明治六年^{（注12）}第貳百四拾

九号公布ニ依リ聞届不相成爾来原告ヨリモ

追々出願セシ由ナレトモ矢張同様ニテ其後

岩国區裁判所ヘ原告ヨリ勸解出願ニ及ヒ

タル節モ地券名前換ノ^{（注13）}付テハ被告ニ

於テ固ヨリ拒ム儀ニハ無之ユヘ原告ヘ第貳号

証差入レ明治十年^{（注14）}九月十二日被告ヨリ

縣庁ヘ再願セシニ其指令ノ要旨ハ無余儀

〔二二七 A〕

次第ナラハ今般撰定ノ檀家惣代ヲ連署シ
其宗大教院添書取付一応譲渡ノ儀可

願出筋ト心得ヘクトノ^{（注15）}有之依テ惣代ノ

者ヘ其趣申談スル処承允セス然ルニ原告

ヨリハ被告ニ於テ故障申立ル様訴出タレトモ

イカニ原告ノ需ニ応セントスルモ實際行ハ

レサル^{（注16）}有之畢竟明治六年第貳百

四拾九号公布アルニ心付カス不都合ノ契約ヲ

為シタル段今更後悔罷在乍去法勸懈

怠等ノ儀ハ一切無之旨答弁セリ依テ

〔二二七 B〕

判決スル左ノ如シ

原告提供スル証拠タルヤ明治六年

太政官第貳百四拾九号公布ニ牴觸

スルヲ以テ訴狀却下候事

明治十年十二月廿日

掛	判	事	横地	安信	印
主	判	事	補	鈴木	円平
副	十六等出仕	竹内	丈太郎	印	

西曆一八七七年

〔二八A〕【七二】目次七〇【貸金催促之訴】(法廷)

明治十年第百十二号*

所長代理印**

* 朱書き
** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申渡

原告

山口縣第四大區九小區周防國

玖珂郡玖珂村□□□番屋敷

居住 平民 T N 判兵衛 代人 同縣同

大區同小區同國同郡同村□

□□□番屋敷居住 平民

T D 爲助

被告

山口縣第四大區九小區周防國

〔二八B〕

玖珂郡玖珂本郷□□□□番屋敷

居住 平民

H S 富五郎

貸金催促之詞訟審理ヲ遂ケシ処

原告代人 T D 爲助ハ明治八年五月*金貳百円田 * 西曆一八七五年

畑貳反九畝爲抵当被告人 H S 富五郎亡父

兵右衛門ハ明治九年三月*期限ニテ貸渡シ第一号

證書取置ク処期限ニ至リ延期勘辨ヲ乞ヒ兵右 ** 西曆一八七六年

衛門并ニ証人兵右衛門二男喜三郎連印ニテ明

治九年十二月返済スル証書第二号ノ通差入タレトモ

〔二一九A〕

尚其期限違約スルニ依リ爾來度々催促致スト

雖モ返辨不埒ニ打過ル内明治十年一月兵右衛門

病死スルニ付相続人富五郎ヲ相手取明治十年

二月廿七日*岩國區裁判所へ勸解願出ル所理不尽

申立明治十年二月廿九日不調ニ依テ明治十年 * 西曆一八七七年

三月五日山口裁判所へ上訴致ス処明治十年三月十八日

貸金貳百円ノ抵当田畑ヲ引渡シ地券証名前切換

願ヒハ明治十年三月三十一日限り差出スヘク旨被告富五郎ヨリ

示談第三号証書差入ル、ニ付自分ヨリモ被告第

二号証書ノ通此事件皆済ニ相成後日異議

〔二一九B〕

申聞數旨ヲ記載シ相渡シ熟談済口證文明治

十年三月廿七日差出シタリ然ルニ地券名前切換願差

出ス期限則明治十年三月三十一日ニ至リ於被告約定

ノ如ク地券名前切換願出ルニ於テハ第一号証書差

返ス心得ナリシニ現ニ田畑モ引渡サス名前切換モ不致

前約ニ違背スルニ付期限後名前切換ユル歟又ハ現金

ヲ以テ返済スル歟ノ兩条督責スレトモ埒明キ不申ニ付

尚又明治十年八月廿四日岩國區裁判所へ勸解願

出ル処被告富五郎ヨリ借金元利貳百八拾四円一時

金調難出来趣申立ルニ依リ明治十年九月十一日

(二一〇A)

不調ニ相成タルユヘ今回及上訴次第ニテ土地引渡地券名前切換等ノ義ハ全ク被告ヨリ破約致スヲ以テ今日ニ至リテハ土地ヲ引受ケハ承允難致依テ元利金トモ速ニ返辦ヲ受度旨陳述セリ

被告人H S 富五郎ハ原告人捧呈スル第一号

証書ハ亡父兵右衛門差入タルニ相違無之ト雖モ元

来右証書原由ハ明治八年五月亡父兵右衛門狂氣

ノ砌同人三男卯之助同四男八三郎二名ノ者ヘ分与差

遣ス覚悟ニテ金貳百円ノ証書ヲ認メTN判兵衛

ヨリ借受タル体ニシテ只借用證書差入置タルノミニ付

(二一〇B)

證書ハ取返ス可ク様明治十年一月八日兵右衛門臨終

之節自分母ヘ遺言セシ旨母ヨリ承リ初メテ其次第

承知致シタルニテ原告第一号証書ノ期限ヲ明治九

年十二月三十日迄延期ヲ乞ヒ差入タル由ノ原告第二

号証書ハ真正ノ物ニアラズ如何トナレバ亡父名下ノ印ハ実

印ニ無之喜ノ字クツシト相見ユルニ付テハ弟喜三郎

義TN判兵衛ト馴合偽証ヲ調ヘ亡父ノ名下ヘハ

己レガ印ヲ押シ差入タルニテ全ク喜三郎ノ奸策

ニ出タルモノト思念シ居ル処原告第一号証書ヲ以テ

判兵衛代人TD為助ヨリ頻リニ貸金催促致スハ

(二二一A)

無実ノ難題ト存シ弟喜三郎ヲ相手取明治

十年三月五日柳井警察署ヘ吟味願差出シタレトモ

元来実弟喜三郎TN判兵衛ト一緒ニ相成居ル

事ニテ兄弟ノ汚名ヲ曝スモ恥辱ト存シ抵当ニ

田畑二反九畝ノ内四歩方自分ヘ取附六歩方TN判兵

衛ヘ割賦ニテ返済可致ト示談願下致スニ豈図ンヤ明

治十年三月五日山口裁判所ヘTN判兵衛代人TD

為助ヨリ出訴致スニ付最前柳井警察署ヘ出願之

砌和解ニ及シハ詐偽之振舞ナルヤト詰問スル処YM

久米藏TO市兵衛TD定右衛門KZ卯兵衛四名

(二二一B)

之中裁ニ依リ第一号證書抵当ノ耕地不殘明治十

年三月三十一日限り引渡ス約定ニテ明治十年三月十八日

原告ヘ第三号証書差入原告代人TD為助ヨリハ第

二号ノ証書受取ル節亡父兵右衛門ヨリ差入置タル原

告第一号証書差返シ呉レル様申聞ル処山口之方ヘ預

ケ有之ニ付直チニ返サレジト而已申聞其後明治十年三

月三十一日ノ期限ニモ催促致スレトモ右第一号証書ヲ返シ

呉レ不申而已ナラズ現金ナラテハ不受取抔不条理申

立ルニ付等閑ニ打過ル処明治十年八月廿四日原告ヨリ貸

金請求之儀岩國區裁判所ヘ勧解願出タシユヘ最初

〔二二二A〕

約定ノ通り耕地ヲ引渡スヘク段答弁スレトモ金子ナラ
テハ請取サル旨強テ申立ルニ付明治十年九月十一日不調
ニ成タル処答書中借金致タル義毛頭無之并反

古同様ノ証書ヲ以テ金請求ノ筋無之趣相認タル

ハ文言之不足ヨリシテ不都合ニ涉リタレトモ最前約定
ノ通り抵当ノ地所ハ何時モ引渡スヘク乍去原告最初
ノ契約ニ背キ現金返済ヲ請求スルハ甚不条理ノ義ニ
付其需ニハ難応旨答弁セリ仍テ判決スルヲ左ノ如シ

第一條

被告ニ於テ原告提供スル第一号証書ハ差入タルモ

〔二二二B〕

現金借受タルニ無之且第二号証書ハ実弟ノ奸策

ニ成立真正ノモノニ非ラサル旨申立ルト雖第一第二
両号ノ印影同一ニシテ別段詐偽ノ証及ヒ現金ヲ
借受サルノ確証無之ヲ以テ俱ニ採用スルニ足ラス

加フルニ該債償却ノ為メ抵当ノ地所ヲ引渡スヘキ
契約ヲ為シタルハ全ク返済ノ義務ヲ負担セシ

モノトス

第二條

被告人ニ於テ原告第三号証書期限ニ至リ地
所ヲ引渡シ及ヒ地券名前切換ヲ出願セント

〔二二三A〕

スルニ原告人前約ニ違背シ現金ヲ受取ラントスルヲ

以テ時日遷延ニ至リシ旨申立ルト雖モ果シテ然ル

トキハ原告ヨリ差出シタル第二号証ヲ以テ原告人ノ不條理ヲ責メ

該約ヲ履行シテ第一号証ヲ取戻スノ出訴ニモ可

及筈ナルヲ今日迄等閑ニ打過キ反テ出訴サル、ニ

至リシハ被告人ノ破約ニ出タルヲ明カナリ爰ニ於テ条

理ヲ推考スルニ被告自ラ其約ヲ破リナガラ今日ニ至リ強テ第

三号証ノ義務ヲ尽シテ足レリトスルノ理無之依テ

原告人ニ於テ第一号本証書ニ立戻リ貸金

元利ノ請求ヲ為スハ其当ヲ得タルモノトス

〔二二三B〕

第二條

前条ニ説明スル筋合ナルヲ以テ被告人ニ於テハ

原告人請求スル貸金元利共速ニ償却スヘシ

明治十年十二月十三日

掛 判 事 横地 安信 印
主 十六等出仕 竹内 丈太郎 印

副 判 事 鈴木 円平 印

〔二二四A〕【七三】【目次七一】【貸金催促之訴】^(法源)

明治十年第百貳拾四号*

所長代理 印**

* 本行朱書き
** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申渡

原告 山口縣第九大區七小區周防国

佐波郡宮市町□□番屋敷

居住 平民

A B 恭 輔

被告 山口縣第九大區八小區周防国

佐波郡西佐波令□□□□番

屋敷居住 平民

〔二二四B〕

Y S 萬 藏

貸金催促ノ訴訟審理ヲ遂ル処

原告 A B 恭輔ハ第三支店ニテ呉服商売

致ス処明治四年三月*被告ヨリ呉服反物請売 * 西曆一八七一年

致シタキ旨相談ノ末被告所有ノ建物三棟

有掛リ不殘屋敷地壹畝貳拾二步共代

価旧山口藩札拾六貫貳百五拾目ニシテ被告ヨリ

自分へ譲渡證文差出シ其実ハ右金高二超過

セサル内ハ幾度ニモ呉服品貸渡ス筈ニテ右商

法ノ後口質即チ身元金へ対シ預リ置キ自分

〔二二五A〕

ヨリモ被告へ第壹号証書ヲ相渡シ屋敷地券

狀ハ一旦自分ノ名前ニ切換タレトモ被告ニ於テ請売

商売相止メ呉服代価ヲモ返済スレハ直チニ

地所建物ハ差返ス約定ニ有之タル処明治四年

六月日不覺被告右商売ヲ相止メタルニ依リ明治

四年三月ヨリ四月迄ニ貸渡セシ呉服反物ノ代価

払殘リ勘定精算旧藩札七貫八百八拾七匁貳分

貳厘ト外ニ右抵当へ対シ貸与ヘタル現金貳拾円共

返済ノ催促ニ及フト雖モ所詮不條理而已申張

遷延スル処屋敷券狀ハ自分ノ名前ニ切換タルモ

〔二二五B〕

税金ハ萬三^{マイ}ヨリ収納致シ来リタルユへ前頭貸

金償却ノ上ハ何時モ建物地所共返シ遣スヘク

依テ旧藩札七貫八百八拾七匁貳分貳厘ヲ金ニ

直シ百貳円五拾三錢四厘ト外ニ現金貸与ヘタル

貳拾円トモ合金百貳拾貳円五拾三錢四厘へ相当

ノ利子ヲ加ヘ返済センヲ請求セリ

被告 Y S 萬藏ハ原告第三支店ニ於テ呉服反物

受売致度段相談ニ及フ処承允セシユヘ明治

四年三月自分所有ノ建物三棟有掛リ不殘

屋敷地壹畝貳拾三步共代価旧藩札拾六貫

〔二二六A〕

貳百五拾目ニシテ原告ヘ譲渡證文差入其実ハ右金高二超過セサル内ハ追々呉服類借受ル筈ニテ其後口質ニ引当置キ後日商売相止メ代金払済ノ上ハ右質品差返シ呉ル、約定ニテ原告ヨリ第壹号証受取置タル処明治四年六月日不覺

商法相止メタルユヘ借用呉服代価払残旧藩札

七貫八百八拾七匁貳分貳厘償還スヘクニ付建物并地所譲渡證文差返シ呉ル、様申入ル、ト雖モ右ハ永代買受タルニ付今更差返シ難ク乍去

呉服代ヘ毎月壹歩貳朱ノ利子ヲ加ヘ返済ノ上ハ

〔二二六B〕

差返スヘク申セトモ元来売掛代金ニテ利息ヲ加フ

ヘキ約定モ無之ニ付當時其求メニハ応セスシテ

月日遷延ニ及ヒシ処右品物代価ハ固ヨリ返償

ノ義務ヲ免カレサルモノニナレトモ自分ハ明治十年

六月^{*}身代限処分ニ相成リ其後末タ身代持直スニ

^{*}西曆一八七八年

立至ラス依テ右屋敷地券狀ハ既ニ原告ノ名前ニ

切換アルモ税金ハ自分取納シ實際書入質ナルヲ

以テ右抵当品ヲ売払償却スルノ外他ニ手段

無之尚又貳拾円現金ノ借用ハ明治四年五月ト

九月ト十二月トノ三度ニ返済スル約定ニテ品物

〔二二七A〕

代価抵当質ノ建物并地所ニ關係無之別段

ノ借金ユヘ此品物代価ニ引結ヒ催促ヲ受クヘキ筋

無之旨陳述セリ

仍テ裁判スル左ノ如シ

第一條

被告ニ於テ廢商ノ際呉服代価ノ残額ヲ

償還センコトヲ原告ニ掛合シニ利息ヲ加ヘサレハ

受取ラサル旨申ニ依リ月日遷延ニ及ヒシ段

申立ルト雖モ証拠無之ヲ以テ採用セス

第二條

〔二二七B〕

被告ニ於テ原告ヨリ差出セシ返リ證文ヲ提供

シテ地所建物ハ實際書入質ナル旨申立ル

ト雖モ既ニ地所券狀ハ原告ノ名前ニ切換且

此證文タルヤ呉服受売商ヲ

廢止スル時ヲ以テ原告ヨリ地所建物トモ

返還スルノ約定ニシテ若シ品物代金不足

スルトキハ該證文反古タルヘシノ明文アル上ハ

當時速ニ其代価ヲ皆済シテ地所建物

ヲモ受戻スヘキ筋ナルニ曩ニ身代限処分

ノ際我所有ノ財産タルヲ明確ナラシムルニ至ラサリシハ被告ニ於テ之ヲ訴フルモ既ニ

〔二二八A〕

前約ニ背違セシヲ以テ其効ナキヲ自認シテ止ミタルモノト謂ハサルヲ得ス是ヲ以テ地所及ヒ建物所有ノ權ヲ原告ニ移セシハ其許容ニ出タル「明カナル」ヲ以テ今日ニ至リ抵当品ナリトノ被告申分相立難シ

第三條

原告ニ於テ被告ヨリ一旦讓受タル地所建物ハ實際書入質ナルヲ以テ被告ヘ貸与セシ呉服代価ノ残額ヲ速ニ受取度旨請求スト雖モ地券名前モ既ニ切換且被告ヘ相渡シタル

〔二二八B〕

返リ證文タルヤ被告人呉服受売商ヲ相止ルノ時ヲ以テ地所建物共返却スルノ期限トシ若シ其代価返償不足スレハ該約消滅ノ明文ヲ掲ケタレハ既ニ被告廢商シテ代価ヲ皆済セサルノ時該地所建物等ハ全ク原告ノ所有ニ確定シタルモノトス

第四條

原告提供スル第貳号貸金貳拾円ノ證文

ハ出訴期限既ニ經過スルヲ以テ受取ヘキ權利ヲ失シタルモノニ付採用セス

〔二二九A〕

原告ニ於テハ明治四年七月以來被告ヨリ収納セシ該地所建物ニ係ル税金ハコレヲ返償スヘキモノニシテ該家屋及ヒ土地ノ貸賃ハ之ヲ請求スルノ權利アルモノトス

第六條

前條ニ説明スル筋合ナルヲ以テ原告ニ於テ第壹号證書ヲ以テ貸金返済ヲ請求スヘキ理由無之トス

但 訴訟入費ハ原告ヨリ償却スヘシ*

明治十年十二月廿四日

* 朱書きで挿入

掛 判 事 横地 安信 印
主 判 事 補 鈴木 円平 印
〔二二九B〕

副 十七等出仕 日比 豪 印

〔二三〇A〕【七四】【目次七二】【預ケ品取戻シノ詞訟】^(注10)

ハ資料V

修道法学 四一卷 二号

五八一(二七九)

明治十年第百二十六号*

所長代理印**

* 本行朱書き
** 朱書きと「横地安信」の丸朱印

申渡

原告

山口縣第一大區九小區周防國

大島郡横見村□□□番屋敷

平民 MM末五郎 代人 同縣第十

大區十小区同國吉敷郡中河原

町□□□番屋敷 平民

K G 休右衛門

被告

同縣第六大區八小區同國熊毛郡

〔三三〇B〕

浅江村□□□番屋敷 平民

T M 重平

預ケ品取戻シノ詞訟審理ヲ遂ル処

原告代人 K G 休右衛門ニ於テハ明治九年八月*中*金員

* 西曆一八七六年

入用ノ儀コレアルニ付金策方被告 T M 重平ヘ依頼シ

之レカ抵当トシテ豫メ新製ノ權衡ヲ渡シ置キタル

処金調遷延ニ及フヨリ明治十年八月**ニ至リ更ニ第一

号證取置キタル処爾後何分ノ義報知セサルニ** 西曆一八七七年

付右權衡差返シ呉ル、様改メテ掛合ニ及フ処

彼此苦情申立返還ナサ、ルニ付山口區裁判所ヘ勧

〔三三二A〕

解願出タル処被告人ニ於テ只管猶予ヲ乞フ

而已ニシテ事結果ニ至ラサルヨリ明治十年九月廿二日

勸解不調トナリ尚其後モ種々猶予而已ヲ乞

ヒ返済致シ呉レサルニ付速ニ返償受ケ度旨陳述

セリ

被告 T M 重平ニ於テハ原告 M M 末五郎ヨリ金策

ノ依頼ヲ肯ヒ依テ抵当ノ為メ新製ノ權衡

ヲ預リ置キ就テハ原告ヨリ呈供シタル第一号證

ハ差入レタルニ相違ナシト雖トモ其際手元ニ於テ金子

調達イタシ難クニ付折節当地ヘ来合セ居ル岐

〔三三二B〕

阜縣美濃國岩村平民 O Y 喜助ヘ金策依

頼ニ及ヒ為メニ右權衡ハ喜助ヘ渡シ置キタル処

図ラサリキ喜助ニ於テ右權衡ヲ以テ金借ノ上擅

ニ費用シタル趣ニテ其儘歸県今ニ立越サ、ルニ付今

ヨリ金調ノ上右品請返サ、レハ返還ノ手段無之

処方今金融ノ目途相立タサルニ付速ニ返償ノ

義ハ致シ難ク旨答弁セリ

仍テ判決スル左ノ如シ

第一条 被告ニ於テ該品ハ O Y 喜助ヘ金調依

頼ノ末預ケ置キタル処図ラサリキ喜助ニ於テ右品

〔二二二A〕

ヲ抵当トナシ金借ノ上擅ニ費用シタル儀ニテ今ヨリ金調ノ上該品請返サ、レハ返償ナシ難ク然ルヲ方今金融ノ目途コレナクニ付速ニ返還致シ難ク

旨申立ツルト雖トモ畢竟被告金調ニ苦ミ当

時原告ノ需メニ応スルヲ能ハサルヨリ止ムヲ得ス

シテ之レヲ喜助ニ依頼セシモ原告ノ許諾ヲ得

サル上ハ被告ト喜助ノ間ニ於テ如何ナル紛雜

ヲ生スルモ敢テ原告ノ干預スル所ニ非ルヲ以テ

被告申分難相立

第二条 前条ニ説明スル筋合ナルニ付權衡

〔二二二B〕

其他附屬ノ品トモ速ニ被告ヨリ原告ヘ差

返スヘシ

明治十年十二月廿六日

掛 判 事 横地 安信 印

主 十七等出仕 日比 豪 印

副 判事補 鈴木 円平 印

〔二二三A〕【七五】【目次七三】【貸金催促之訴】^(注10)

明治十年第百二十二号*

所長代理 印**

申 渡

** 朱書きと「横地安信」の丸朱印 * 本行朱書き

原 告 山口縣第十大區十二小區周防國吉

敷郡宮野村□□□□番屋敷平

民 K T 仁三郎 代人 同縣同大區同

小區同國同郡早間田町□□□□

□番屋敷寄留 土族

O N 軌太郎

被 告 山口縣第十大區十一小區周防國吉

〔二二三B〕

敷郡久保小路町□□□□番屋敷寄

留 平民 T U 清兵衛 代人 同縣同大

區同小區同國同郡同町□□□□番

屋敷 平民

I H 清 吉

貸金催促之詞訟審理ヲ遂ケシ後

原告代人 O N 軌太郎ハ原告 K T 仁三郎明治

九年*五月二日 旧曆四月 金貳拾円貳歩明治九年五

* 西曆一八七六年

月十三日 旧曆四月 限リ返済約定ニテ第七大區二十小區

廿日

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完) 五八〇(二七八)

湯野村居住ツヤ蔵ナル者請人ニ立第十大區十一小區

(二三四A)

久保小路町□□□番屋敷寄留平民TU小市へ

貸金致ス処期限ニ至リ返弁不致仍テ度々催促

致スト雖モ不埒ニ打過クルニ付明治十年*九月廿日山口

*西曆一八七七年

區裁判所へ勸解願出ル処被告ニ於テ昨明治九年

身代限り差出シ金調ノ目途無之旨申立遂ニ明治

十年十月三日不調ニ相成タルニ仍リ明治十年十月廿七

日終ニ上訴ニ及ヒシナリ就テハ速ニ返弁受度旨陳述

セリ

被告代人I日清吉ハ原告捧呈スル貸金貳拾円

貳分ト記載借人小市名前ノ證書ハ偽書ニ有之

(二三四B)

如何トナレハ小市名前ハ幼名ニテ既ニ二十八年前二十

五歳ノ節清兵衛ト改名致シタレハ昨明治九年四月

日付ノ証書ニ小市ト記載スヘキ理由無之并ニ右証

書ニ押捺ノ印形モ清兵衛実印ニ無之其証拠ハ

昨明治九年三月并ニ明治九年九月三十日付宅地

売渡且借金ノ両証書ニモTU清兵衛ト氏名ヲ

記シ其名下ニ押捺セシハ被告所用ノ実印ニ有之

故ニ明治九年九月廿日訴訟事件ニ付差出シタル書

面名下ノ印影ト彼是同一也是ヲ以テモ原告証拠
トスル借用書ハ全ク偽印偽書ニ相違無之然ルニ

(二三五A)

過ル勸解ノ節身代限り差出スニ付金調難出来

旨申立タリシハ予テ島根県石州ノ住馬喰惣八

ナル者同職KT仁三郎方へ逗留セシ節右惣八

ヨリ元小市事清兵衛馬喰商ニ付金拾円借用

有之処惣八仁三郎方へ逗留中病氣附種々難

費相係リ此金凡拾円位モ懸ル様存スルニ付兼テ惣

八ヨリ小市事清兵衛へ拾円ノ貸金ハ返戻ニ不及

仁三郎ヨリ拾円借用ノ事ニ致シ惣八へ戻ス処ヲ仁

三郎へ可戻旨惣八申聞ルニ付其節第十大區

十一小區FI要蔵ナル者ニ拾円ノ借用証書認メ

(二三五B)

貰ヒ仁三郎へ差入置ニ付仍テ其拾円ハ仁三郎ヨリ

借用ノ義務有之処清兵衛義無筆文旨ニテ

右勸解ノ節仁三郎へ掛リ借金返済ノ事尋

問有之故全ク右拾円ノ事ト相心得昨年身代

限差出スニ付金調難出来旨申出ル処惣八ンヤ

勸解ノ借金一件ハ貳拾円貳歩ノ催促ト今回始テ

能ク承知驚愕致シ此貳拾円余ノ借金ハ決テ寛

無之旨答弁セリ仍テ判決スルヲ左ノ如シ

第一條

原告提供スル證書タルヤ被告ニ於テハ全ク差入タル

〔三三六A〕

覺無之且小市ハ幼名ニシテ既二十八ヶ年前改

名セシノミナラス其印影モ曾テ我所用ノモノニ非サ

ル旨申立ルニ依リ尚該証書ヲ熟視スルニ借主名

下ノ印章ヲ受人名下ヘ異様ニ押捺セシ迄ニテ

彼是同一ノ印影ナル〔二付尚推問ニ及フ処原告於テモ

該證書被告名下ノ押印比證スル印影モ不見当証人名下ノ

押印モ右同印ニテ異様ニ捺押シタル処認ムル趣陳告シ〕*

然ルニ受人艶藏ハ * カッコ内朱書きで挿入

已ニ死亡シ之ヲ取糺スニ由ナク必竟当初原告用

心ノ粗漏ニ出テ別段被告印影ノ実否ヲ審スルノ憑拠無之

ヲ以テ證書ノ功效無之モノトス

第二條

前条ニ説明スル筋合ナルヲ以テ原告ニ於テ該

〔三三六B〕

證書ヲ以テ被告ヘ対シ貸金返済ヲ請求スルノ理由

無之トス

明治十年十二月

掛判事 横地 安信 印
主 十六等出仕 竹内 丈太郎 印

副判事補 鈴木 円平 印

〔三三七A〕【七六】【目次七四】【捕鯨漁器械並鯨漁差違之訴】^(注前)

明治十年第九拾八号

所長代理 印**

申渡

原告

山口縣第十九大區十小區

長門国大津郡川尻浦□

□□番屋敷居住 平民

S T 源治右衛門

同浦□□番屋敷 同

A N 百 助

同浦□□番屋敷 同

〔三三七B〕

O F 雅 助

全

同浦□□番屋敷居住

平民 S T 作四郎 代人

後畑村□□番屋敷

居住 平民

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について (二・完) 五七八(二七六)

全 S T 清之丞
同浦□□□□番屋敷居住

平民 O T市郎治 代人 山口縣
第十大區十壹小區周防国

吉敷郡久保小路□□□□番

〔三三八A〕

屋敷居住 平民

I H 清 吉

全 同浦□□□□番屋敷居住 平民

A N勘作 代人 山口縣第十

大區十壹小區周防国吉敷郡

堂ノ前町□□□□番屋敷

平民

Y G 助 三

同浦□□□□番屋敷居住 平民

S T庄左衛門 代人 山口縣

〔三三八B〕

第十大區十壹小區周防国

吉敷郡上立小路町□□□番

屋敷居住 平民

Y N 清 治

同浦□□□□番屋敷居住 平民

全

全 同浦□□□□番屋敷居住 平民

O F卯右衛門 代人 山口縣第十
大區十小區周防国吉敷郡
相物小路□番屋敷居住 平民

M T Y 太 亮

〔三三九A〕

O N房次郎 代人 山口縣第十大區

十小區周防国吉敷郡米屋町

□□□番屋敷居住 平民

N K 喜兵衛

同浦□□□□番屋敷居住

平民 S T清藏 代人 山口縣第

十大區十小區周防国吉敷郡

米殿小路□□□番屋敷居住 平民

N Z 幾太郎

同浦□□□番屋敷居住 平民

〔三三九B〕

M N善四郎 代人 山口縣第十大區

十小區周防国吉敷郡中河原町

□□□□番屋敷居住 平民

O G 宗 治

同浦□□□番屋敷居住 平民

全

K M傳右衛門 代人 山口縣第
十大區十小區周防国吉敷郡
荒高町□□□□番屋敷居住
平民

T D 孫兵衛

被告

〔二四〇A〕

山口縣第十九大區十小區長門国
大津郡□□浦居住 平民 S K
平左衛門 S M伴藏 代人兼
同浦□□□番屋敷居住 平民

F N 源左衛門

全

同浦居住 平民 T N窪松 S T
和兵衛代人兼同浦□□□番
屋敷居住 平民

S T 吉太郎

全

同浦□□□番屋敷居住 平民

〔二四〇B〕

S M淺吉外百四拾名 代人* 住所のみ

山口縣第十大區十小區周防国

吉敷郡鰐石町□□□番屋敷

引合 山口縣第十九大區十小區 戸長

村 田 祥 一

捕鯨漁器械并鯨漁差繩之訴訟審理
ヲ遂ル処

原告 S T 源治右衛門外拾壹名ハ川尻浦

捕鯨組ノ儀ハ現今拾貳名祖先ノ内六名元祿

年間*自費ヲ以テ設立セシニ當時ノ家数僅ニ

〔二四一A〕

* 西曆一六八八〜一七〇四年

五十戸内外ナリシモ年ヲ遂ヒ捕鯨多数ノ利潤

ニ依リ終ニ貳百戸ニ至ルノ繁盛ヲ極メシニ中頃

自然ト捕魚寡少利益ヲ得サルヲ連年随テ

文化度*ニ至リテハ捕鯨組ニ許多ノ負債ヲ生シ

* 西曆一八〇四〜一八八

設立者ニ於テ難取統場合ニ相成タルユヘ旧山口

藩先大津代官所ヘ預ケ方致シ同署ニテ諸事

引受捕鯨方尽力セラル、ト雖モ年々負債

相増スノミニテ明治四年**廢藩置県前後

莫大ノ負債償却ノ目途モ不相立ニ付テハ

捕鯨組廢滅ニモ可相成際於該署種々

〔二四一B〕

詮議ノ上自分其祖先ノ功勞モ有之ニ付

現今拾貳名ヘ鯨漁並諸器械一式以往

相任セ負債ヲモ可引渡旨申シ談ジラレシ節

余分ノ負債ニ付容易ニ難引受筋ナレモ元來

** 一八七一年

明治 九(一八七六) 年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

十(一八七七) 年

五七六(二七四)

祖先ノ設立ナレハ子孫之ヲ受継若シ不幸ニシテ其為身代衰微ニ至ルトモ祖先ヘ対シ申訳ケ不相立儀ニモ無之ト決心シ明治四年

八月第八号証ノ通受書差出シ即チ江木大属聞届相成其節KK金右衛門SM伴藏FN

半兵衛船頭惣頭及ヒ船頭共以上貳拾六名

(二四一A)

ノ者第四号証書ノ通(御当部先大津川尻浦

鯨組之儀ニ付テハ云云組立地下頭立候者申合

銀主取極以往組方永続仕候様就テハ徳失

銀主捌ニ被仰付云々漁人中惣代トシテ私共

連印ヲ以テ御受申上候云云) *ノ受書差出是又

江木大属聞届ノ押印有之就テハ明治四年

十月第五号証書ノ通部署ヨリ米四百五十

旧山口藩札百七拾貳貫四百三文目七分八厘九毛

ノ負債金主ノ旨ヘ付讓相成爾来營業致シ

来リシニ明治九年ニ至リ被告人其外浦方ノ者共

(二四一B)

鯨漁故障申立タレトモ無間悔悟明治九年

九月廿七日 *OZ又吉外百八拾三名ノ者ヨリ

(当川尻浦捕鯨組ノ儀ハ元禄十一寅年 **

各方ノ内御祖先御取立ニ付テハ不容易御心配

相成云云是迄ニ不相替網其外手丈夫ニ御仕構相成鯨組永久御依頼仕候云云) ***

第六号証ノ通自分共ヘ宛書面差出シ熟和漁業致ス処明治九年十二月以来被告人

FN源左衛門ST和兵衛ST吉太郎

TN窪松SK平左衛門等地下内ノ者共ヲ

(二四三A)

誘惑シ鯨漁并諸器械地下中ノ共有物ニシテ

自分共拾貳名ノ所有ニ非ル段県庁ヘ申立ルニ付

県庁ニ於テ懇々説諭アルト雖モ不聞入還テ

自分共ヘ地下ノ負債ヲ償却スレハ鯨組ハ

川尻浦中ノ共有物ニ相成ル旨県庁ノ説諭

ナル由申立レトモ全ク地下ノ負債ニハ無之部署

ヨリ捕鯨入費トシテ諸処ニテ借入相成タル

負債ヲ引受自分共所有品ヲ抵当ニシテ

金錢ヲ調達シ右負債ヲ償還シ部署ヨリ

諸方ヘ差出有之タル借金證書ヲ取返シタル

(二四三B)

ナレハ今更地下中ヨリ償還ヲ受ヘキ筋ニ無之

右ノ次第ナルヲ以テ該漁業ノ得失ハ特リ

金主ノ身上ニ止ルヲ以テ若シ捕鯨寡少ノ

為利益ヲ得スシテ一家亡滅ニ至ルモ地下中ノ者之ヲ救助スルノ義務ナク將タ余分ノ利益アルモ此レカ配分ヲ請求スルノ權利モナシ是則德失銀主捌トアル證書明文ニ

適合スル所ナリ既ニ明治十年四月四日*自分共 西曆一八七七年

ヨリ海面借区願差出セシニ県庁ヨリ明治

十年四月十八日指令（書面海面借區ノ儀ハ

（二四四A）

即今専ラ調査中ニ付其村限り許可難

相成追テ一般確定候迄ハ行形ノ通可相心得

候事）*ト有之タルユヘ元ノ如ク漁業差支ナカリシニ

* カッコ ○ は朱書き

明治十年八月廿七日県庁ヨリ區長桑原宗一ヘ

相達セラレシ文中詮議ノ次第ヲ以テ鯨漁差留

候條云云ト有之右詮議ノ次第ト申儀不分リ

ニ付其旨趣伺出ル処施政上ノ詮議ノ次第

説明スヘキ理由無之トノ指令ニ付其趣旨ヲ知ルニ

由ナシト雖モ全体被告ニ於テ明治八年太政官

第廿三号第百九拾五号御布告^{（注10）}ニ付テハ右ニ

（二四四B）

抵触スル契約ハ爾來既ニ消滅ニ属スルモノト

申立レトモ第四号第五号第六号第八号等

ノ證書ニテモ鯨漁及ヒ属具トモ自分共拾貳名

ノ所有タルヲ判然ニ付明治八年太政官第

百九拾五号公布ニ依リ海面借区願出ルハ

自分共ノ自由ニシテ被告人共故障申立ル筋

ハ毫モ無之^{（注11）}咎且明治九年七月太政官第

七拾四号御達^{（注12）}ヲ拝閱スルニ營業取締ハ可成

從來ノ慣習ニ從ヒ処分可致ト有之此御趣意

ニテモ被告從來ノ慣習ニ違ヒ故障申立ル

（二四五A）

筋ハ有之間敷尚又部署ヨリ付譲リ負債ノ

内米四百五石払殘三百七拾貳石六斗ヲ無利

十ヶ年賦ノ返納ニ許容相成ル様明治六年十二

月県庁ヘ出頭セシ書面ニ川尻浦漁人惣代SM伴三

外貳名押印セシハ明治六年県庁ヨリ鯨組ニ関シ

タルヲハ向後地下*惣代ノ名義ニテ諸事ノ書面

* 地下人とも。農民を中心とした庶民

差出ス様相達セラレ素ヨリ何ノ故障モ無之頃

ユヘ右ノ如ク相調ヘタレトモ前頭年賦出願ノ借米

抵当品ハ不殘金主即チ拾貳名ノ財産差入

有之其後捕鯨ニ関スル事件ハ金主名前ニテ

（二四五B）

書面差出テモ一切差支筋無之様相成リタル

ニ付明治九年九月十九日付ニテ県庁へ差出セシ捕鯨税金違算不都合ヲ謝スル書面ハ被告答書追加へ対スル自分共答弁書ニ記載ノ通捕鯨組方金主惣代ト肩書セシ分へ県庁指令ノ本書今ニ所持致シタリ元来捕鯨器械ハ明治十年十月五日付ノ書面ニ記載セシ通鯨造船拾貳艘其外以上貳拾八筆ノ前明治四年十月先大津部署役員出張引渡シ相成タレトモ其節ノ物品ハ〔二四六A〕

逐次破壊毀損等ニ係リ現今存在ノ分ハ大概自分共新ニ調製ノ器械ニ有之尚又器械蔵土地三ヶ所ノ内宅地三畝拾歩ハ地券証河内社名前同六歩ハKM惣十郎名前同壹反四畝拾七歩モKM惣十郎名前前ニテ此壹反四畝拾七歩ハ旧藩以来空地無税ノ処地券御施行後ハ地券申請イツレモ税金区費等モ差出居ルニ付テハ自分共ノ所有ニ属スル明ナリ全体鯨漁及器械ノ事ニ就テハ被告共ニ於テ故障申立ヘキ筈ハ無之〔二四六B〕

筋ナルヲ明治十年二月漁業ヲ妨ケ器械

ノ内ヲ強奪セシユヘ其筋ハ吟味願出タル末終ニ右器械自分共手元へ差返スニ立至レリ*

* 次の一行は傍点で削除、省略。

依テ漁業ヲ妨害シ器械ヲモ共有坏ト主張スルハ甚不條理ノ旨申立タリ被告FN源左衛門外百四拾六名ハ川尻浦捕鯨漁業ノ儀ハ元禄年間創立旧山口藩ノ支配ニ有之然ル処明治四年七月廢藩置県ノ際地下中へ任セラレタル処原告共〔二四七A〕

中間ニ先大津部署達ノ写第壹号ノ書面ヲ隠蔽シ捕鯨漁ハ全ク原告拾貳名共有ノ株式ト詐称シ地下へ対シ傍若無人ノ振舞ヲ為スニ付明治九年九月地下中協議シ捕鯨漁業ハ川尻浦中へ相任セラル、様副戸長役場へ申出副戸長鈴木平左衛門ヨリ明治九年九月十八日県庁へ歎願セシニ豈計ランヤ該漁業ハ既ニ明治四年八月地下任セニ相成リ居ル由ニテ明治十年一月県庁ヨリ旧県部署達ノ写即チ第壹号證ヲ下渡サレ初テ地下〔二四七B〕

任セニ相成リ居ルヲ覺知セシニ付原告拾貳名へ

応接ニ及フ処原告ニ於テ鯨組ハ部署ヨリ地下ノ
負債ヲ付譲リ拾貳名ヘ相任セラレタルユヘ原告ノ所有
ナリト主張スルニ付尚又県庁ヘ出願セシニ県庁

ニテ理解ノ要旨ハ捕鯨漁業ハ固ヨリ地下

任セナレトモ金主ノ者共部署ヘ対シ地下ノ

負債ヲ償還シタルニ由リ地下ヨリ金主ヘ右

負債ヲ償却スレハ鯨組ハ無論地下ノ共有

物ナル旨説諭有之タルユヘ其趣ヲ以テ原告ヘ

協議スルト雖モ聞入サルニ付又々県庁ヘ出願

〔二四八A〕

セシニ原告ヲ召喚様々説諭相成レトモ原告共

強テ鯨組ハ我所有ナリト主張スルヲ以テ明治

十年八月廿七日鯨漁ハ断然差止メラレタリ

原告右ノ如ク申張レトモ原告第八号証ノ文中ニ

（当末ノ組立ヨリ地下任セニ被仰付就テハ川尻浦

ニテ頭立候者共申合セ銀主ヲ取極メ云云亦

部署、其他御配当ノ現肉地下ノ取計ヒニ御任セ

被仰付云云）*ト有之右鯨組原告拾貳名ノ * カッコ○は朱書き

者ヘ相任セラレシモノナラハ如此受書ヲ部署

ヘ差出スヘキ謂レ無之又部署達ノ写即チ第

〔二四八B〕

壹号証ニ相見ユル歩一銀五百貫目ハ旧藩

ニ於テ鯨組ニ負債ナケレハ地下中ヘ分割下附
可相成儀ハ訴答書中ニ記載セシ第六号

江木大属ヨリ旧県庁ヘノ届書ニテモ判然セリ

若シ鯨組地下ノ共有物ニ非スンハ部署ニ於テ

右歩一銀ヲ以テ鯨組ノ負債ニ流用相成ル

ヘキ謂レナク將タ明治八年部署ヨリ付譲リ

相成タル地下ノ負債米四百五十石ヲ明治六年

十二月原告人共S M伴藏F N半兵衛

S M浅吉三人ノ名前ニテ訴答書第八号ニ

〔二四九A〕

記載ノ通県庁ヘ歎願シ無利足十ヶ年賦納

入ニ許可ヲ得タル処S M伴藏外貳名ニ於テハ

是迄承知セサル儀ニテ此度協同会社ニテ

聞得初テ其事ヲ覚知セリ鯨組原告ノ所有

ナラハ地下惣代ノ名義ヲ以テ歎願スルノ理無之

且原告第六号証書成立ノ原由ハ明治九年

九月地下中申合捕鯨漁業地下任セニ相成ル

様歎願セントスルヲ聞ヤ否原告大ニ狼狽シ

地下人ヲ呼寄セ鯨組ハ辛未八月*拾貳名ヘ

* 近くの辛未は明治四（一八七二）年

永久任セラレタルモノナレハ何様ノ歎願ヲ

〔二四九B〕

ナス共決テ聞届ハ無之ニ付此方ノ証書ヘ調印
スヘシ然ラサレハ向後沖立ヲ差止メ又仲買共
ヘハ捕鯨鬻^{しゅく}売セスト申スニ付不得止イカナル
趣意ノ文言ナルヤモ解得セス卒爾ニ押印

セシニ明治十年一月ニ至リ鯨漁ハ既ニ明治
四年八月ヨリ地下任セニ相成居ル儀發覺セ
シヲ以テ之ヲ按スレハ地下中ヨリ鯨漁地下任
セニ相成ル様歎願スルトキハ忽チ辛未以來
ノ姦曲發露センヲ慮リ其歎願ヲ
抑止スル原告一時ノ權謀ニ出タルモノニテ

〔二五〇A〕

眞正ノ締約ニ非ルヲハ此證書文中ニ鯨組
株老卷各方ヘ永久御任セニ相成云云ト有
之処明治四年八月部署達ノ末文ニハ前件地下
任セ云云ト有之彼此ノ文意大ニ抵触スルハ是
即原告人トモ地下人ヲ欺タル証左ナリ若シコレヲ
眞正ノ契約トスルモ捕魚採藻ノ二就テハ
明治八年太政官第廿三号第百九拾五号^(注世)
ノ公布ニテ自ラ消滅スルハ勿論ノ事ナレモ自
分共ニ於テハ是迄原告人ニ欺カレタル廉ハ
之ヲ論セス県庁ノ理解ニ基キ原告人共
〔二五〇B〕

明治四年部署ヘ返還シタル地下ノ負債ハ
戸別ニ分割シ聊カ原告ノ損害ニナラサル様
償却シ自今協力同心ニテ漁鯨ハ永世川尻
浦産業ノ基本ニナサンヲ追々申談スレトモ
之レニ応セス強テ諸器械ヲ已レガ所有ト申立
鯨漁ハ器械ニ属スルモノト異論ヲ主張スレトモ
既ニ器械藏土地ノ内宅地三畝拾歩地券名前
河内社同六歩ト壹反四畝拾七歩ハ地券名前
KM惣十郎ト有之此KM惣十郎トハ
村惣持ノ土地ヘ仮リニ設ケタル名称ニテ右ノ内

〔二五一A〕

河内社三畝拾歩ト惣十郎持ノ内六歩ノ地税金
等ハ何レモ村中一統ヨリ收納致シ有之鯨漁
器械原告ノ所有ナラハ加様ノヲハ無之筈ナリ
全体部署ニ於テ右鯨組ヲ原告拾貳名ヘ相
任セラレシモノナラハ原告第四号証書地下
惣代トシテ貳拾六名ノ者ヨリ受書ヲ徴セラル、
ノ謂レナク且部署達ノ文意ニ依レハ銀主ハ
全ク地下申合ノ上何某ニ取極タル旨可申出
筋ナルヲ其証跡モ無之只拾貳名ノ者共
銀主ハ吾ニテ之ヲ取極メタルモ亦吾レナリト
〔二五一B〕

謂フカ如ク部署達ニ所謂地下頭立ツ者申合セトノ趣意ヲ奉シタル所イヅレニアリヤ彼我ノ分界不相立甚不都合ノ儀ニテ是レ必竟原告共地下ノ共有ト為サス已レ等

ノミ其利ヲ得ントスルノ私意ニ出タルモノニテ前頭藏土地壹反四畝拾七歩ノ如キ其地

券証ハ原告人ノ内ST源治右衛門戸長役勤務中ニ付其手元へ取込ミ而シテ貢租取立帳ニ鯨方ト記載シタルユヘ鈴木平左エ門副戸長役中何心ナク該地稅ヲ原告共ヨリ

〔二五二A〕

取立来リタルニ今般如此争訟ニ及ヒ実地

取調ヘタル所該地ハ宝曆度画面ニテモ地下

惣持ナルヲ判然シ全ク原告ノミノ所有ニ属

スルモノニ無之到底鯨漁諸器械共地下

ノ共有タル旨陳述セリ

戸長村田祥一ハ川尻浦捕鯨組器械藏建築有之地所ノ内字屋敷通宅地六歩地価三拾壹錢貳厘ノ分ハ旧春定名寄帳*地下惣持ノ内へ入り混シ

* 江戸時代の地方帳簿。耕地所持者別に石高・

反別を耕地ごとに書き上げ集計したもの

居レトモ従来鯨組器械藏建築有之實際捕鯨

金主所用ノ地ニ付明治六年地券施行ノ節現地〔二五二B〕

所用主ST源治右エ門外拾壹名即チ捕鯨金主ノ者ヘ地券証相渡有之税金ハ明治六年七年ノ兩年ハ捕鯨金主ヨリ相納メタル処明治八年九年ノ兩年ハ地下惣中ヨリ相納メ居ル其詛ハ税金取立帳ニ六歩ハKM惣十郎名前壹反

四畝拾七歩ハ鯨方ト記シ有之ニ付六歩ノ税ハ明治八年九年兩年分ハ當時副戸長ニ於テ地下惣中ヨリ取立壹反四畝拾七歩ハ鯨組ト記シアルヲ以テ捕鯨金主ヨリ取立タル由ニ有之此壹反四畝拾七歩地価四拾五円五拾貳錢壹厘ノ分ハ元無

〔二五三A〕

税ノ地ニテ鯨漁器械藏建築有之ニ付六歩ノ地所同様地券証ハ捕鯨金主ヘ相渡税金

ハ明治六年ヨリ九年迄金主ヨリ収納ヲ為シタルヲ

判然セリ地券名前ハ貳筆トモKM惣十郎ト

有之是ハ空名ニテ其人アルニ非ス右土地ノ外

村惣持ノ地券証ニモKM惣十郎ト記セシ分有之

是亦空名ナレトモ前頭貳筆ノ惣十郎ハ實際

捕鯨金主拾貳名従来ノ所用地ニ付其所有ニ

属スルハ勿論ノ事ニ心得居ル旨申立タリ

因テ裁判スル左ノ如シ

(二五三B)

第一條

被告ニ於テ明治九年九月十八日鯨漁地下
任セニ相成ル様県庁ヘ歎願ノ末第壹号証
即チ旧県先大津部署達ノ写ヲ得初テ該

漁業ハ明治四年八月以來地下任セニ相成居ル
ヲ覚知セシ旨申立ルト雖モ該書面タルヤ
鯨組改革ノ方法ヲ指示シ若シ其意ヲ得サル
ヲアラハ之ヲ開陳スヘシトノ趣旨ナリ然ルニ當時
漁人中惣代トシテ貳拾六名ノ者共部署ヘ対シ

其方法承服ノ受書即チ原告第四号証ヲ

(二五四A)

差出シタル上ハ明治十年一月ニ至リ初テ地下
任セナルヲ承知セシトノ申分相立難シ

第二條

被告ニ於テ鯨組原告ノ所有ナラハ部署ヨリ
引受シ米穀年賦返償ノ儀ヲ県庁ヘ出願

セシ書面地下惣代ノ名義ヲ以テスルノ理無之旨申

立ルト雖モ明治九年九月原告ヨリ捕鯨税金

違算ノヲニ付県庁ヘ差出シタル書面ニハ金主

惣代ト肩書シテ原告ノ内兩人ノ氏名ヲ記載セリ

彼此其肩書ノ一ツヲ以テ鯨漁器械ノ所有ヲ

(二五四B)

判スルノ証拠ニハ難相立ヲ以テ採用セス

第三條

被告ニ於テ原告第八号証ノ文中ニ(當末ノ
組立ヨリ地下任セニ被仰付就テハ川尻浦ニテ

頭立候者共申合セ銀主ヲ取極メ云云部署

其他御配當ノ現肉地下ノ取計ヒニ御任セ被仰付

云云) *ト有之ヲ以テ部署ヨリ鯨組ヲ原告拾貳名

* カッコ ○ は朱書き

ノ者ヘ相任セシモノナラハ部署ニ於テ斯ノ如キ受書
及ヒ原告第四号証書貳拾六名ヨリノ受書

ヲモ徴スルノ謂レナク且部署達ノ文意ニ

(二五五A)

テモ銀主ハ全ク地下頭立者申合撰^マ拳ノ上

申出ヘキ筋ナルヲ其証跡モ無之ハ原告共

銀主ハ吾ニテ之ヲ取極ムルモ亦吾ナリト云フガ

如ク部署達ニ所謂地下頭立タル者申合トノ

趣意イヅレニアリヤ彼我ノ分界不相立ハ必竟

原告共地下ノ共有ト為サス己レ等ノミ其利ヲ

得ントスル私意ニ出タル旨申立ルト雖モ部署

達ニ所謂地下トハ部署ヨリ部内川尻浦人民

ヲ指スノ称ニシテ其金主ヲ取極ムルモ素ヨリ
原告ノミノ関与スヘキ所ニ非ルハ無論ナレトモ
〔二五五B〕

原告第四号第八号証ヲ部署ニ徴セシハ

明治四年八月ノ一ニシテ鯨漁ニ属スル負債
米金ヲ部署ヨリ金主ヘ付譲リシハ明治四年
十月ナリ此際原告拾貳名ノ者トモ金主トナル
ノ順序ニ於テ部署其可否ヲ調査スルニ
非スシハ何ソ故ナク之ヲ聞届クルノ理アランヤ
部署ニ於テ既ニ金主タルヲ聞届ケ而シテ
負債米金ヲ付譲リタルニテモ其調査ヲ經
シ明カナレハ被告ニ於テ原告私意ノ所行ニ
出タリトノ申分ハ証拠之レ無キヲ以テ採用セス
〔二五六A〕

第四條

被告ニ於テ原告第六号証書ハ原告ニ圧制
サレ如何ナル趣旨ヲモ解得セス粗忽ニ押印
セシモノナレハ真正ノ契約ニ非ス假令是ヲ真正
ノ締約トスルモ捕魚採藻ノ一ニ付テハ明治
八年第廿三号第百九拾五号公布ニテ自然
消滅ニ属スル旨申立ルト雖モ原告ノ強迫ニ
出タル確証モ無之且〔第廿三号第百九拾五号ハ〕*

海面借区ヲ出願スル者アレハ之ヲ

調査シテ其聞届クルト届ケサルハ地方官ノ権内

〔二五六B〕

ニアリテ本訴ニ関スルノ筋無之ヲ以テ右申分
総テ採用セス抑該證書タルヤ其文中（多分
ノ借米銀御付譲鯨組方一卷各方ヘ永久
御任セニ相成云云自然不漁打続キ如何様
ノ損毛有之候トモ地下ニ於テ一円存シ不申徳失
銀主捌ノ段篤ト承知罷在候然ル処此度
地下ニ於テ不心得ノ者有之前件御受書之
趣忘却仕地下多人數ヲ迷シ甚不條理
之次第ト孰モ当惑仕候云云）*ノ明文アリテ
原告拾貳名ヘ宛テ川尻浦鯨組方銀主ト
〔二五七A〕

肩書セリ是即チ被告一時ノ過チヲ悔ヒ之ヲ

謝シテ後來ヲ依頼スルノ文面ナリ爰ニ至リテ
明治四年八月以來原告拾貳名ヲ
金主ト為セシハ被告ノ承諾ニ出タル事彌以テ
昭明ナリトス

第五條

被告ニ於テ第壹号書面中ニ相見ユル歩一銀

* カッコ内朱点にて抹消

五百貫目ハ鯨組ニ負債ナケレハ地下中へ分割
下付可相成モノニテ若シ鯨組地下ノ共有物ニ非スンハ
右銀鯨組ノ負債ニ流用相成ルヘキ謂レ之レ

〔二五七B〕

ナキ旨申立ルト雖モ被告答書ニ掲載セシ
江木大属書面ノ写シニ依レハ旧県部署ノ
権内ニテ適宜処分ヲ為スモノニ似タリ必竟
被告ノ想像ニ出タル迄ニテ確證之レナキヲ以テ
採用セス

第六條

原告ニ於テ第四号第五号第六号第八号等
ノ証書ニテモ鯨漁及ヒ器械トモ拾貳名ノ所有
判然タレハ明治八年太政官第百九拾五号
公布ニ依リ海面借区願出ルモ素ヨリ原告

〔二五八A〕

ノ自由ニシテ被告共故障ヲ申スヘキ筋ハ毫モ
無之旨申立ルト雖モ海面借区ノヲタルヤ
許否ハ地方官

ノ権内ニアリテ〔依テ本訴鯨漁差纏ノ件ハ未タ許可ヲ
得サルノ前ニアリテ之ヲ争訟スル理由無之ヲ以テ採用セス〕

第七條

* カッコ内ノ文章は挿入
原告ニ於テハ器械藏建築有之宅地六歩ト

壹反四畝拾七歩ノ貳筆ハ我所有ナル旨
申立被告ニ於テハ一村惣持ナル旨申立ルヲ以テ
該区戸長ヲ取調フル処宅地六歩ノ税金ハ明治
六年七年ハ原告ヨリ相納明治八年九年ノ

〔二五八B〕

両年ハ地下惣中ヨリ収納シ壹反四畝拾七歩
ノ税金ハ明治六年ヨリ明治九年迄原告ニ於テ
収納ナセシ事判然タリト雖モ全体該地々券
証タルヤ持主KM惣十郎トアルモ現ニ其人
アルニ非ラス到底空名ノ地券ナルヲ以テ仍ホ
地方庁ノ調査ヲ經ルニ非レハ目今所有ノ
証拠ニハ相立チ難キニ依リ原被告申分共ニ
採用セス

第八條

原被告双方申立ノ内本訴ノ要点ニ関セサル
〔二五九A〕
枝葉ノヲニ至リテハ総テ採用セス

第九條

明治四年八月鯨漁業地下任セノ際原告
既ニ金主トナリ部署ヨリ負債付議ヲ引受
爾來償却ノ方法ヲ尽シ該漁業ニ付損失アルモ
拾貳名ノ一身上ニ止リ他ニ

之ヲ救助スルノ義務ヲ負担スル者一切無之
ヲ以テ鯨漁器械ハ目今藏土地ヲ除クノ外
悉皆金主即チ原告拾貳名ノ所有ニ帰シ
タルモノトス

〔二五九B〕

第十條

前條々々ニ説明スル筋ナルヲ以テ川尻浦人民
共有ナリトノ被告申分相立難シ

明治十年十二月廿七日

掛 判 事 横地 安信 印
主 判 事 鈴木 円平 印
副 十七等出仕 日比 豪 印

〔二六〇A〕 【七七】 【目次七五】 【質地取戻之訴】^(注13)

明治九年第三百二十六号*

申 渡

山口縣第四大區第九小區玖珂本郷□

□□□番屋敷 農

原 告 K Y 武右衛門

* 本行朱書き

山口縣第四大區第十小區上久原村□
□□□番屋敷 農

右代人 F T 増太郎

質地取戻之訴**

** 欄外上部に「書類保存」の朱書き

山口縣第四大區第九小區玖珂本郷□

□□□番屋敷 農

被 告 F M 源 六

右源六長男

〔二六〇B〕

右代人 F M 源左衛門

其方共一件遂審理処

原告代人ハ万延二年二月*晦日KY武右衛門亡父文左衛門事被告

* 西曆一八六一年

F M源六ヨリ金七円五拾六錢ヲ七六錢壹貫貳百文目ニテ借用セシ
トキ所有ノ字アセ高旧名惡追田五畝拾五歩ヲ刀欄ノ奥印有之証書
ヲ以テ無年期質入ト為シテ引渡シ貢租等源六ヨリ直ニ上納シ残ル
作

德米六斗余ヲ年耄割ノ見積リニテ本金ノ利子ニ引当ルヲ口上ニ
テ

契約シ置キタリ將又古来ヨリ右耕地ノ傍ラニ在ルヲ以テ傍爾山ト
唱ヘ

唯ニ之ニ附属シ立木採用等ノトキ臨時相当ノ納税セシノミナル山

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

五六六(二六四)

林 老

箇所ヲ添テ引渡シタルトモ當時別段其所有ヲ明証スル役座帳簿等
モ

無カリシニ因リ其証書ヘ特ニ記載為サ、リシカ明治五年[※]中初テ
八畝ト[※] 西曆一八七二年

畝歩ヲ定メラレ毎年武右衛門名前ニテ金壹錢四厘ヲ上納シ明治八
年[※]中[※] 西曆一八七五年

山口縣一般山林調査ノトキ五反五畝ニ改定金五錢ヲ課セラレ未タ
地券下

〔二二六一A〕

付ハ無之トイヘトモ既ニ其願ヲ為シ置キ終ニ全ク武右衛門ノ私有
二帰シ

タリ尤此前後ノ納税モ源六ヨリ為シ呉レシ然ルニ武右衛門ニ於テ
所詮

返金為シ能ハサルニ因リ数次源六ノ猶予ヲ受ケシ末明治五年十一

月[※]ニ至リ漸ク調金シテ耕地山林受戻シノ掛合ニ及ヒシ所〔源六ヨ
リ曾[※] 西曆一八七二年

テ其覺ナキヲ明言スル〕[※] 左兵衛ナル者証人ニテ亡父文左衛門
売主ナ[※] カッコ内朱線で抹消

ル売渡状ヲ右質入証書ニ継添シタルヲ出シ旧岩國領ニ於テ徳下ケ
田ト

唱ヘ租税ヲ減セラレシ地所ハ売買ノ禁有之シ故文左衛門及ヒ左兵

衛

ノ依頼ニ委セ内実買得ヲ為セシニ付キ之ヲ領取シタリト其引渡シ
ヲ

敢セサレトモ安政度ノ水帳ヲ檢スルニ徳下ケノ地所モ一般ノ地所
ト區別セス[※] 檢地帳、

売買ノヲヲ記入セシニ因リ之ヲ例視スレハ其禁ナキヲ明白ナリ況
ヤ刀

欄ノ奥印有ル質入証書ヲ以テ其授受ヲ為セシ上ハ別ニ売渡状ヲ
渡ス可キ謂レ無之果シテ源六ノ偽造ニ出テ真正ノ者ナラス明治七

年六月頃前戸長岡増平ノ勸解ニテ改テ右地所ヲ金六拾三円ニ売
〔二二六一B〕

買センヲヲ双方承諾ナセシカ其期ニ至リ源六違約シテ出金為サス
尚更

不条理ヲ強テ主張スレトモ安政[※]明治兩度ノ水帳依然武右衛門ナ
リ[※] 西曆一八五四〇年

且又明治六年十二月發行持主武右衛門ナル地券モ一時ハ右紛議

ノ為メ畔頭山崎源次郎預居リシニ因リ出訴ノトキ之ヲ借受ケシカ
其後

直ニ下付セラレシ到底其売渡ニ非ラスシテ質入ナルハ明瞭ナリ依
テ調金

シタル上ハ耕地山林共速ニ引渡シヲ受度旨陳述セリ

被告代人ハ父源六事万延二年二月晦日[※]原告K Y武右衛門亡父文

左

※

西曆一八六一年。二月一九日に文久に改元

衛門へ金七円五拾六錢貸渡シ字カセ高田五畝拾五歩并ニ山林老箇所ヲ刀欄ノ奥印有之無年期質入證書ヲ以テ其引渡シヲ受ケシ尤山林ハ當時唯ニ其耕地ニ附属セシノミナルニ因リ証書へ特ニ記入

シ無カリシカ即今別ニ五反五畝ト畝步確定シ毎年源六ヨリ武右

衛門名前ニテ納税スルハ其申立通り相違無之然ルニ右地所ヲ賃金ノ抵当トシテ請取りタルハ唯地下役座ヘノ申出ノミニテ内実旧

〔二六△一A〕

岩国領ニ於テハ特下ケ田ト唱へ成規ニ依リ減租有之シ地所ハ売買ヲ禁セラレシ故文左衛門及ヒ証人左兵衛ナル者ノ依頼ニ任セ別ニ私ノ

売渡状ヲ添テ買得シ名前切替ヲ為サ、リシナレトモ爾來引続キ耕作シテ貢租等モ上納シ紛レナク源六ノ所有ナレハ明治五年中新地券調査ノトキ初テ名前替ヲ出願セシ所豈図ンヤ武右衛門ニ於テ其売渡状ハ源六ノ偽造セシ者ナレハ公証在ル証書通り入質ノ地所受戻シ度ト異議ヲ主張シ容易ニ紛争ノ場合ニ至ラス就テハ一般地券ノ發行ヲ妨ケンヲ恐レ戸長所加勢若林喜兵衛ノ申分ニ任セ

一先帳簿通り亡文左衛門ノ名前ニテ役座マテ地券ヲ取下クルヲ承諾シタリ明治七年六月頃前戸長岡増平ノ勸解有之シナレトモ一旦現金ヲ以テ買得セシ地所ヲ更ニ復之ヲ買入ル、筋ハ無

之ト

遂ニ熟議ニ至ラサリシ然ルニ其売渡状ヲ偽造セシトハ不条理ナル武右衛門ノ申分ニ付其真偽ヲ糺シテ所有ヲ決センカ為メ明治九年〔二六△一B〕

三月二十四日*山口縣柳井警察出張所へ武右衛門長男徳十郎ヲ

* 西曆一九七六年

戸主ト誤認メ之ニ対シ吟味願書ヲ上ケシ所源六ニ於テ年來地所請取り貢租ヲ上納セシ上ハ明瞭其所有ナレハ武右衛門方へ關係スヘキ

筋無之トノヲ故明治九年三月二十五日更ニ地券ヲ預リ居下付為サル畔頭山崎源二郎ヲ相手取りシニ彼レ病氣ナルニ因リ出頭セス彼是

遷延スル中伝聞スルニ漫リニ之ヲ武右衛門へ下付セシ由ニ付其旨趣

掛合ニ及ヒシ所質地受戻シ案件山口裁判所へ出訴スルニ入用ナリトテ

其願ニ依リ暫時貸下ケシノミト答ヘシ故即チ其書面ヲ取付ケ置キシ依テハ水帳等ハ猶武右衛門名前ナルモ真正ノ手續キヲ以テ地券ヲ下付セサルハ未タ其所有タルヲ確定セシモノナラス〔其後問ナク当裁判所へ召喚セラレシ故其段警察出張所へ届置キ取敢

ヘス答書持參セシナレトモ本件ハ被告先ツ訴訟ヲ為シタリ〕*將又武右衛門

* カッコ内朱線で抹消

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

五六四（二六△一）

門ニ於テ源六ヨリ直ニ納税シ殘ル作德米ヲ以テ本金ノ利子ニ引当
ル

〔二六三A〕

ノ定約ナル旨申出ルレトモ既ニ買得セシ地所ナレハ全ク其定約ヲ
為ス可キ

謂レ無之要之武右衛門ニ於テ強テ不条理ヲ主張スレトモ源六所有
ノ

地所ナルヲ売渡狀ニテ明白ナリ仮令其申立通り無年期質入タルモ
既二十余

箇年ヲ經過セシ上ハ原告ノ求メニ応シ難キ旨申立タリ

依テ判決スルヲ左ノ如シ

第一條 被告ハ旧岩國領ニ於テ減租セラレシ地所ハ賣買ノ禁有

之シニ付原告ノ依頼ニ任セ地下役座ハ質入レノ公訴ヲ受ケシト雖
トモ実

際私ノ売渡狀ヲ受領シテ之ヲ買得シタリシト原告ハ安政度^{*}ノ水帳
ヲ檢

スルニ賣買ノ禁ナキヲ推知ス可シ況ンヤ公証在ル質入証書ヲ以テ
其授受ヲ為

セシ上ハ別ニ売渡狀ヲ渡ス可キ謂レ無之果シテ被告ノ偽造ニ出テ
シナリト紛紛

ノ論駁其佗双方口頭徒互ノ申争ヒマテニテ其確證タル可キモノ無
之キハ總テ採用セス

第二條 原告ヨリ被告ヘ山林売箇所ヲ耕地ト共ニ引渡セシモ當時
唯之ニ附屬セシノミナルヲ以テ質入証書ヘモ特ニ記載ナカリシカ
即今別ニ畝

〔二六三B〕

歩確定シ原告名前ナルモ被告ヨリ耕地ト同ク納税シ必竟其所有論
ニ

附帶スルモノナルハ原被ノ口供符合スルモノトス

〔第三條〕^{*}被告ニ於テ明治五年中買得ノ地所名前替ヲ出願セシニ
原

告異議ヲ主張セシヨリ一般地券ノ發行ヲ妨ケンヲ恐レ若林喜兵衛
ノ申分

ニ任セ一先ツ原告亡父文左衛門名前ニテ地下役座マテ地券ヲ取下
ルヲ承

諾シタリ爾後畔頭山崎源二郎ヨリ漫リニ之ヲ原告ヘ下付セシハ不
条理ナ

リト掛合ヒシ末暫時貸渡セシノミトノ書面ヲ取付ケシ直正ノ手續
キヲ以テ

下付セサルハ未タ其所有ヲ確定セシ者ナラスト申立ルト雖トモ素
ヨリ其所

有ヲ確定セス既ニ死亡セシ人名ニテ之ヲ發行セラルヘキ理由無之
況ンヤ即

今原告ニ於テ改テ正ク受領シ居ル地券タルヤ則チ原告武右衛門名

前
ナル上ハ其下付否被告カ関係スヘキモノナラスニ依リ申分相立難
ク

〔第四條 被告ニ於テ〕[※]柳井警察出張所ヘ証書偽造及ヒ地券下
付[※]カッコ内削除

ノ吟味願書ヲ上ケシヲ原告ニ対シ先訴ナル旨申立ルト雖トモ民事
ノ訴訟トハ

〔二六四A〕

筋違ニテ本訴ノ裁判ニ関係セサルモノトス

第三〔五〕[※]條〔前四箇條ノ筋合ニ付〕[※]被告ニ於テ該地所タルヤ

實際私

[※]カッコ内削除
[※]カッコ内削除

ノ売渡状ヲ以テ買得シ爾来引続キ耕作シ貢租ヲモ上納セシ上ハ
所有タルヲ判然ニテ仮令無年期質入レタルモ既ニ十余箇年ヲ經
過セシヲ以テ原告ノ求ニハ応シ難キ旨申立ルト雖トモ明治六年第
十

八号布告并ニ明治七年第七十六号布告ニ照シ奥書割印ノ手續^{〔注14〕}

キヲ為サ、ルヲ以テ質地ニ付テノ權利ハ総テ自ラ放棄シタルモノ
トス果シテ

売渡状ヲシテ直正ナラシムルモ地券並地下役座帳簿依然原告

名前ナル上ハ明治七年第四百号布告并明治八年第六百六号布^{〔注15〕}

告ノ通り被告所有ノ地所ナリトノ申分相立難ク依テ右耕地山林ト

モ
被告人ヨリ原告人ヘ速ニ引渡ス可シ

〔二六四B〕

明治十年一月廿五日
掛 七等判事 笥 元忠 印
主 十三等出仕 河野 忠三 印
副 十三等出仕 鈴木 圓平 印

〔二六五A〕^{〔注16〕}【七八】【目次七六】^{〔注16〕}【貸家明渡ノ訴訟】

明治九年第五百六号[※] 本行は欄外右側に朱書き

申 渡

第廿大區拾壹小区唐樋町

□□□□番屋敷商

原告 I T 直之丞

同大區八小区濱崎町□□

□□□番屋敷借家 商

被告 I S J 萬右衛門

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）
十（一八七七）年

五六二（二六〇）

貸家明渡ノ訴訟遂審理処^{***}欄外上部に「書類保存」の朱書き
原告ハ亡父九郎右衛門在世去ル天保九年二月^{***}中被告

^{***}西曆一八三八年

萬右衛門先代亡惣兵衛所持ノ建家敷地共永代銀三拾
貫目ニ買得シ其俣惣兵衛ヲ借家致サセル後惣兵衛ハ

〔二六五B〕

死去当萬右衛門代万延年度^{*}亡九郎右衛門ト示談ノ上建

^{*}西曆一八六〇〜六一年

家改造被告ヘ托シ其三拾八坪建築費トシテ追テ四度ニ

銀八貫目償却及ヒ將タ家稅八月々金拾八錢四厘余

嘉永五年^{**}ヨリ慶応元年二月^{***}マテ兩度ニ金貳拾六兩

^{**}西曆一八五二年

^{***}西曆一八六五年

貳拾九錢余請取尔来明治九年六月^{*}マテ不納而シテ該

^{**}西曆一八七六年

地稅其他諸入費ハ自カラ之ヲ上納シ已後九郎右衛門死去

ノ際家作貸渡ノ証可取置処従前ノ俣ニ致シ置タリ

然ルニ身上向追々不如意目今家事改革ニ付右家作

可及売却ト被告ヘ明渡ノ義及催促タルニ万延年度

建築費銀三拾五貫目可及償却旨申立双方確証ハ

無之代価高低不決ヨリ曩時ヘ溯リ公正ノ評價ヲ為サ

セタルニ銀拾壹貫貳百貳拾五匁余此金百四拾五円九拾

三錢四厘ト沽計相成ルニ付前八貫目ヲ扣除シ殘銀三
〔二六六A〕

貫貳百貳拾五匁余之ヲ償ヒ被告ヨリハ家稅滯ハ皆済

ノ上家作明渡與度旨申立タリ

被告ハ原告申立ノ建家売渡ノ義ハ往時幼少ニテ確

ト存セサレトモ凡ソ四十ヶ年前売渡シ其俣借家致スナレトモ

追テ大破ニ及ヒ万延年度古家ハ原告ヘ返シ示談ノ上更ニ

改造ス其三拾八坪ノ建築費銀貳拾三貫八百七拾九匁

余相掛ル中銀五百目ハ度々ニ九郎右衛門ヨリ償却

受ケ將タ家稅八月々銀貳百貳拾匁宛弘化元年^{*}ヨリ

^{*}西曆一八四四年

明治五年^{**}マテ之ヲ払ヒ尤地稅其他入費ハ原告ニテ上納

^{**}西曆一八七二年

ス其已後部屋物置土藏等補理致悉皆銀三拾五貫目

余相掛タルヲ原告於テ手許帳記ノ通銀八貫目償却

及ヒタレハ夫ニテ建築調フタリト申立双方代価高低ヲ生

シ何レモ無証拠確定不成ヨリ原被立會ノ上曩時ヘ

〔二六六B〕

溯リ公正ノ評價ヲ為サセタルニ銀拾壹貫貳百貳拾五匁

余此金百四拾五円九拾三錢余ト沽計相成リタレトモ其

価額ニテハ多分ノ損失且原告ト共有ノ姿ニアレハ右

家作ハ売却ノ上自分出金高ノ内銀五貫目ヲ扣除シ

残銀拾八貫八百七拾九匁余ハ償却受度然ラサレハ
此度原告ノ求メニ応シ難キ旨抗弁シタリ
依テ判決スルヲ左ノ如シ

第一條

被告ニ於テ該家屋ハ凡四拾ヶ年前ヨリ借用セシ処万
延元年ニ至リ原告ト協議ノ上旧家屋ヲ毀テ原告ヘ
還付シ被告ニ於テ当今ノ家屋ヲ新ニ建築シ其費用
銀貳拾三兩八百七拾九匁分ノ内ハ銀五貫目原告ヨリ
貰ヒ受ケタル心得ニテ收受セシマテニテ其余ハ悉皆被告ニ
〔二六七A〕

於テ之ヲ出銀シ然シテ弘化元年ヨリ引續キ明治五年*

* 西曆一八七二年

マテ月々家賃銀貳百貳拾匁ツ、無滞原告ヘ收入セリ
故ニ該家屋ハ原被共有ノ姿ナリト申立ツレトモ家屋敷
ノ公務ハ原告〔二〕於テ之レヲ為シ且ツ新築前後同様ノ家
賃ヲ收入セシ旨被告親カラ陳述スル上ハ仮令作事
入用ヲ出セリト雖モ万延年間更ニ原被共有ノ姿ニ
ナリタリトハ設定シ難シ因テ該家屋ハ依然原告ノ
所有ニシテ作事入費ハ被告ノ立替タルモノトス

第二條

被告〔二〕於テ該家屋ノ賃借ハ年季ノ定メ之レ無キニ原告
方家事改革ノ趣キヲ以テ突然明渡シヲ催促スルハ

不服ニ申立レトモ明治六年*已來家賃ヲ收入セサルハ即チ

無年季借用ノ權ヲ被告親カラ放棄セシモノナリ因テ
〔二六七B〕

今更明渡シヲ拒ムノ權利之レナキモノトス

第三條

原告ニ於テハ該家作事ノ入費トシテ度々ニ銀八貫目ヲ
渡セシニヨリ其入費ハ充分セリト自己ノ手扣帳ヲ以申立
被告モ家作入費貳拾三貫八百七拾九匁分相掛リ其後
修補ノ代銀ヲ合計スレハ三拾五貫目余トナル旨自己ノ
帳簿ヲ以申立ツレトモ原被互ニ証印ナキモノニ付共ニ証
拠ニ相立タス

第四條

前條々ノ次第二シテ家作入費ノ多寡ヲ定ムルニ由ナシ因テ
原被告立会ノ上評価セシメタル沽計金百四拾五円
九拾三錢ノ額ヲ以テ該時作事入費ト見做シ其金額ノ
内被告者親カラ收受セシト陳述スル銀五貫目即チ
〔二六八A〕

金六拾五円ヲ扣除シ剩ル金員ヲ原告ヨリ被告ヘ償ヒ
該家屋ハ被告ヨリ原告ヘ明渡ス可シ

第五條

原告ニ於テ前ノ償ヒ金ト家賃淹滞金ト差引計算致シ度旨

明治 九（一八七六）年
十（一八七七）年

分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

五六〇（二五八）

ハ資料

申立ルト雖トモ家賃ハ本訴請求外ナルヲ以テ採用セス

〔二六八B〕

明治十年三月廿八日
掛七等判事 寛元忠印
主二級判事補 海野勲印
副四級判事補 高野薫印

〔二六九A・B〕

(家屋の見取図二葉・省略)

〔二七〇A〕【七九】【目次七七】^(出典)【耕地差縄之訴】

明治十年第四拾八号*

申渡

所長代理印** 山口縣第貳拾壹大區拾七小區

**「山嵯」の丸朱印

修道法字 四一卷 二号

五五九 (二五七)

須佐野頭村□□□番屋敷 平民

原告 K Y 文左衛門

***耕地差縄之訴 *** 欄外上部に「書類保存」の朱書き

山口縣第貳拾壹大區拾七小區

須佐野頭村□□□番屋敷 平民

被告 T M 政之進

其方共一件遂審理処

原告ハ父宇兵衛儀天保拾貳丑ノ年***野頭村半組

*** 西曆一八四一年

居住政兵衛ト申者ヨリ耕地四反九畝拾壹歩買得

致セル内壹反八畝式拾四歩ハ天保十三年弘化三年*

〔二七〇B〕

* 西曆一八四六年

兩度ニ父宇兵衛ヨリT M與市Y S文敬ノ二人ニ

売渡殘リ三反拾七歩ハ貢米諸石役等モ無滯

收納致シ来リタルニ明治七年七月T M政之進ヨリ

自分共ヘ係リ田畠山林差縄ノ儀山口縣聽訟課ヘ

出訴審問ノ末政之進ノ所有ニ相決シ速ニ土地引渡ス

ヘキ段明治八年九月十五日裁判申渡シ相成タリ然ルニ

政兵衛ヨリ売渡證書ハ嘉永五年三月*仏壇火事 * 西曆一八五二年

ノ節焼失シタルトモ現在買得以來貢米諸石役等モ

自分ヨリ收納シ且政兵衛分宇兵衛力記シタル下札ヲモ

所持シタルハ買得セシヲ判然タルニ付右耕作地政之進ヨリ

引渡サンヲ請求セリ

被告ハ所有耕地ノ内四町七反余ハ祖先ノ代ヨリ数人ヘ
下作致サセ来リシニ下作人共各自ノ所有ナト、故障申立ル

〔二七一A〕

ユヘ明治七年七月田畠山林差纏ノ儀山口縣聽訟課ヘ

出訴シ審問ノ末四町七反余ノ内三町四反余ハ文左衛門其外ノ者共
ヨリ自分ヘ引渡スヘキ段明治八年九月十五日裁判申渡
相成リタリ即チ此度文左衛門ヨリ訴出タル三反拾七步
モ三町四反余ノ内ニテ全ク我所有地タレハ今更加様ノ
故障申立ル筈ハ有之間敷旨答弁セリ

依テ判決スル左ノ如シ

原告人ニ於テ我所有ナリト申立ル該訴三反

拾七步ノ耕地ハ既ニ先年山口縣廳ノ裁判ニテ

政之進ノ所有地ト決定シタルモノニテ其裁判不服

ナラハ明治八年第九拾三号公布控訴上告

手續ニ依リ期限内上等裁判所ノ覆審ヲ求ム

ヘキモノニシテ再ヒ初審裁判所ニ訴出ルノ筋ハ無之

〔二七一B〕

事

明治十年六月十四日

掛 一級判事補 山崎 萬幹 印

主 十六等出仕 鈴木 圓平 印

副 四級判事補 伏見 孝廉 印

〔二七二A〕 【八〇】 【目次七八】 【耕地差纏之訴】^(注2)

明治十年第七十一号*

五十四号*

所長代理 印**

** 朱書きと「山崎」の丸朱印

申 渡

山口縣第貳拾壹大區拾七小區

須佐野頭村□□□番屋敷 平民

原告 K G 安左衛門

山口縣第貳拾壹大區拾七小區

須佐野頭村□□□番屋敷 平民

右代人 K Y 文左衛門

耕地差纏之訴

山口縣第貳拾壹大區拾七小區

〔二七二B〕

須佐野頭村□□□番屋敷 平民

被告 T M 政之進

其方共一件遂審理処

原告ハ天保九年三月*茂作ト申者ヨリ耕地

四畝拾七步ト山壹ヶ所ヲ代錢七百目ニテ買得シ

其後内実ハO T辰藏ト申者ヘ譲渡セシニ右

耕地ハT M家所有ニテ小作売買ヲ許セシモノニ

有之段申立明治七年七月*被告政之進原告ニテ

* 西曆一八三八年

明治 九(一八七六) 年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號) について (二・完) 五五八 (二五六)

西曆一八七四年

山口縣聽訟課へ出訴審問ノ上明治八年九月十五日ノ裁判言渡ニテ売渡証文有之部ハ買

〔二七三A〕

得者ノ所有ニ決シタレトモ其節自分所持ノ買得

證文ハ家内ニ於テ紛失所在相分ラス終ニ

政之進ノ所有地ト相成リタルユヘ土地ハ被告政之進ヘ

引渡シタレトモ證書紛失ヲ残念ニ思ヒ地券狀ハ

今日迄引渡サス所持セシニ是ハ不条理ト悔悟

シタルニ付何時モ相渡シ可申然レトモ最前紛失

ノ證文ヲ見出シ買得ノ確証ヲ得我所有地ナルヲ

判然タレハ右耕地被告ヨリ速ニ引渡サンヲ請求セリ

被告ハ所有耕地ノ内四町七反余ハ祖先ノ代ヨリ

數人ヘ下作致サセ来リタル所下作人共各自ノ所有

〔二七三B〕

ナト、故障申立ルニ付明治七年七月田畠山林

差纏ノ儀山口縣聽訟課へ出訴審問ノ上

明治八年九月十五日裁判申渡シ相成即チ此度

原告訴フル所ノ四畝拾七步モ我所有地ニ相決シ

本地ヲモ受取リタルニ地券証ハ何カト故障申立

今ニ引渡サスシテ紛失ノ證書見当リタルヲ

幸トシ出訴シタル段甚不都合ノ儀ニ付原告ノ

求ニ応スヘキ次第ハ無之旨答弁セリ

依テ判決スル左ノ如シ

原告ニ於テ控訴期限モ過去リタルニ該地券

〔二七四A〕

証ヲ被告ニ渡サ、ルハ山口縣廳ノ裁判ヲ履行

セサルモノニシテ頃日證拠ヲ得タリトテ之ヲ

訴フルノ筋ハ無之事

明治十年六月廿三日

掛 一級判事補 山崎 萬幹 印
主 十六等出仕 鈴木 円平 印

副 九等出仕 重浦 芳介 印

〔二七五〕【耕地山林図面】

図面一葉（省略）

〔二七六A〕【八一】【目次七九】【山林差纏之訴狀】^{（注12）}

河野

明治十年一月八日

山林差縄之訴状*

* 上部に「書類保存」の朱書き

山口縣下第七大區一小區切山村

□□□□番地居住 農

OKD 一

明治十年第七号**

** 本行朱書き

(二七六B)

印*

*「河野」の丸朱印

本訴副戸長河村作一ニ於テ私有ノ山林
ヲ官林ニ併セ他ヘ払下ケシヲ取戻シ度ト
ノ儀ハ明治八年司法省甲第五号布告ニ依リ
当裁判所ニ於テ受理不及事

明治十年一月九日

預ケ金催促乃訴状

山口縣第貳拾大區□□***郡第九小區

恵夷須町□□□□番地居住 士族

T H 久次

明治十年第七拾九号**

** 朱書き

(二七七B)

該訴慶応二年*預リノ原証ナク明治七年**
ニ至リ之レヲ新成スルモ尚其起因ヲ知り
及ヒ義務ヲ確定スルノ詳認スヘキ明文ナク
并ニ之レヲ受ルノ人名ナキヲ以テ却下候事***

*** 本文、年月日とも朱書き

明治十年一月廿三日

印**

**「進」の丸朱印

(二七七A)【八二】【目次八〇】【預ケ金催促乃訴状】^(注2)

印*

寛

進

*「岩村」の丸朱印

明治十年一月廿二日

明治十年一月廿三日 却下**

** 朱書き

(二七八A)【八三】【目次八二】【対談金催促之訴状】^(注2)

明治十年

高野 印*

二月六日

*「高野」の小判型朱印

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

五五六(二五四)

ハ資料

対談金催促之訴状

山口縣下第拾大區拾小區大附
町□□番地 土族

I T 義助

明治十年

第百三十八号**

** 朱書き

〔二七八B〕*

該訴抵当ニ為スヘキ地券ノ

下書期限ノ日差出シタルヤ否

確認シ難ク將(タ)貸借ニ付別

ニ諸入費ヲ求ムルノ原因ハ

無之因テ無効ノ契約ト

シ不及受理候事** 印***

明治十年二月廿日

** 本文及び日付は朱書き
*** 丸朱印、判読困難

* 附箋を〔B〕として示す

修道法字 四一卷 二号

五五五(二五三)

** 「小助川」の丸朱印

明治十年三月十六日

内輪不熟之訴状

第九大區六小區東□□□□□□番

地居住 土族

K K 久仁

却下***

*** 朱書き

明治十年第百七拾五号**

** 本行朱書き

〔二七九B〕

該訴ハ訴答文例

第三章四項ニ抵触

スル以テ不及受理

候事*

明治十年三月十七日 印**

** 本文および日付は朱書き
** 「小助川」の丸朱印

〔二七九A〕【八四】【目次八二】内輪不熟之訴状^(注26)

新訴*

寛

小助川 印**

〔二八〇A〕【八五】【目次八三】売掛代金淹滞之訴状^(注28)

印* 印* 寛

海野 印**

所長代理 印**

山口縣第貳拾壹大區拾七小區

明治九年五月五日

*「岩村」の丸朱印二個
**「海野」の丸朱印

** 朱書きと「山嵯」の丸朱印

売掛代金淹滞之訴状

山口縣下第十三大區拾貳小區吉

田村□□□□番地居住 農

K S 甚兵衛

出訴為被告者失踪ニ付

證書

裏書ニ付ス** 印*

明治九年第三百三十五号*

*** 本文は朱書き
*「鈴木」の丸朱印
* 本行朱書き

(二八〇B)

(記述なし)

耕地差縄之訴

右代人

K Y 文左衛門

(二八一B)

平民

被告 T M 政之進

其方共一件遂審理処

原告ハ亡父清藏儀天保五年二月*清助ナル者 * 西曆一八三四年

ヨリ耕地貳反五畝八歩五朱代錢六百拾文目ニ

買得シ爾來貢米諸石役等モ無滞相調ヘシニ

T M政之進儀右耕地ハT M家ノ所有ニテ祖先

ヨリ小作致サセ来リ清助モ小作人ノ尅人ニテ

(二八一A) 【八六】 【目次八四】 【耕地差連之訴】
明治十年第三十六号*

申 渡

* 本行朱書き

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

五五四(二五二)

（八）資 料

小作人共ノ情願ニ依リ小作売買ヲ免シタルコトモ有之清助ノ売渡證文合計ノ石高坪付名寄帳トハ壹斗五升ノ差アリ此レ上リ石ト唱ヘ小作ヨリ備フル地主ノ利益米ナレハ小作売買タルコト判然ノ由申立レトモ明治四年八月T M政之進庄屋役交代

（二八二A）

T M利作役中ニ相成明治五年*ノ収納米額政之進

* 西曆一八七二年

役中トハ壹斗余モ減少シタルユヘ不審ニ相考穿鑿ノ上明治四年迄ハ上リ石ト云モノ相籠リ居ル由始テ承知セリ元來是迄貢米諸石役等他ノ地主ヨリ収納スル所ト同様ノコトニ相心得別段T M家ノ所得ト相成ル上リ石ナト申モノ籠リ居ルトハ一切存セサルコトテ庄屋ノ奥書押印アル売渡證文ノ前ヲ以テ買得致シタル儀ニ付我所有地ト相成リシコトハ無論ナルニ政之進ヨリ兎角故障申立ルハ不條理至極ニ付速ニ耕地ヲ引渡サンコトヲ請求セリ

被告ハ先祖以來第貳拾壹大區阿武郡須佐

野頭村ニ居住シ益田親祥旧領分庄屋役代々

相勤野頭村ノ内半組ト唱フル内ニ所有ノ耕地八町

（二八二B）

貳反余アリテ此内四町七反余ハ祖先ノ代ヨリ数人ヘ

修道法學 四一卷 二號

五五三（二五一）

小作為致其者等ノ情願ニ依リ小作売買ヲ差許シ證文ヘ奥書調印モ致シ来リタル所公簿ニ有之石高ノ外ニ上リ石ヲ相加ヘタルニテ小作売買タルコト判然タレハ數代庄屋役相勤ルユヘヲ以テ役名ヲ記シタルモノ歟或ハ買得主ニ於テ庄屋ノ二字ヲ後チニ書入タルモ難測トイエトモ全ク小作売買ニテ土地所有ノ權移ルニ非ルユヘ此度原告人ヨリ差出シタル天保五年二月*付清助

* 西曆一八三四年

ヨリ清藏ヘ売渡シタル耕地モ宝曆十三年五月**改

** 西曆一七六三年

坪付帳小村画面ヲ始安永九年六月***天保九年九月*

*** 西曆一七八〇年

* 西曆一八三八年

名寄坪付帳明治四年五月名寄帳迄T M家一名ノ所有地ニ之アリ畢竟清助モ小作人ノ其老人ニテ小作ノ売買ナルユヘ名前切替ニモ不相成且売渡証文（二八三A）

合計ノ石高公簿ニ記載之レアル石高ヨリ壹斗五升

相増シタルハ先祖ヨリ伝来ノ帳面ニ記シタル上リ石ノ

員數ト付合シ上リ石ハ即チ小作ヨリ備フル地主ノ利益

ヲ指ス一家ノ称呼ニテ小作人共ニ於テハ承知致シ居ルヘク

既今度ノ證文合計畠三畝貳拾壹歩米四升五合

三勺四才田貳反壹畝拾七步五朱米壹石七斗五升

九合五勺トアリ然ルニ一応ハ公簿ニ有之通り米壹石

六斗九合五勺ト記シ其六斗九合五勺ヲ墨ニテ消シ

傍ラニ七斗五升九合五勺ト書替有之是レ壹斗五升

ノ上リ石ヲ加入セシモノニテ上リ石籠リ居ルハ承知ノ上

買得セシ形跡ノ著明ナリ全体従前耕地ノ売買ナレハ

公簿ト合セサル石高ヲ記載スヘキノ謂レナク此等ニテモ

小作売買タルヲ判然タレハ原告ノ求ニハ応シ難キ

〔二八三B〕

旨抗弁セリ

依テ判決スル左ノ如シ

第一條 被告ニ於テ公簿ニ記載シアル石高ノ外

上リ石ヲ相加ヘタルニテ小作売買ノ證文タルヲ判然

スルニ付數代庄屋役相勤ムルユヘヲ以テ役名ヲ記シ

タル歟或ハ買得主ニ於テ後ニ庄屋ノ二字ヲ書入タルモ

難測段申立レトモ證書面役印取付ノ明文アリテ

原告ノ書入タルニ非ル事明カナリ畢竟前後ノ申分

自己ノ想像ニ出テ確タル証左無之ヲ以テ採用シ難シ

第二條 被告ニ於テ上リ石ハ即チ小作ヨリ備フル

地主ノ利益米ニテ該證書石高合計ニ上リ石加入

シアルヲ以テ小作売買ナルヲ判然タル旨申立ル

ト雖トモ原告ヨリ利益下シテ備ヘタルノ確證ハ开ニ小作

〔二八四A〕

売買タルノ明文モ無之且庄屋ノ名義ヲ以テ売買

聞届ル上ハ被告ニ於テ既ニ我所有ノ權利ヲ失シタルモノトス

第三條 前條ノ次第ナルヲ以テ小作売買タリトノ

被告申分難シ相立依テ證書ノ耕地貳反五畝余

速ニ原告人ヘ引渡スヘシ

明治十年六月十三日

掛 一級判事補 山崎 萬幹印
主 十六等出仕 鈴木 円平印
副 四級判事補 伏見 孝廉印

〔二八四B〕

（記述なし）

〔二八五A〕【八七一】目次八五【耕地取戻ノ訴】^(注19)

九年第八百九拾四号ヨリ九百廿四号ニ至ル*

申 渡

第二天區五小區錦見村□□

* 本行欄外右側に朱書き

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）

五五二（二五〇）

ハ資料V

修道法学 四一卷 二号 五五一 (二四九)

原告 K 可也

同大區同小區同村□□□□番屋敷 土族 F H 團右衛門代人

屋敷 土族

耕地取戻ノ訴

被告 T G 卯右衛門

第二大區三小區車村□□□□番屋敷 農 F O 又兵衛外四名 代兼 同村□□□□番屋敷 農

〔二八五B〕

同 S M 甚五郎

同村□□□□番屋敷 農 S D 常吉外七名 代兼 同村□□□□番屋敷 農 H K 栄吉外七名 代兼 同村□□□□番屋敷 農 F S 新左衛門倅 F S 新次郎 同村□□□□番屋敷 農

YM 多四郎外六名 代兼 同村□□□□番屋敷 農 T S 治三郎

〔二八六A〕

其方共忝件遂審理処

原告ハ標記地券之地所明治四年*官可ヲ得 * 西曆一八七一年
松下ケ受爾来被告 F O 又兵衛外三拾壹名ノ者江
別ニ約定書ハ取置カサレトモ小作致サセ来ル処種々
苦情ヲ鳴ラシ明治六年**已来加調米金不納ニ付其

** 西曆一八七三年

段県庁江願立尚大区扱処ニ於テ説諭アレトモ不旨
依テ明治九年七月中加調米金不納之上ハ土地可
引拂ト申聞ルモ更ニ清算致サ、ル而已ナラス地所モ
還附不致其上自己ニ立毛等引取理不尽ノ所業
有之ニ付旁以此上小作難為致依テ各自小作之地
所ハ速ニ還附致呉ル、様請求シタリ
被告ハ原告請求ノ耕地ハ過ル寛永度***村内不毛

*** 西曆一六二四(四四年)

地ヲ原告祖先 F H 喜兵衛代旧領主吉川家へ
〔二八六B〕

開墾願立許可ヲ得ル際 F H 家ニハ資力無之二付
自分共祖先へ依托ヲ受各自開墾スル処其後

元禄年度*開墾人ハ更ニ給地百姓トナリ地券

受タルニ維新之際藩籍奉還上地已後
* 西暦一六八八—一七〇四年

明治四年給主F Hハハ藏米ヲ以給与セラレ地所
ハ自分共名籍ニ改ル処明治五年七月中**右之地所ヲ

先給主ヘ更ニ私下ニ相成自分等ハ小作可致旨県庁ヨリ
** 西暦一八七二年

達有之ト雖自分名田之趣ヲ以テ不請申立再三
歎願スルモ不採用地券ハ原告ヘ下附ニ相成ニ付終ニ
明治九年四月中***裁判所江及定訴処却下相成リ

*** 西暦一八七六年

爾来再三呈訴スルモ採用不相成依テ同年七月月中

山口縣令江係リ土地引直之義ヲ大阪上等裁判所江及
詞訟処同十一月ニ至リ却下相成ニ付不得止本来

〔二八七A〕

一月初旬大審院江上告致スニ付同処裁判済迄

地所ハ還附難致旨答弁シタリ

依テ判決スルヲ左ノ如シ

被告江這回原告呈訴ノ地所ハ曩時各自

開墾地ナルヲ以既ニ上地後名称モ改リタルニ明治
五年七月中原告F H家江拂下ニ相成就而ハ

扨ニ下作可致旨公達有之ト雖右地所ノ由來

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完) 五五〇(二四八)
十(一八七七)年

ヲ申立地方廳江歎願スルモ採用ナラス地券ハ原

告ヘ下附セラレタリ依テ明治九年四月已來度々及

出訴末明治九年七月中山口縣令江係リ土地引直

ノ義ヲ大坂上等裁判所ヘ詞訟スルモ却下相成

ニ付終ニ明治十年一月大審院ヘ及上告ニ付

裁判済迄地所ハ還附致シ難キ旨申立ル

〔二八七B〕

ト雖右ハ地方官ヘ対シ地所引直シヲ訴フルモノ
ニテ聊当裁ノ詞訟ニ関セス目今地券ノ証原告
所有ニ判然タル上ハ地所ハ原告ニ還附可致事

明治十年二月廿二日

掛 七級判事 寛 元忠印
主 二級判事補 海野 勲印
副 四級判事補 高野 薫印

〔二八八A〕【八七一2】原告の申立書(佐田)

第二大區五小區錦見村□□

□番屋敷士族 F H團右衛門

代人 同大區同小區同村□□□□

□番屋敷士族

ハ資料V

原告 K 可也

申口

一 自分儀區内車村ニテ標記地券証ノ通去ル明治

四年*旧岩國藩ヨリ耕地私下ヲ受爾來被告 * 西曆一八七一年

FO又兵衛外三拾壺名ノ元江別段約定書ハ不

取置候得共小作致サセ来リ候処種々苦情

申立去明治六年己來加調米金不納ニ付終ニ明治

八年十二月**県庁江及歎願同九年二月中大區

** 西曆一八七五年

扱処ニ於テ各自江説諭有之候得共了承不致ニ付

〔二八八B〕

尚同年七月十二日加調米金不納ノ上ハ土地可引揚

因テ同月十八日迄ニ清算可致為万一清算不致節

ハ毛上共引揚候様申寄候処一同承服候于已後及

異変地所還附セサル而已ナラス自俣ニ立毛引取

理不尽之挙動モ有之傍以此上小作難為致

候間各自小作之地所ハ速ニ還附ノ程御裁判

奉願上候

右之通相違不申上候 已上

右

明治十年二月十五日

K 可也印*

*「簡」の印

修道法字 四一卷 二号

五四九 (二四七)

〔二八九A〕【八七一3】^(注)被告の申立書

第二大区三小区車村□□□□

□番屋敷 農

F O 又兵衛

同村□□□□番屋敷 農

N M 林 象

同村□□□□番屋敷 農

Y H 源十郎

同村□□□□番屋敷 農

T K 卯右衛門

同大区同小区向今津村□□□□

□番屋敷 農

Y M 善右衛門

右五名代兼

〔二八九B〕

車村□□□□番屋敷 農

被 告

T G 卯右衛門

同村□□□□番屋敷 農

S D 常 吉

同村□□□□番屋敷 農

F I 徳一郎

同村□□□□番屋敷 農

〔二九〇A〕

M M 藤 介
同村□□□番屋敷 農
Y I 秀太郎
同村□□□番屋敷 農
T D 平 吉
同村□□□番屋敷 農

F K 仁左衛門

同村□□□番屋敷 農

T Y M 林 介

同大区同小区向今津村□□番屋敷

農 M N 嘉 七

右八名代兼

車村□□□番屋敷 農

被 告

S M 甚五郎

同村□□□番屋敷 農

H K 栄 吉

同村□□□番屋敷 農

S T 四郎右衛門

同村□□□番屋敷 農

〔二九〇B〕

Y K 六三郎

〔二九一A〕

同村□□□番屋敷 農

T G 重次郎

同村□□□番屋敷 農

T T 捨次郎

同村□□□番屋敷 農

H D 吉之介

同村□□□番屋敷 農

F S 新左衛門

同村□□□番屋敷 農

F K 仁左衛門

右八名代兼

同村□□□番屋敷 農 F S

新左衛門倅

F S 新次郎

同村□□□番屋敷 農

Y M 多四郎

同村□□□番屋敷 農

Y D 代 藏

同村□□□番屋敷 農

N N 帑 吉

同村□□□番屋敷 農

ハ資料

F T 葆吉

同村□□□□番屋敷農

T S 治郎左衛門

同村□□□□番屋敷農

(二九一B)

Y M 甚楯

同村□□□□番屋敷農

S T 八郎左衛門

右七名代兼

同村□□□□番屋敷農

T S 治三郎

右申口

一 自分共儀原告代人K可也ヨリ訴上候耕地引戻

之義ハ過ル寛永三年中*村内不毛地ヲ原告FH

* 西曆一六二六年

團右衛門祖先喜兵衛代旧領主吉川家江開墾

之義願立許可ヲ得其係FH家ニハ資力乏ク

因テ自分共先祖ヘ開墾之依托ヲ受各自開拓

仕来リ寛文年度*相整ヒ而付已来追々人負相増シ

(二九一A)

** 西曆一六六一〜七三年

尚元禄年度*更ニ開墾人ハ給地百姓ト相成地券申

* 西曆一六八八〜一七〇四年

修道法字 四一卷 二号 五四七(二四五)

受公租納来リ候処維新後一般藩籍奉還ノ

際明治三年**上地被為候付給主FHヘハ藏米ヲ以御

** 西曆一八七〇年

下渡相成已後ハ銘々ヨリ貢米金上納致同四年***

*** 西曆一八七一年

地所ハ私共ノ下札名籍ニ改リ候処豈國ランヤ五年

三月中山口県支庁岩國出張所ヨリ官員出張

ノ上先般引揚ノ地所ハ更ニ給主FHヘ払下相成

ニ付地方百姓共ニ於テ故障ノ有無書面ヲ以可申立

段御達ニ因リ其源由相認願書差出候処

同年七月初旬ニ至リ願書御差下ノ上前地所ハ

先給主ヘ御払下相成ニ付其次第柄解シ難ク又然

嘆願書差上候処最早払下申付ル上ハ従前之

通下作可致段御処分ニ而付承服難仕再三

(二九一B)

山口縣ヘ願書差出候上果ハ惣代人ND善助ヲ以

九年四月中當裁判所江出訴致ス処訴狀却下ニ

相成已後若シ出訴スルモ御採用不相成依テ

同年七月中山口県令關口隆吉殿江相係リ土地引直シ

ノ義ヲ大坂上等裁判所江出訴致候処同十一月

七日御却下ニ相成不得止本年一月初旬尚又

総代人ND善助ヲ以大審院江上告致候就テハ

同處御裁判済迄御猶予ヲ得候度左候得共同人
歸村後速ニ地所引渡共否哉御答申上夫
迄地所引渡難段御答申上候

右之通無相違無未申上候 已上

右

〔二九三A〕

T G 卯右衛門 印

明治十年二月十五日

S M 勘五兵衛 印

F S 新治郎 印

T S 治三郎 印

〔二九三B〕
(記述なし)

〔二九四A〕【八七一4】^(注13)【控訴判決申渡の通知書】
第六百六拾七号*

* 本行朱書き

山口縣周防國第二大區三小區車村第
□□番地農ST四郎左エ門外廿五名
原告惣代同大區向今津村農MN嘉七
ヨリ同大區五小區錦見村□□番地
FH團右エ門へ係ル耕地取戻ノ詞訟
旧山口裁判所岩國支庁ニ於テ裁
判ノ末曩ニ右嘉七ヨリ控訴セシニ付
審問ノ上別紙ノ如ク申渡候條此
段及御通知候也

〔二九四B〕

大阪上等裁判所
明治十年八月一日 判事 武久 昌孚

廣寫裁判所長

判事 鳥居 断三 殿

〔二九五A〕【八七一5】^(注13)【裁決書】

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について (二・完)

五四六(二四四)

ハ資料

裁決書

山口縣周防国第二大区三
小区車村農 S T 四郎左
門外廿五名原告惣代
同国同区向今井津村農

M N 嘉七

大坂府下第三大区貳小区江
戸堀南通□丁目□番地
寓

京都府土族

S B 亨

原告惣代 M N 嘉七ヨリ被告山口縣第二大
区五小区錦見村□□番地 F H 團右エ門へ
(二九五 B)

係り耕地取戻控訴ノ要旨ハ本訴該耕地ハ往古
海岸ノ附寄洲ニ於テ漸々開墾セシ場所ナ

* 西曆一六六三年

ルヲ着手中寛文三年*旧吉川監物家来被告
團右衛門祖先ヨリ開墾ノ儀ヲ旧領主吉川家へ
申立其許可ヲ得テ寛永三年*元禄十六年*再度

** 西曆一六二六年

*** 西曆一七〇三年

ニ該耕地ヲ第壹号石盛帳ニ記載アルカ如ク團

修道法字 四一卷 二号

五四五(二四三)

右エ門祖先ニ於テ高受ケヲ為シ同家世襲ノ禄ニ加増
セラレ其後馳走銀ノ名目ニテ該耕地ハ原告ニ於テ勝
手ニ売買ヲ為シ右売買ノ節ニ第二号証拠
物ノ如ク F H 家ヨリ沽券状ノ書換ヲ為シ租税
ハ寛文度***以来田壹反ニ付米壹石畑壹反ニ付銀

*** 西曆一六六一一六七三年

六拾目ツ、年々 F H 家へ之レヲ差シ出シ来リシ
処明治三年*被告團エ門世襲ノ禄ハ村役 * 西曆一八七〇年
(二九六 A)

場ノ達ニ依リ廩米*ヲ以テ給与セラレ同家ノ給地ハ

*「廩」は米倉の意。切米・扶持米の別称とも。

引上ニナリシヲ以テ村役場ノ達ニ依リ明治三年ヨリ

ハ F H 家へ差出シ来ル貢租ヲ直ニ村役場へ

** 西曆一八七一年

納メ翌明治四年**ニ至リ該耕地ハ石盛替ニ

為リ此諸入費都テ原告ヨリ差出シタル第

三号証拠物ノ如ク原告ノ名前ニ改メ之レヲ

F H 家ヨリ買受ケ百年余之レヲ所有セシニ

*** 西曆一八七二年

明治五年九月中**突然該耕地ハ先給主 F

H 團右エ門ハ拂下ケ相成リタルニ付従前ノ通り

下作可致旨山口県岩国支庁ヨリ達セラレ其以
来屢歎願及フト雖モ採用セラレス抑該地ハ
既ニ石盛帳ノ節モ原告ノ名前ニ改マリタル

モノナレハ無謂引上ラル、ハ不当ノ所分ナルニ付第
(二九六B)

貳号沽券状*第三号明治四年改正ノ石盛帳簿

* 估券とも書き、土地・家屋諸職などの売却証文。
等ヲ証トナシ明治九年十月十三日**山口県庁へ

對シ元給地売下処分不服ノ儀ヲ当裁判所

** 西曆一八七六年

へ出訴及ヒシ処同年十二月七日該地所々有ノ

証相立ス下作タル事判然ナレハ県庁ノ処分

不当ナリトノ申分ハ不條理ノ旨ヲ以テ訴状却

下セラレ此程上告中ニ有之然ルニ明治九年十月

廿八日被告F H團右エ門ヨリ耕地引戻ノ儀ヲ

山口裁判所へ出訴シ同裁判所ニ於テ地券

証F H團右衛所有タル事判然ノ上ハ地所

團右エ門へ還附スベキ旨裁判セラレタレトモ該耕

地ハ第二号沽券状ノ如クF H家ヨリ買受

ケ爾來原告(ニ)於テ勝手ニ売買シ石盛帳モ

(二九七A)

原告名前ニ改マリシ上ハ原告ノ私有地ナルニ付
他人ニ引渡スベキ謂レナケレハ山口裁判所裁

判ハ不服ナル旨陳述スルト雖モ本訴不服ノ

條件ハ曩ニ山口県へ対シ出訴ノ趣旨ト同

一二シテ則チ明治九年十二月七日当上等裁判

所裁判ノ通り該地ハF H團右エ門へ可
相渡節ニ付受理ニ及ハス訴状却下候事

明治十年七月廿八日

大阪上等裁判所

(二九七B)

(記述なし)

(二九八A) 【八八】【目次八六】【家明渡並地券証名前換之詞訟】
(注) 明治十年第五拾八号*

所長代理 印**

** 朱書さと「横地安信」の丸朱印

裁判言渡稿

山口縣第九大區七小區

宮市町□□□地居住

原告人 商 A B 恭 輔

同縣同大區同小區

同町□□□番地居住

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について (二・完)

五四四 (二四二)

△資 料▽

被告人 商 HSG 十兵衛

其方共家明渡並地券証名前換ノ詞訟審理ヲ遂ル処原

被告人申立ル要領左ノ如シ

原告人ハ明治三年六月*被告人ヨリ建家并屋敷地ヲ讓受ケ代金三百
百 *西曆一八七〇年

式拾円ヲ相渡シ建家并屋敷地讓渡シ証書ヲ領収シ其際返リ

(二九八B)

証書ヲ相渡シ明治四年中*迄二右三百貳拾円ハ月別三両貳歩ノ利
息 *西曆一八七一年

ヲ加ヘ地所建家共受返シノ約ヲナシ就テハ借地料并家賃モ取り定
メス

其借地料并家賃ノ替リニ地所建家ニ関スル諸税ハ被告人ヨリ相納
メ来タリ然ル処明治四年ニ至リ被告人ニ於テ返リ証書ノ約ヲ履行
セス

依テ爾来家明渡シ地所引渡シ方共屢々督促ニ及ト雖モ種々ノ苦
情ヲ申立一切容諾セス遂ニ明治十年六月十二日**勸解庭ヘ願出タ
リト雖モ

尚ホ承允セサルニ付不得已這回上訴ニ及ヒタリ然ル処被告人ニ於
テ貳畝五

歩ノ屋敷地ヲ代金三百式拾円ニテ讓渡シタル義ニテ建家ハ讓渡シ
タルニ之

ナク旨主張セリト雖モ証書ニ家屋敷ト明記ノ通り屋敷地ハ勿論其

修道法学 四一卷 二号

五四三(二四一)

地

ニ建構ヘ之アル家屋モ讓受ケタルニ相違無之尤建家ノ間數間口并
瓦葺等ノヲ詳記セサル証書ヲ取置キタルハ全ク自分ノ粗漏ナレ共
自分ノ居住セル宮市町ニハ建家并屋敷地ノ売券証ニハ如此家屋敷
ト

記載スル慣習ニ之アリ且家屋敷ト記載アル上ハ屋敷地耳売渡シタ
ル

(二九九A)

ニ之ナクニ付速カニ被告人ヨリ建家明渡シ並地券証名前換ヲ受度
旨陳述シタリ

被告人ハ原告人ヨリ捧呈シタル証書ハ相渡シタルニ相違之ナクト
雖モ該

証ハ代金三百貳拾円ヲ收受シテ貳畝五歩ノ屋敷地耳讓渡シタル
モノニテ該地ニ建設之アル三拾壹坪ノ瓦葺建家ハ讓渡シタルニ之
ナク

ニ付終ニ地所受取り方ノヲ原告人ヘ掛合ニ及フ処原告人ニ於テ
建家

ト共ニ相渡スヘク旨意外ノ不條理申立ルニ付今日迄地所引渡シ方
遷延相成タリ而シテ右証書ニ家屋敷ト記載アルハ蓋シ自分居住
ノ宮市町ニ於テハ屋敷地耳売渡ス節ハ如右家屋敷ト記載スル風
習ナリ仍テ縱令家屋敷ト記載之アリタリト雖モ決テ建家ヲ売渡
シタルニ之ナクニ付貳畝五歩ノ地所券証名前換ハ速カニ原告人ノ

求メニ

応スヘク共建家ハ前陳ノ次第ニ付原告人ヘ明渡ス義務無之旨
弁駁シタリ仍テ原被告ノ口供并証拠書ニ因リ判決スル左ノ如シ
〔一九九B〕

第一条

明治三年六月被告人ヨリ原告人ヘ授与シタル讓渡証書題目ニ（讓
渡申家屋敷之事）*ト明記アリテ又証書本文中処々ニ（家屋敷）**
ノ

*** カッコ○は朱書き

文字ヲ現出シ一ツモ屋敷ト耳掲載シタル文字ヲ見ス是ニ由テ之
ヲ觀レハ屋敷地ハ勿論其地ノ建家モ売渡シタルヲ明昭タリ
然ルニ被告人ニ於テ無根ノ弁ヲ以テ右証書ノ明文ヲ取消シ建家
ヲ明渡サザルハ甚タ不條理ナリトス

第二条

前条ニ説明スル筋合ナルニ付原告人要求ノ通り被告人ヨリ三拾壹
坪ノ瓦葺建家ヲ明渡シ并其屋敷地貳畝五歩ノ券証名前
換ヘ致スヘキ事

明治十年七月十七日

掛 八等出仕 横地 安信 印
主 十六等出仕 小島 範一郎 印

〔三〇〇A〕

副 判事補 鈴木 円平 印

〔三〇〇B〕

（記述なし）

〔三〇一A〕【八九】【目次八七】【貸付金出入之証狀】^{（注）}

第八十六号*

* 本状はすべて朱書き

貸付金出入ノ訴 原告 K T 藤兵衛
明治九年身代限 被告 N H 竹次郎
訴訟記録中ニ在リ
タリ

〔三〇一B〕

（記述なし）

△資料▽

〔三〇二A〕【九〇】【目次に掲載なし】【貸金出入之証】
(法務)

明治九年三月十五日裁許申渡□□□*

同十年九月七日 示談身代限済口*** 二行は欄外右側に朱書き

奉 渡邊 渡印*** 「ワタル」の朱丸印

印*

長官 大属

印*

*「木梨」の丸朱印
*「進」の丸朱印

山口縣第二天區玖珂郡川西村居住

商 K T 藤兵衛 代言人 同村居住

士族

原告代言人 福屋 卷 允

貸金出入訴

〔三〇一B〕

同縣同大區同郡向今津村居住 士族

被告人 N H 竹次郎

右訴訟遂吟味候処原告代言人福屋卷允申立

候者明治六年*八月ヨリ九月ニ至リ正綿切手三十本外

現綿二十五本買込

*西曆一八七三年

修道法字 四一卷 二号

五四一 (二三九)

現綿二十五本 外二切手**

**以下、朱書き

西六月限	預切手	○印
繰○綿印	壹本 定	
右水火難不存	○印	
申十一月廿三日	連帆町	
綿會社	印	
二千七百三十一番 朱書		

明治六年十一月廿七日會社
廢止
是迄差出置切手同年十二月
十五日限通用免止ノ事
岩國支廳ヨリ布令有之
*** 以上、朱書き

所持致居候処同年九月廿二日綿仲買MO

〔三〇三A〕

太郎左衛門外二名ノ口入ヲ以テ被告人N H 竹次郎

エ右正綿五十五本々別十円二十錢物計五百六十一円

ニテ売渡シノ約定致シ本日連帆町綿會社へ現

綿并切手トモ悉皆收入シ現綿ハ束テ二十五本ノ

預リ切手并本別切手三十本ハ會社ヨリ封印シ質物トシテ

受取

覚*

*本行以下は朱書き、上部に割印

一 正綿切手二十五本 定

□□嘉介存

右之通預リ置申候 以上

酉 九月廿二日

連帆町

綿會社

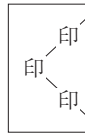
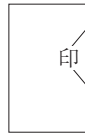
書印

〔三〇四B〕

表 白紙



裏



*** 本行まで朱書き

外ニNH竹次郎名前ニテ十一月十五日限双方取引可致
約定証書并底質トシテHJ善衛門名前之地券
尅通トモ口入人ヨリ受取置旨申之

覚***

*** 本行以下は朱書き
欄外上部に「甲」の朱書き

一 正綿切手五十五本也
代金五百六十一円也

本別拾四二十銭ニシテ

〔三〇四A〕

右之通買入方之約定相違無御座候則代金請渡

之儀ハ来ル十一月十五日限り双方取引一度候右約定高下

もの之儀ニ付私所持之田畠と津仲二ノ割一ノ切御奉書一通底

質トシテ御渡置申候間万一不埒相成候時ハ御勝手

ニ御取引一己□候後日異儀不申候尚日費附御渡

致申候仍テ證文如件

明治十年酉ノ

九月廿二日

HJ善衛門代

NH 竹次郎 出判

K T 藤兵衛 殿*

* 本行まで朱書き

被告人ニ於テハ口入人ヲ以テ原告藤兵衛ヨリ正綿
五十五本々別十円廿拾銭惣計五百六十一円ニテ連帆時綿會
〔三〇四B〕

社へ買込ノ源綿仲買TN為楯外三名ヲ以テ約定シ本日悉皆

会社へ收入シ二十五本ハ預リ証会社より差出シ三十本ハ封印

シ相渡外ニ代金引渡之儀ハ十一月十五日限り双方取引ノ約定

書ニ第HJ善衛門所持之古券状別段取曳ニ致シ自分預

置候分共綿相場高下もの之儀ニ付底質トシテ一時相渡スト雖

モ地主善衛門ニ於テハ承諾之訳ニハ無之候得共否無之

見込有之ニ付右古券状設入証書ヲ原告藤兵衛名宛ニシテ

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

五四〇(二三八)

△資料▽

相渡置然ト雖モ全会社トノ取組ニテ自己ノ商法ニ無之旨申之

原告代言人ニ於テハ右受取置ク約定書ノ体裁且底

〔三〇五A〕

質之地券状帰リモ無之因テ地処書人成規ノ書体

ニ整替具様口入人共ヘ及掛合ト雖モ不埒明ニ付同年

九月三十日ニ至リ底質ノ地券代価之目途ヲ以テ四百円

金高ニシテ借用証文ニ整替書体之儀ハ口入人方ニテ

相認残り百六十一円ノ前ハ封印之切手質物相約シ慥成

儀ト存シ其証書ヲ口入人ヲ以被告人方ヘ持参別段

書体旁否無之落着之上名下押印且印紙消印

等致具候ニ付其節地下役座之奥書等ハ口入人三人共より

相運ヒ公証之証書受取置旨申之

乙* 借用証文之事

〔三〇五B〕

十錢印紙四枚*

一金四百円定

七番向今津沖社開テ割一ノ切一反四畝二十三歩ノ内

一 田壹反貳畝貳拾四歩

同元ノ内明治二三年ヨリ畠城田ニ改

一 田壹畝貳拾九歩

* 本行以下朱書き

* 欄外右側に朱書き

但利息月壹歩ニシテ

米九斗六升

〃壹斗四升七合

修道法字 四一卷 二号

五三九 (三三七)

八番元大麥四畝十七トノ内

一 田壹反貳畝十九歩

同元ノ内明治二巳ノ年ヨリ城田ニ成

一 田壹畝貳拾八歩

九番元壹反四畝十三歩ノ内

一 田壹反貳畝十三歩

元ノ内明治二巳ノ年ヨリ畠城田ニ成

一 田壹畝貳拾七歩

十番元壹反四畝四トノ内

一 田壹反貳拾八歩

元ノ内明治二巳年ヨリ畠城田ニ成

一 田壹畝貳拾六歩

右之金借用致候処実正也 仍テハ当年十一月

〔三〇六A〕

十五日限り元利ニテ無滞可致皆済候若至期限

及違約候ハ、服書之質品引渡可致候間勝手

ニ御捌可有之候仍而為後證村役座親割組合

印形取付相渡候一札如件

明治六年

西九月三十日

K T 藤兵衛 殿

右NH竹次郎借金ニ付而ハ服書ノ入質品他人ニ掛合

H J 孝次郎 代

N H 竹次郎 実印花押

無之拙者共承知いたし候 以上

同日 親類

TY 久米三郎 実印

右NH竹次郎借金ニ付約定ノ趣證人ニ相立質

〔三〇六B〕

品取調候処無相違候自然借金返弁不埒之節ハ御損モ無之様拙者共可致取捌候 已上

證人 KT 為次郎 実印

前書之通御帳面相改相違無之本人返弁

不埒ニ立至り候時ハ地券調替御帳面切替相渡

可申候 以上

月日 畝頭

KYS 孝十郎 実印

副戸長

藤屋

節 実印

第二百五十七号*

* 本行まで朱書き

被告人ニ於テハ右証書類証人之奥書并HJ

〔三〇七A〕

善衛門代トノ記載モ無之畢竟土地位付ケ立四百円

金高半途ノ證書持參致来リ名下押印印紙

消印致呉候様達テノ□申分ニ任セ容易印形致ス

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』

(民事第三四號) について (二・完)

五三八(三三六)

ト雖モ全ク綿代金ヲ借用証書ニ整替致ス心得ニハ無之其証摺ハ四百円借用金モ不受取切手モ原告人之手ニ所持致シ候ノミナラス代金五百六十一円ノ前ニテ百六十一円モ相違有之然レ共其申分モ記載無之且地主ノ証無之テハ書入ノ書体ニ地下役座之奥書取付相成カタクハ当然ナリ然ルガ公証之証書ニ取替候ハ原告人共ニ於テノ取計旁不〔三〇七B〕

落着素ヨリ四百円借用致シ候覺無之ニ付而ハ證書面ニ依リ返弁可致條理無之旨申之

引合人共ニ於テハ原被之間モ正線売買口入致シ

明治六年九月廿二日原告人ヨリ本日連帆町綿会

社ヘ五十五本々別十円二十錢ニテ原告人ヨリ悉皆藏

入致即金難調趣ニテ二十五本ハ会社ヨリ預リ切手ヲ遣シ

三十本ハ同処ヨリ封印シ相渡外ニ被告人名前ニテ甲

印証書并HJ善右衛門名前之古券状尅通被告

ヨリ受取原告人ニ相渡置候処右証書并底質之

地処□成規整替呉候様原告人ヨリ申来リ其趣

〔三〇八A〕^(注3)

被告竹次郎ヘ通達致処不殘明ノミナラス書体等不案

内ニ付調呉候様依頼ニ付綿代五百六十疋円ノ前ニハ候得共

切手モ有之儀ニ付地処直価相立乙印証書ニ整替付

次郎へ持参書体否相尋押印之儀申込候処否無之
落着之上押印致シ地下役座印形等ハ債主ニテ取付候
様口上ニテ依頼有之因テ自分共其運ヒ致シ公證ノ
証書ヲ原告藤兵衛へ相渡置候処此度竹次郎即藤兵衛
より訴ラレ答弁ニ右証書ハ半途ノ証書ノミナラ

ス日ノ善右衛門代トノ記載モ無之ヲ公証ニ取替候ハ
原告人ニ於テノ取計不着落反古同様ト申立候ヨリ引合

(三〇八B)

ヒ仰付証書一見仕候処最前被告人へ持参致候節モ
聊相違無之素ヨリ墨色等モ無相違証書中借用

ノ明文且村役宅親類組合印形取付ル云々ノ明文記載有之
已上ハ反古同様ト申立候謂無之旨申之

副戸長畔頭ニ於テハMO太郎衛門外二名ヨリ負債有之
NH竹次郎債主KT藤兵衛ニ当ル金四百円借用証書ヲ
持参致シ検印ヲ頼来ルニ付証書改ムル処日善衛門ノ地処
書入親類等之連署ノ証書ニ付便利ニ依テハ一人数名
ヲ唱ル旧来ノ習慣等之アル義故障無之事ト誤テ

旧習ニ泥ミ検印致シ其後地券改正後HM善左衛門

(三〇九A)

之所有地タルヲ知レ共爾来等閑ニ打過候次第恐縮
之旨申之

原告代言人ニ於テハ証書面約定期限ニ至リ代金受度

旨及掛合ト雖モ弁償難相成様不埒申立必至難決ニ立
至リ因テ受取置借用証書之金高四百円并約定利足
ヲ加ヘ返済致呉候様請求スル旨申之

被告人ニ於テハ証書面期限ニ至リ原告ヨリ請求致来候
得其其節ハ会社ヨリ現綿他へ貸綿致シ未タ仲買之者ヨリ
仕供不致ニ付其節ハ引渡シ相成兼候得其約定之儀其是
非トモ代金引添切手五十五本ハ会社へ收入可致手筈ニテ彼

(三〇九B)

是及延引中明治六年十一月廿七日忽然会社廃止相成候ニ付而ハ
諸問屋其他へ係ル取曳莫大之会社ノ損亡且綿切手ハ一切
纏兼心互難決ニ付即今弁償難相成旨申立タリ

右之通双方申立候ニ付條々引合候処原告人引合人

申立候者首尾符合シ被告竹次郎申立ハ正綿売買

ハ全ク自己ノ商法ニ無之会社トノ取組ヲ主張スト雖モ諸
証書中ニ会社ノ明文記載無之剩へ自己ノ名前ニテ抵当

物ヲ書入借用証書中ニモ村役座其他印形取付ル云々ノ明文

有之上ハ公証ノ証書ヲ原告ニ於テノ取計不着素ヨリ四百
円借用ノ覺無之ニ付而ハ証書面ニ依リ弁償可致條理

(三一〇A)

無之下ノ申分ハ無証拠ニ付難取用因テ証書面金高
ニ利足ヲ加算シ身代限ヲ以テ償却為致方至当ノ見込
ニ付左之通申渡可相成哉相伺候也

訴訟入費ハ被告人可償筋至当ノ見込

民事ニ於テ裁判結局後被告N H竹次郎他ノ所有地
ヲ抵当物ニ書入ル、廉副戸長畔〔頭〕役等旧習ニ泥ミ右ノ証書
ニ検印スル廉等刑事ニ廻シ処分可相成哉

〔三二〇B〕

(記述なし)

〔三二一A〕【九〇一2】【目次に掲載なし】【貸金催促之訴】^(注10)

裁判申渡案

原告 周防國玖珂郡川西村 商 K

T 藤兵衛 代言人 同村三百廿壹

番地居住 土族

福 屋 卷 允

被告 同國同郡向今津村□□□

番地借宅居住 土族

N H 竹次郎

貸金催促訴訟遂審理処

原告代言人ニ於テハ所持ノ正綿貳十五本綿会
〔三二一B〕

社預券ヲ以テ三拾本合五十五本々別代金拾円
貳十錢總計五百六十壹円ニテ被告人エ売込約
定明治六年九月廿二日*連帆町綿会社へ悉皆相* 西曆一八七三年

渡ス処即金調兼ル由ニテ貳十五本預券并本別
券ニ封印セシ俵会社ヨリ受置外ニ田畠沽券狀
ヲ抵当トナシ同年十一月十五日決等致スヘキ
趣ノ書面トモ預リ置キシニ右沽券ハ公証ヲ受
サルニ依リ最前売買ノ際口入人MO太郎左エ
門外二名ヲ以テ被告人ニ掛合更ニ沽券面地所ニ当ル
金数ヲ四百円ト定メ公証ノ質入借用證文ニ改

〔三二一A〕

造セシメ領取セルニ依リ残百六十壹円ハ売掛
金タルヲ引去借用証文面元利金数ノ弁償ヲ受
度旨請求セリ

被告人ニ於テハ綿売買約定手續等ハ相違ナシ
ト雖モ元来買方ハ綿会社ニシテ自分頭取タル
ユヘニ代金調達方ニ差支ヘH JノH M善左エ門ヨ
リ預リノ沽券ヲ一時融通ノ為メ渡シ置ク処同
年九月三十日MO太郎左エ門外二名ヲ以テ金

四百円ノ借用右地所書入ノ證文ヲ認メ来リ前書面ト取換名下捺印々紙消印等致シ呉ル、様

(三二一B)

申スニ付一見セシニ証人奥書及ヒH Jノ善左エ門代ノ文字モ無之ユヘ半途ノ書面ニ付地位ヲ評価スル儀ト心得容易ニ其求メニ応シタリ然ルニ今般出訴セシニ依リ右証拠ヲ檢スルニ全ク公証ノ証書ニ模擬スルト雖モ地所々有者ハ全クH M善左エ門タレハ原告及ヒ口入人共申合セ取捨ヘタルニ之レアルヘク殊ニ四百円ノ現金受取ラス綿預券原告ノ手ニ在リ及ヒ百六十壹円ノ相違アルヲ貸金トナスハ不当ニ付証書ニ依リ返金スヘキ條理ナク綿代金ハ即今

(三二二A)

手元難渋ユヘ償却成リカタキ旨ヲ答出タリ引合人M O太郎左衛門外二名ニ於テハ原被ノ間ニ正綿売買ノ口入ヲ致シ原告ヨリ本日約定前ヲ会社ニ收入シ双方取引ノ期限ヲ定メ甲印証書ニ被告ヨリ田畠ヲ抵当物ニ入置キ期限内乙印証書認替ノ節借用ノ明文且村役坐親類組合等ノ奥書取付云々ノ明文ヲ被告承諾ノ上押印シ自分共ヘ相渡ス以上ハ今更半途ノ証書杯

申立ル訳之ナキ旨陳述セリ

副戸長勝屋節畔頭役K Y S孝十郎ニ於テハ地

(三二三B)

主便利ニ依リ一人^{金主}数名ヲ唱ル旧来ノ習慣之アリ六年第十八号布告ニ基キ改正中ニテ借金主N H竹次郎并親類T Y久米三郎等連署ノ証書ユヘ故障ナキト誤テ旧習ニ泥ミ檢印シ七年* 改正済ノ期ニ至リH M善左エ門ノ所有地タルヲ知レトモ爾後失念ニテ錯誤ノ俣打過キシハ恐縮之旨陳述セリ

依テ判決スルヲ左ノ如シ

第一條 原告人ニ於テ地所質入公証ノ証書ナリトノ申立ハ證書受授ノ際沽券面持主ニ事実ヲ糺サス膏ニ證書面ノミニ泥ミ置シハ尚未タ

(三二四A)

尽サ、ル所アリ殊ニ副戸長畔頭役旧習ニ泥ミ違則已行シテ後被告人ノ所有地タラサルヲ判然タルヲ覺知陳述スル以上ハ質地糺売代金先取ノ權利ヲ有スルヲ得ヘカラサル者トス

第二條 被告人ニ於テ六年九月三十日*付ノ證書ハ原告方示談ニ依リ最前渡し置沽券面ノ地位ヲ評価スル心得マテニテ元来売買約定ハ原

告人ト綿会社間ノ取結ユヘ自分一己ノ關係之

ナク素ヨリ現金借用セシ儀モ之レ無キニ付證
書ニ依リ借金償却ノ義務アラサル趣ノ申立ハ

〔三二四B〕

九月廿二日付代金払渡し約定ノ覺書ニ已ニ自
分一名ヲ記シ仍ホ該證書面ニテ借用及ヒ元利返納

期限等瞭然タルヲ檢閲シ捺印済相渡ス上ハ已
ニ売掛代金払入約定ノ体面ヲ全ク貸借證ニ改

ムル者ニ付彼此トモ採用相成ナラス
第三條 右ノ次第二付原告人ニ於テハ被告人

ヨリ預ル所ノ綿預券并本別券封印ノ分及ヒ沽
券狀ヲ返却シ被告人ニ於テハ證書面ノ元利金

数^{*}ヲ計算シ身代限ヲ以テ償却スヘシ

^{*} 欄外上部に「元四百円利月一步」の朱書き

但 訴訟入費ハ被告人ヨリ可償

〔三二五A〕

右代書人

右引合人

右之通申渡旨其意得ヘシ

明治九年

山口縣廳

三月十五日^{*}

^{*} 日付は朱書き

三月十五日裁判申渡済^{**}

^{*} 本行は朱書き

〔三二五B〕

（記述なし）

〔三二六A〕【九〇一3】【目次に掲載なし】【揭示案】^{（注記）}

本務第七十二号 印^{*}

^{*} 欄外右側上部に朱書きと角朱印

明治九年三月十四日

渡 邊 渡 印^{**}

判 事 印^{***} 課長 印^{*}

^{**} 「ワタル」の丸朱印
^{***} 「木梨」の丸朱印
^{*} 「進」の丸朱印

一 左之通揭示可相成哉

揭示案

第二大區周防国玖珂郡第三小區

向今津村□□番地借宅 士族

N H 竹次郎

右之者第二大區川西郡 商 K T 藤兵衛代言人

〔三二六B〕

福屋卷允ヨリ貸金催促出訴及ヒ吟味之上

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所

「裁判言渡書」（民事第三四號）について（二・完）

五三四（三三二）

ハ資料

修道法学 四一卷 二号

五三三(二三一)

身代限申付候ニ付若NH竹次郎ニ係リ金穀其他

諸取引ノ訴有之者ハ当十五日より来ル五月十三日迄日数

六十日内ニ当県庁江 訴出ヘシ右日限過去訴出

ニ於テハ此度身代分散金ノ分配ニハ不差加者也

明治九年

【読下し了】

七 目 次 表 (二)

目次 番号	整理 番号	事件番号	事 件 名	出訴年月日	裁判(終局) 年月日	原告(人)	被告(人)	係判事・ 判事補	備 考
51	53	明治十年 九号	定約金違約之訴		明治十年 三月三二日	AU (商) キヌ 代人 UZ 惟章	MT (士族) 国一郎 代人 SD 忠之亮	進 鈴木 寛	
52	54	明治十年 一六七号	預(ケ)金催促之訴		明治十年 四月一四日	NT (士族) 喜一	KR (士族) 耕三	進 鈴木 山本	
53	55	明治十年 一六〇号	貸金催促訴		明治十年 五月四日	SY (農) 源右衛門 代人 NM 卯之助	ST (士族)* 傳之助	進 山本 高野	*引合人 IT 吉太郎
54	56	明治十年 五一号	證書取戻之訴		明治十年 五月九日	TT (士族) 瀧二郎	MU (士族)* 新太郎	進 鈴木 山本	*引合人 KB 源右工門

62	61	60	59	58	57	56	55
64	63	62	61	60	59	58	57
明治十年 九七号 訟	明治十年 九一号 貸金催促ノ詞訟	明治十年 五九号 貸金催促之訴	明治十年 六五号 貸金催促ノ詞訟	明治九年 九六六号 頼母子金淹滞之訴	明治十年 四〇号 預ケ証書取戻ノ詞訟	明治十年 五一号 貸金催促之訴	明治十年 一八二号 貸米催促之訴
明治十年 十月一九日	明治十年 十月二二日	明治十年 八月二四日	明治十年 八月二二日	明治十年 八月一五日	明治十年 七月二二日	明治十年 六月一九日	明治十年 六月二二日
ST (平民) 勇三郎	KB (平民) 勝十郎 OA 傳八	SK (土族) 昭介 KY 市郎	KI (土族) 半介	HO 市助 IH 清吉 (平民) 代人	AM 三郎右衛門 (商) 代人 TT 瀧次郎	AB 恭輔 (平民)	OB 宗之助 (平民) 代人 SB 敬三
NG 小兵衛	KB (土族) 吉右衛門 代	MT 慎吾 ON 軌太郎 (土族) 代	UD 喜右衛門 (工)*	FI ラク MO 要人 TT 瀧二郎* 代人	Y 平兵衛 (商)*	MN 柳之進 (平民) 代人 NH 基祐	FI 吉兵衛 (平民) 代人 KG 休右工門
小島	横地 鈴木 小島	横地 鈴木 小島	鈴木 小島	横地 鈴木 小島	鈴木 小島	伏見 鈴木 山崎	山崎 鈴木 伏見
			OF 席介 *引合	FI 鉄之進 外八名 *引合	H 半植 *引合人		

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について (二・完)

五三二(二三〇)

69	68	67	66	65	64	63	
71	70	69	68	67	66	65	2 64 の
明治十年 一二五号	明治十年 一二一号	明治十年 一〇〇号	明治十年 一〇七号	明治十年 一〇八号	明治十年 六一号	明治十年 七七号	
寄附耕地取戻ノ訴	山林代価取戻ノ訴訟	貸金催促之訴訟	貸金催促ノ訴訟	貸金催促之訴	立戻金催促ノ詞訟	貸金催促ノ詞訟	預ケ莚取戻ノ控訴
明治十年 二月十日	明治十年 二月七日	明治十年 二月二九日	明治十年 二月二一日	明治十年 二月一九日	明治十年 十月一五日	明治十年 十月一三日	明治一二年 四月
K M (士族) 代人 正作	F Y (平民) 代人 助三	E G (商) 代人 清吉	M T 外三名 伊右エ門	I H (平民) 代人 清吉	H M 利吉	F I (平民) 代人 清吉	K B 勝十郎 代人 松次郎
Y I (住職) 代人 龍苗	M H 大道	A B (平民) 清八	O N (土族) 代人 小次郎*	O N 孫右衛門	Y M (農) 龜右衛門	T H (平民) 代人 孝藏	S B I 宇吉
竹内 鈴木 横地	竹内 鈴木 横地	鈴木 横地	鈴木 横地	竹内 鈴木 横地	鈴木 小島 横地	鈴木 小島 横地	し* (記載な み)
		K T 治兵衛		*引合 外二名 フテ			*大阪上等裁判所の記載の み(控訴審判決)

77	76	75	74	73	72	71	70
79	78	77	76	75	74	73	72
明治十年 四八号	明治九年 五〇六号	明治九年 三二六号	明治十年 九八号	明治十年 一二二号	明治十年 一二六号	明治十年 一二四号	明治十年 一二二号
耕地差縄之訴	貸家明渡ノ訴訟	質地取戻之訴	捕鯨漁器械並鯨漁差 縄之訴	貸金催促之訴	預ケ品取戻シノ詞訟	貸金催促之訴	貸金催促之訴
明治十年 六月一四日	明治十年 三月二八日	明治十年 一月二五日	明治十年 一二月二七日	明治十年 一二月*	明治十年 一二月二六日	明治十年 一二月二四日	明治十年 一二月一三日
KY (平民) 文右衛門	IT (商) 直之丞	FY (農) 増太郎	ST 外八名 清之丞	ON (平民) 軌太郎	KG (平民) 休右衛門	AB (平民) 恭輔	TN (平民) 判兵衛
TM (平民) 政之進	ISJ (商) 萬右衛門	FM (農) 源六	SK 外二名* 平左衛門	IH (平民) 清吉	TM (平民) 重平	YS (平民) 萬藏	HS (平民) 富五郎
伏見 鈴木 山崎	高野 海野	寛 鈴木 河野	日比 鈴木	横地 鈴木	横地 鈴木	横地 鈴木	横地 竹内
			村田 祥一 *引合	*日付なし			

85	84	83	82	81	80	79	78
87	86	85	84	83	82	81	80
明治九年 八九四号	明治十年 三六号	明治九年 三三五号	明治十年 一七五号	明治十年 一三八号	明治十年 七九号	明治十年 七号	明治十年 一七一号 五四号
耕地取戻ノ訴	耕地差違之訴	売掛代金淹滞之訴状	内輪不熟之訴状	対談金催促之訴状	預ケ金催促乃訴状	山林差違之訴状	耕地差違之訴
		明治九年 五月五日	明治十年 三月一六日	明治十年 二月六日	明治十年 一月二日	明治十年 一月八日	
明治十年 二月廿一日	明治十年 六月一三日	(年月日記載 なし)証書裏 書二付ス	明治十年 三月一七日 却下(不受 理)	明治十年 二月十日 不受理	明治十年 一月二三日 却下	明治十年 一月九日 不受理	明治十年 六月二三日
FH (士族) 團右衛門 代人	KY (平民) 文左衛門 代人	KS (農) 甚兵衛	KK (士族) 久仁	IT (士族) 義助	TH (士族) 久次	OKD (農) 一	KG (平民) 安左衛門 代人
FO (農) 外四名 又兵衛	TM (平民) 政之進	(記載なし)	(記載なし)	(記載なし)	(記載なし)	(記載なし)	TM (平民) 政之進
寛 海野	伏見 鈴木 山崎	鈴木 海野 岩村	寛 小助川	高野*	進 寛 岩村	河野 重浦 鈴木 山崎	
外七名 代兼 *SD常吉				*その他は判読困難			

4 87の	3 87の	2 87の	
六六七号			ヨリ九二 四号二至 ル
〔控訴審判決申渡の 通知書〕	〔被告の申立書〕	〔原告の申立書〕	
	明治十年 二月一五日	明治十年 二月一五日	
明治一二年 八月一日			
	〔記載なし〕	FH 團右衛門 (士族) 代人 K 可也	K 可也
	FO 又兵衛 (農) 外四名 代兼 TG 卯右衛門 (農)*	〔記載なし〕	代兼 TG 卯右衛門 (農)*
武久昌孚			高野
大坂上 等裁判所 判事武久 昌孚より 廣瀨裁判 所長鳥居 断三宛通 知書	*SD常吉 外七名 代兼 SM甚五郎 HK栄吉 外七名 代兼 FS新次郎 YM多四郎 外六名 代兼 TS治三郎		SM甚五郎 (農) HK栄吉 外七名 代兼 FS新次郎 YM多四郎 外六名 代兼 TS治三郎 (農)

明治九(一八七六)年分山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

五二八(二二六)

			87	86	
3 90 の	2 90 の	90	89	88	5 87 の
本務一七 二号		明治九年*	明治十年 八六号	明治十年 五八号	
	貸金催促之訴	貸金出入之訴	貸付金出入ノ訴	家明渡並地券証名前 換之詞訟	〔裁決書〕
明治九年三月 一四日（揭示 案作成日）	明治九年 三月一五日	明治十年 九月七日 （示談身代限 済口）		明治十年 七月一七日	明治十年 七月二八日
福屋 卷允	KY 藤兵衛（商） （土族） 福屋 卷允	KT 藤兵衛（商） （土族） 福屋 卷允	KT 藤兵衛	AB 恭輔 （商）	ST 四郎左門 外二五名惣代 MN 嘉七 （農）
NH 竹次郎 （土族）	NH 竹次郎 （土族）	NH 竹次郎 （土族）	NH 竹次郎	HSG 十兵衛 （商）	SB 亨 （土族）
		進 木梨	渡邊	鈴木 小島	横地
示案	山口縣廳の裁判申渡案		明治九年身代限訴訟記録中 に在りたり *番号判読困難		大阪上等裁判所の裁決書

八 注 の 部 (二)

(注76) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注77) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注78) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注79) 明治九年太政官布告第九拾九号(七月六日 輪郭附『法令全書

明治九年』七三頁は、以下のように規定している。

「金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ譲渡ス時ハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ譲渡證書有之トモ仍ホ譲渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事」

(注80) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注81) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注82) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注83) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注84) 明治六年太政官布告第二百十五号(六月十八日)(布)『法令全書 明治六年』三〇〇〜三〇一頁は、代人規則として八箇条にわた

り、以下のように規定している。

「人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候条此旨相違候事

代人規則

第一条 凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ

代理セシムルノ権アルヘシ

但シ本人幼年等ニシテ其事理ヲ弁シ難キ時は其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二条 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ関係タル可シ

第三条 代人の能力(省略)

第四条 代人ハ総理代人部理代人ノ別アリ総理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五条 実印を押した委任状(略)

第六条 総理代人又は部理代人の別及びその委任した権限を委任状に明記すること(略)

第七条 委任状の書式(略)

第八条 代人を任ずる期限(略)「

(注85) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注86) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注87) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注88) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

明治 九(一八七六)年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』(民事第三四號)について(二・完)

五二六(二二四)

ハ資料

修道法字 四一卷 二号

五二五 (二二三)

印刷。

(注89) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注90) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「大坂上等裁判所」の印刷。

(注91) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注92) 明治五年太政官布告第三百号(十月七日)(布『法令全書 明治五年』二〇二頁は、第一項において以下のように規定している。

「一 華士族卒へ掛り候金穀貸借ハ明治二年己巳六月郡県の制被仰出候以前ノ分ハ裁判ニ不及候事」

(注93) 明治六年司法省布達第五十号(三月三十一日)『法令全書 明治六年』一七二六頁は、以下のように規定している。

「一 壬申第七月以前ノ金穀貸借ニテ既ニ同七月以前返済期限過タルハ同七月ヨリ五ヶ年の内出訴出サル者ハ不及裁判事」

一 壬申七月以前ノ貸借ニテ返済期限同七月後ニ係リタルハ期限後満五年ニ至ル迄一度モ訴出サル者ハ不及裁判事」

なお、同処欄外上部に参看と示してある、明治六年太政官布告第三百六十二号(十一月五日)(布『法令全書 明治六年』五六七～五七一頁は、いわゆる「出訴期限規則」である。

(注94) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注95) (注92)を参照。

(注96) 明治五年司法省布達第四十一号(十一月二十七日)『法令全書 明治五年』一三四二～一三四三頁は、

「太政官第三百号ノ御布告ニ基キ左之通可心得此旨及布達候事」とし、

その第一条および第五条において、以下のように規定している。

「第一条 華士族卒江掛ル金穀貸借ハ明治二年己巳六月二十五日以前ノ分ハ不取上翌二十六日以後ノ分ハ取上裁判ス可キ事 但シ華士族ヨリ平民へ係ルモ本条ノ通タルヘシ」

(中略)

「第五条 明治二年己巳六月二十五日以前ノ金穀貸借を新規證文ニ書改タル分ハ不取上事」

(注97) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注98) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注99) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注100) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注101) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注102) 明治六年太政官布告第二百四十九号(七月十七日)(布)『法令全書 明治六年』三三三頁は、以下のように規定している。

「神社仏事共古来所伝ノ什物紫庶寄附ノ諸器並ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家ノモノタリトモ自保ニ処分可致筋無之候条若不得已儀有之候ハ、委詳具状ヲ以テ教部省ヘ可申立候此旨布告候事」

(注103) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注104) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注105) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注106) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注107) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注108) 明治八年太政官第廿三号布告(二月二十日 輪郭附)『法令全書 明治八年』一八〇三二頁は、以下のように規定し、(別紙)にリスト(一九〇三二頁)を掲げている。

「從來雜稅ト称スルハ旧慣ニ因リ区々ノ收稅ニテ輕重有無不平均ニ付別紙稅目ノ分本年一月一日ヨリ相廢シ候尤右ノ内追テ一般ニ課稅スヘキ分モ可有之候得共差向收稅無之テハ營業取締差支候類

ハ当分地方ニ於テ改テ收稅ノ筈ニ候条此旨布告候事
但從前官有地借用右代料シテ米金相納候分ハ是迄ノ通可相心得事」

なお、第二十三号布告を掲載しているページの上部欄外に参看と示している明治八年太政官布告第百五号(六月十三日 輪郭附)『法令全書 明治八年』一二八頁は、以下のように規定している。「本年二月第三拾貳号布告蠶種製造組合条例第八条第三節中蠶種印紙稅左ノ通改正候条此旨布告候事」として、

第八条

第三節

全紙ヘ貼用ノ分 淡墨色 印紙壹枚ニ付 金六錢
分裁紙ヘ貼用ノ分 黄色 印紙壹枚ニ付 金壹錢五厘
但 從前ノ通」を掲げている。

(注109) 明治八年太政官第百九十五号布告(十二月十九日 輪郭附)『法令全書 明治八年』四四七頁は、以下のように規定している。「從來人民ニ於テ海面ヲ区画シ捕魚採藻等ノタメ所用致居候者モ有之候処右ハ固ヨリ官有ニシテ本年二月第貳拾三号布告以後ハ所用ノ權無之候条從前ノ通所用致度者ハ前文布告但書ニ準シ借用ノ儀共管轄庁ヘ可願出此旨布告候事」

(注110) 明治九年七月太政官第七十四号達(七月十八日 輪郭附)『法令全書 明治九年』三三二頁は、以下のように規定している。

「明治八年十二月 第貳百拾五号ヲ以捕魚採藻ノタメ海面所用ノ

儀ニ付相達置候処詮議ノ次第有之右但書取消シ候條以來各地方ニ於テ適宜府県稅ヲ賦シ營業取締ハ可成從來ノ慣習ニ從ヒ処分可致此旨相達候事」

〔注11〕 および〔注109〕を参照。

〔注112〕 〔注111〕を参照。

〔注113〕 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

〔注114〕 太政官明治六年布告第十八号（一月十七日）（布）『法令全書明治六年』二二一七頁は、以下のように規定している。

「府縣へ

先般田地永代売買被差許候二付目今質入書入致シ候節ハ左ノ規則ノ通可相心得事」として、十六ヶ條におよぶ「地所質入書入規則」を規定している。

〔注115〕 太政官明治七年布告第七十六号（七月十四日 輪郭附）『法令全書明治七年』六八頁は、以下のように規定している。

「明治六年 一月 第十八号布告地所質入書入規則左之通増補候條此旨布告候事

地所質入書入規則増補

第十六條

一 従前取結ヒタル質入書入ノ約定ニテ明治六年七月三十一日前二期限ヲ過去リタル分ニテ債主ニ於テ貸金返済方法ニ付延期ノ勘弁ヲ加フル者ハ来十月三十一日迄ニ其地所所管ノ戸長役場へ届出地所質入書入規則第九條ニ準シ奥書割印ヲ受クヘシ若シ右

日限内奥書割印ヲ受ケスシテ後日其證書ヲ以テ訴訟ニ及フ時ハ質入書入ノ証拠ニハ相立サルニ付裁判上釋売分配ノ時ハ先取ノ權利ヲ失ヒ質入書入ナキ貸借同様ノ処分ニ及フヘキ事」

〔注116〕 太政官明治七年布告第四百号（十月三日 輪郭附）『法令全書明治七年』一三七一三八頁は、以下のように規定している。

「地所売買致シ候節代金受取ノ證文有之トモ地券申受ケサレハ質主ニ其地所所有ノ權無之候條規則ノ通地券書替申請ヘシ若シ地券ヲ申受スシテ後日發覺スル時ハ罰金トシテ證印稅 地券書替ノ證印稅 壹陪ヲ科スヘク此旨布告候事」（細字は割注）。

なお、欄外上部に、「八年第百六号布告ヲ以テ改定」の注記がある〔注117〕を参照。

〔注117〕 明治八年太政官布告第百六号（六月十八日 輪郭附）『法令全書明治八年』一二八頁は、以下のように規定している（なお、本稿（一）〔注2の2〕を参照）。

「明治七年十月第百四号布告左ノ通改正候條此旨布告候事

地所売買致シ候節代金受取ノ證文有之共地券申受ケサレハ質主ニ其地所所有ノ權無之候條規則ノ通地券書替申請事」

なお、本布告により改正される前の明治七年第百七号布告（十月三日 輪郭附）『法令全書 明治七年』一三六一一三七頁は、以下のように規定している。

「地所売買致シ候節代金受取ノ證文有之トモ地券申受ケサレハ質主ニ其地所所有ノ權無之候條規則ノ通地券書替申請ヘシ若シ地券

ヲ申受スシテ後日發覺スル時ハ罰金トシテ證印稅地券書替ノ證印稅
壹陪ヲ科スヘク此旨布告候事」

(注118) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注119) 半葉二三行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注120) 明治八年太政官布告第九十三号(五月二十四日 輪郭附)『法令
全書 明治八年』一〇六―一二頁は、

「今般大審院並ニ上等裁判所ヲ被置候ニ付控訴上告手續別冊ノ通
相定候條此旨布告候事」として、別冊により「控訴上告手續」の詳
細な規定を置いている。本件に関する条文として、「凡ソ府縣裁判
所ノ初審ニ服セス、再ヒ上等裁判所ニ訴へ、覆審ヲ求ムル者、
之ヲ控訴ト云」(第一條)い、「控訴ハ民事ニ止マリ、刑事ニハ及ハ
ス」(第二條)「控訴ハ一タヒスルヲ得、再タヒスルヲ得ス」
(第三條)とし、第四條において「府縣裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ
為シタル時、原告被告ノ双方、又ハ一方ノ者、其裁判ニ不服ナル
時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ 裁判言渡ノ翌日より數フ 裁判言渡ノ
事理ヲ熟考シ、其翌日ニ至リ、控訴スルヲ得ヘシ、但シ訴訟案
件、商事ニ係リ、急速ニ控訴スルヲ要スルノ場合ニ於テハ、七
日内ト雖モ、控訴するヲ得、第五條は「府縣裁判所ノ裁判言渡
ヨリ三箇月 三十日ヲ以テ一月トスヲ過ルトキハ、控訴スルヲ許サ
ス」(本文)と規定し、「控訴ヲ為ス者ハ、其初審ヲ受ケタル府縣裁
判所ニ届ケ出ツ可」(第六條本文)く、その届出を受け取つた府縣
裁判所は裁判言渡の執行を停止すべく(第七條本文)、「上等裁判

所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ」(第八條)と規定して
いる。

なお、刑事事件は、大審院への上告が許され、「第四章 刑事上
告之事」と題して、第二十八條から第三十九條の諸規定がその手
続きについて定めている。

因みに、同年布告第九十二号(五月二十四日 輪郭附)『法令全
書 明治八年』一〇六―一〇七頁は、「今般東京大阪長崎福島四ヶ
所へ上等裁判所ヲ被置分轄左ノ通被定候條此旨布告候事」として、
上記四ヶ所の上等裁判所の管轄を定めている。それによると、廣
島縣、山口縣、そして愛媛縣は、いずれも大阪上等裁判所の管轄
に属することになる。

(注121) 半葉一〇行藍色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の
印刷。

(注122) 訴狀は無地の半紙に記載されたもの。裏面に却下理由が朱書き
されている。

(注123) 明治八年司法省布達甲第五号(五月二十九日)『法令全書 明治
八年』一七四六頁は、

「各人民ヨリ院省使府縣等ニ対スル訴訟ハ当分各上等裁判所ニ於
テ受理候條此旨布達候事」と規定している。

なお、同書欄外上部には、以下のような注記が施されている。

「甲第十四号布達參看十四年第二号布達ヲ以テ上等裁判所ハ控訴
裁判所十九年勅令第四十号ヲ以テ更ニ控訴院ト改ム」

〈資料〉

修道法字 四一卷 二号

五二一(二二九)

(注124) 半葉八行綠色縦罫紙、枠線に飾り、中央下部に「訴訟用」の印刷。

(注125) 訴状は無地の半紙に記載されたもの。却下理由を記した附箋が上記訴状の上に貼付されている。附箋をB面として示す。

(注126) 訴状は無地の半紙に記載されたもの。表には「却下」と朱書きし、事件番号と却下理由は裏面に朱書きされている。

(注127) 「訴答文例」は、明治六年太政官布告第二百四十七号(七月十七日)(布)『法令全書 明治六年』三二〇―三五三頁がこれを定めている。即ち、

「今般訴答文例並附録別冊之通被相定候ニ付来ル九月一日ヨリ原告人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事」とし、別冊として「訴答文例」を規律している。その第三章は、訴状ノ定則ノ事と題し、第六條は、「訴状ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ」(本文)と定め、その第四は、「訴状ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ(但書は、外国人の訴状について規定する)」と規定している。

(注128) 半葉八行綠色縦罫紙、中央下部に「訴訟用」の印刷。

(注129) 半葉二行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注130) 半葉二行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注131) 半葉二行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注132) 半葉二行茶色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

(注133) 半葉二〇行A五版大藍色縦罫紙、中央下部に「山口裁判所」の印刷。

印刷。

(注134) 半葉一三行茶色縦罫紙、中央下部に「大阪上等裁判所」の印刷。

(注135) 石盛は、斗代ともいう。太閤検地以降、見地によって公定された耕地・屋敷の反当たりの標準収穫量。石高制のもとで租税賦課の規準となる。石盛帳は租税賦課の基本台帳といえる。なお、石盛は、一八七三(明治六)年石高制とともに廃止された(高柳光寿・竹内理三編『日本史辞典』第二版 角川書店(昭和四九年))という。

(注136) 半葉一三行茶色縦罫紙、中央下部に「廣島裁判所山口支廳」の印刷。

(注137) 訴状は無地の半紙に朱書きされている。

(注138) 半葉一〇行綠色縦罫紙、中央下部に「山口縣廳訟課岩國出張所」の印刷。

(注139) 半葉一〇行藍色縦罫紙、欄外下部に「縣廳」の印刷。

(注140) 半葉一〇行藍色縦罫紙、欄外下部に「縣廳」の印刷。

(注141) (注144)を参照。

(注142) 半葉一〇行藍色縦罫紙、欄外下部に「縣廳」の印刷。

【補注】(1)簿冊の目次欄には番号は附けられていないが、整理の都合上、番号を附した。標題の項に、事件の整理番号とともに簿冊の目次番号を記すことにした。

(2)六(本文読下し(二))と七(目次表(二))の配置が逆になっ

ているのに気付いたのが校正の後だったため、そのままにした。

本稿は、科学研究費（基礎研究（C）「日本近代法史像の再検討——ゆらぎから再構築へ——」（平成二八年度～三〇年度）による研究成果の一部である。お世話になった山口地方裁判所、特に総務課・民事課の方々、ならびに本研究に関係の方々に対し深甚の謝意を表する。

なお、本稿は当初の事情に変更が生じたため、二回で掲載することにした。

〈執筆者紹介〉

矢野 達雄（広島修道大学法学部 教授）

加藤 高（広島修道大学 名誉教授）

紺谷 浩司（広島大学 名誉教授）

上川内 宏（広島修道大学 客員研究員）

明治 九（一八七六）年 分 山口始審裁判所『裁判言渡書』（民事第三四號）について（二・完）
十（一八七七）年

五二〇（二一八）